

うをい

取りにやれ。△さつき取りに遣りましたが、銀杏(ぎんぎょ)屋も、横町のも、うをぎれだと云うてぢやない

うをくし 魚串【名】魚を焼く時に刺す串。竹又は鐵などに作る。いをくし。

うをさき 魚崎【名】地。播磨國武庫郡にある町。住吉川の河口の東岸。造酒業盛んなり。別稱、五百崎(ごひゃくさき)。

うをしやうゆ 魚醬油【名】魚類又はその腸などを原料として製したる醬油。例へば鮎子(あなご)醬油、鰯(いわし)醬油などの類。

うをしらみ 魚藏【名】(動)藏の一種。形、扁平にして小さく、淡水に生ずる魚の皮膚に吸着して、害を與ふる蟲。

うをすみ 魚住【名】(地)播磨國明石町にある村。その東方なる江井(えい)ヶ島の邊は、古、魚住の泊(とまり)として、瀬戸内海の航路に當る港津として名高く、舊名は名す隅(すみ)と呼び、また魚住(い)とも書きしが、後世「うをすみ」と呼ぶに至れりといふ。

うをすみやき 魚住焼【名】陶器の一種。攝津國明石郡中尾より製出するもの。茶器を主とす。

うをせんべい 魚煎餅【名】魚肉を原料とし、煎餅のごとき形に乾し固めたるもの。

うをたか 魚鷹【名】(動)『魚を好み食ふよりいふ』みさ(鵜)に同じ。

うをだな 魚棚【名】魚類を上げおく棚。

うをだな 魚店【名】魚類を賣る家。さかなや。うを。

うをつ 魚津【名】(地)越中國下新川(しんがわ)郡にある町。富山灣に臨む。郡役所を置く。海上に往往々風氣樓を現出す。

うをつきりん 魚附林【名】魚族を集むるを目的とする森林。魚族の丘陵森林ある海岸に集まる習慣あるを利用したるなり。

うをつじやう 魚津城【名】越中國魚津にありし城。吉野朝方の椎名(か)孫八の築きしもの。後、板屋政廣・上杉謙信・柴田勝家等、これを領し、又、前田氏の有となり、元和元年廢せらる。

うをつなぎ 魚繫【名】魚を串に刺したることきさまに並ぶこと。魚貫(うがひ)。

うをう

うをづら 魚面【名】魚群の浮び來たるために、海面の一種特別の状況を示すこと。いをづら「漁夫の語」『魚づらが見えた』

うをつり 魚釣【名】魚を釣ること、又その人。

うをつりざを 魚釣竿【名】つりざを釣竿(つりざ)をさし、魚捕(とら)魚取(と)漁網の一部。魚群を追込みて最後にこれを集めて取揚ぐる部分。通常中央にありて、目を他の部分即ち袖(そで)肩裾(かた)などより密にす。いをあみ。おくあみ。

うをに 魚荷【名】魚の荷。魚をはこぶ荷。從經(しんけい)世置(よき)置(おき)上(うへ)からくだる魚荷(いさな)のもどり、歩き歩きの高はなし。

うをにかは 魚膠【名】魚類の皮、骨などより製したる膠。効用は、獸類より製したるものと異なるところなし。

うをぬまがは 魚沼川【名】(地)越後國にある川。三國嶺の東北より發し、北魚沼郡を過ぎて信濃川に合す。長さ二十一里。別稱、大野川・上田川・奥野川・輪倉津川。

うをぬまじんじや 魚沼神社【名】越國後北魚沼郡城川村に鎮坐せる縣社。祭神は天香語山(たかかた)命。舊稱、上彌彦(かみやま)神社。舊稱、鹽田(しほのたに)の商(かみ)きも寒(さむ)しうをのたな。

うをのめ 魚目【名】『魚類の目のごとく見ゆるよりいふ』手足などに、神經の乳嘴(にゅうすい)突起の變化發育して、白大豆のごとき形に堅くなられたるもの。いをのめ。いをめ。

うをばち 魚蜂【名】(動)蜂の一種。體小く、器物の穴などに巢を作る。

うをひしほ 魚醬【名】魚肉のしほから。鰯(いわし)鰯(いわし)などの字の左傍にある魚の字。

うをひん 魚偏【名】漢字の偏の一。鰯(いわし)鰯(いわし)などの字の左傍にある魚の字。

うをひみ 魚見【名】魚類の所在又はその群り來る状況等を見分けること、又その人、又その場所。場所は、陸上の高地又は海中に横(よこ)を設けなどし、又船中にて橋(はし)を利用し、或は特別に高臺を設けなどす。

うをみそ 魚味噌【名】淡泊なる魚類を加へて造りたる味噌。

うをや 魚屋【名】うをだな(魚店)に同じ。

え

え

發音【あ行第四の音。母音、舌を平常の位置より少し前方に進め、やこれを高めて、硬口蓋に近づけ、氣息によりて聲帯を振動せしめて發す。口の開き方は大抵おと同じくして、舌の位置よりいへば、いとおとの中間にあり。他のえ列の音は、や行わ行を除きて、皆この母音とよりの列の子音との結合より成る。や行のえは今は今全くあ行のえと同音なれども、上古にはその區別判然たりしが如く、あ行のは「依」「愛」「得」等の漢字にてうつせると、や行のは「毅」「江」「枝」「兄」等にてうつせり。わ行のあも、今日の發音には差別なれども、假名の形を異にせり。こは文字の形のみを存して、その音は早く母音となれるものとす。あゝの條下參照。長音はえの如く重ね記し、又はえの如く長音符を用ひて書く。本書は前者に依れり。あゝの條下參照。ええよりい又はひに連る時は、えの長音に發音すると多し。例へば、えいん(榮進)あかえ(赤鯉)の如し。他行のえ列の音も亦皆然り。例へば、けいあん(慶安)ていおう(帝王)の如し。この條下參照。四う又はふに連る時は拗音(おひ)となる。例へば、ひつえ(必要)ええふ(枝葉)をヒツヨーシヨ

と發音する類。他行のえ列の音も皆同じ。例へば、えいん(榮進)あかえ(赤鯉)の如し。他行のえ列の音も亦皆然り。例へば、けいあん(慶安)ていおう(帝王)の如し。この條下參照。四う又はふに連る時は拗音(おひ)となる。例へば、ひつえ(必要)ええふ(枝葉)をヒツヨーシヨ

え 兄【名】(兄)又あね(姉)に同じ。(弟)に對して「古語」大え「え姫」

え 胞【名】えな(胞)に同じ。「古語」起胞、え役【名】えだち(役)に同じ。「古語」起調

え 疫【名】はやりやまひ。時疫。疫病。えやみ。「古語」起疾疫、エノヤマヒ 大鏡時えのえおはしたま(枝)に同じ。「古語」起ほつえのえの末葉(つ)

え 肢【名】『身體の枝といふ意』てあし。四肢。「古語」起四肢、ヨツエ

え 江【名】海河湖などの、陸に幅廣く入込みたる處いりえ。和名江、衣、江海也

え 柄【名】器物の枝といふ意。器物の、手に取りやすからしむるために細く長くしたる部分。とつて。和名柄、器物茎柯也、衣一云、賀良

え 柄が長い【句】談話にむだごと多し。(但和名柄、字亦作柄、一名柄、衣)「古語」起柄、字亦作柄、一名柄、衣

え 梗【名】(植)えのき(梗)に同じ。「古語」和名梗、字亦作梗、一名柄、衣

え 在【名】(植)えま(荏胡荽)に同じ。「古語」和名荏、荏荏、衣

え 宴【名】えん(宴)の略。「古語」堤中納言集「京極の藤の花のえしはべりけるとき」

え 縁【名】えん(縁)の略。「古語」伊勢秋かけていひしなからあらなくに木の葉ふりしくえにこそありけれ

え 【副】『得の意。又え(善)の語幹ともいふ』よくあへて。(下)に打消の助動詞又反語の助辭來る。「古語」えしもえま(え)やえは等

え

1と發音する類。他行のえ列の音も皆同じ。例へば、えいん(榮進)あかえ(赤鯉)の如し。他行のえ列の音も亦皆然り。例へば、けいあん(慶安)ていおう(帝王)の如し。この條下參照。四う又はふに連る時は拗音(おひ)となる。例へば、ひつえ(必要)ええふ(枝葉)をヒツヨーシヨ

え 兄【名】(兄)又あね(姉)に同じ。(弟)に對して「古語」大え「え姫」

え 胞【名】えな(胞)に同じ。「古語」起胞、え役【名】えだち(役)に同じ。「古語」起調

え 疫【名】はやりやまひ。時疫。疫病。えやみ。「古語」起疾疫、エノヤマヒ 大鏡時えのえおはしたま(枝)に同じ。「古語」起ほつえのえの末葉(つ)

え 肢【名】『身體の枝といふ意』てあし。四肢。「古語」起四肢、ヨツエ

え 江【名】海河湖などの、陸に幅廣く入込みたる處いりえ。和名江、衣、江海也

え 柄【名】器物の枝といふ意。器物の、手に取りやすからしむるために細く長くしたる部分。とつて。和名柄、器物茎柯也、衣一云、賀良

え 柄が長い【句】談話にむだごと多し。(但和名柄、字亦作柄、一名柄、衣)「古語」起柄、字亦作柄、一名柄、衣

え 梗【名】(植)えのき(梗)に同じ。「古語」和名梗、字亦作梗、一名柄、衣

え 在【名】(植)えま(荏胡荽)に同じ。「古語」和名荏、荏荏、衣

え 宴【名】えん(宴)の略。「古語」堤中納言集「京極の藤の花のえしはべりけるとき」

え 縁【名】えん(縁)の略。「古語」伊勢秋かけていひしなからあらなくに木の葉ふりしくえにこそありけれ

え 【副】『得の意。又え(善)の語幹ともいふ』よくあへて。(下)に打消の助動詞又反語の助辭來る。「古語」えしもえま(え)やえは等

えい英〔名〕①すぐれたること 又その人
又そのもの。②〔地〕えいこく(英國)の略。
③はなぶさ。夢。

舟ひきねこし」**三**やいに同じ。「曳」盛衰
「このほど風氣ありて見参に入らずとい
へ、えい」**四**やあに同じ。狂言(二人大名)「え

食)を云ふ。「關西の語」
えいえふわかじふ 榮葉和歌集【名】(書
烏丸光榮(ヒツ)の歌集。

鋭角三角形 鋭角なる三角形。
【數】『英 Acute-angled triangle』三つの角

えいげふ

金を、中央銀行のごとき或中心に預け入ること。

えいげふじゆんぴふんりはふ營業準備分離法【名】(商)各銀行が分離して、各その必要と思量する準備金を貯ふること。

えいげふじよ營業所【名】(商)營業主の營業の本據たる場所。

えいげふじゆにん營業使用人【名】(商)營業補助人の一。營業者が營業のために使用する人。例へば支配人番頭手代小僧などの類。

えいげふじよく營業所得【名】(商)りじゆん利潤に同じ。

えいげふせい營業稅【名】(法)營業者に課する租稅。課稅の標準としては、營業上の資本を以てするもの、營業上の資本又は資本を代表するもの、或はこれと密接の關係あるものを以てするものあり。

えいげふせいしんさるん營業稅審査委員【名】(商)商業會議所代表者及び納稅義務を有する營業者中より、大蔵大臣のこれを命じたる營業稅審査委員會を組織する委員。

えいげふせいしんさるん營業成績一覽表【名】(商)定期間内に於ける營業の成績を一目瞭然たらしむるために、營業人の作製する表。

えいげふせいふ營業稅法【名】(法)營業稅を納むべき營業の種類及び程度・課稅標準及び稅率・課稅の方法・不當の課稅に對する救濟手段・罰則等を規定せる法律。明治二十九年公布。その後數度の追加改正を経たり。

えいげふせいふ營業稅附加稅【名】營業稅を納むる者に對し、それに附加して課する地方稅。營業附加稅。

えいげふち營業地【名】營業をなす地。

えいげふちわち營業地渡【名】(商)賣主又は買主の營業地にて、賣買物品の受渡をなすこと。その運賃は、營業地が買主の所在地なる時は賣主負擔し、賣主の所在地なる時は買主負擔す。

えいげふてい營業停止【名】(商)一定の期間營業を停止すること。營業者の任意に行ふものと、政府の命令に強制せらるるものとあり。えいげふんし(營業禁止)参照。

えいげふてん永業田【名】支那唐の太宗の設けし班田の制。男子十八歳に達すれば、一人ごとに田百畝を給せられ、その中八十畝を口分田となし、餘を永業田として、田は一家の所有に歸し、多く世襲せり。

えいげふてん營業特許【名】(法)えいげふんき營業免許に同じ。

えいげふに營業日誌【名】營業上に關する日日の事件を誌して、後日の用に供する帳簿。

えいげふに營業人【名】(商)個人たる者と會社たるを問はず、自己の主義を以て營業をなし、且つその營業より生ずる一切の權利義務損失利益を負擔する者。會社に於ては會社そのものが營業人にして、取締役支配人等は然らず。營業家。營業者。營業主。

えいげふね營業主【名】前條に同じ。

えいげふね營業年度【名】(商)營業者がその收支損益の決算を行ふために設けたる期間。通常、一年又は半年を一年度とす。

えいげふは營業報告【名】(商)營業年度内に於ける貸借勘定・財産の状況・業務の状況などを、その會社・銀行などより株主又は主務官廳などに報告すること。えいげふはうこくしよ營業報告書【名】(商)營業報告の書面。

えいげふひ營業費【名】(商)銀行・會社・商店などに於て、その營業をなすに直接に必要ななる入費。簿記上に於て一の勘定科目とす。

えいげふ

えいげふひうちわち營業費内譯帳【名】(商)營業費に關する費目を口分帳とし、詳細にその使途を記入する帳簿。

えいげふひかんち營業費勘定【名】(商)營業費を整理するために設けられたる勘定科目の一。

えいげふふかせい營業附加稅【名】えいげふせいふかせい營業稅附加稅に同じ。

えいげふふじよきん營業保證金【名】(商)株式組織の取引所が、營業の開始前に保證金として政府に納むる金。資本金の三分の一とす。

えいげふふじよにん營業補助人【名】(商)營業者のために營業の補助をなす人。即ち營業使用人及び代理商などの類。

えいげふふめんき營業免許【名】(法)一人又は團體に法定の種類に屬する營業をなすことを許す行政處分。營業の種類によりては、世間に害毒を及ぼす虞あるものがあるがために設けたる制度として、この種の營業を免許營業といふ。營業特許。

營業免許の拒否【名】(商)害毒を世間及び不許種類の營業に對して、行政官廳がその開業を許可せざること。但しその不許可を不當・不法と思惟する場合に於ては、主務官廳に訴願を提起し、又は行政裁判所に行政訴訟を提起して、私人の權利を自衛することを許さる。

えいげふめんきよせい營業免許稅【名】(法)營業免許を與ふる際に課する租稅。

えいげふめくろく營業目錄【名】(商)營業する物品の目錄。

えいげふようじふ營業用什器【名】(商)えいげふようじふきかんち營業用什器勘定【名】(商)えいげふようじふきかんち(營業什器勘定)に同じ。

えいげん永言【名】『書經の典義篇に「詩言志、歌永言」とあるに本づく』詩歌。

えいげん永源寺【名】近江國愛知郡高野の村大字高野にある寺。臨濟宗永源寺派の本山。佐々木氏頼の創建。開山は寂室、後に佛頂これを再建し、東福門院の懿旨により井伊家を檀越とす。之に屬する宗派を永源寺派と云ふ。一名山上(妙)寺。

えいげん榮枯【名】草木の榮ゆると、衰ふると。人の榮ゆると、衰ふると。盛衰。

えいご類語英悟【名】『えいだ(類語)を見よ』さときこと。かしこきこと。はつめい。

えいご英語【名】英國の言語。イギリスの港。遼河の左岸。河口十三海里あり。南滿洲鐵道と榆營鐵道・榆關即ち山海關と營口との間の鐵道との連絡地。大豆大豆粕等を輸入す。我が國の領事館あり。歐米人は牛莊城の在る所と混同して、牛莊(Kowtow)と呼ぶ。

えいごう營功【名】乘田を耕作すること。

えいごうせいしん永恒生産【名】(基)『英 Eternel Generation』神父は過去のみならず、現在に常に絶えず神を生みつつありて、こは永久に繼續するものなりといふこと。恒久生産。

えいごうわん永興灣【名】(地)朝鮮咸鏡南道の南部にある灣。水深くして大船を容る。元山津はその南岸にあり。

えいごうた英語骨牌【名】骨牌の一。その表面に單語もしくは句などを英語にて書けるもの。

えいごく影國【名】影の形に附従ふがごとくなる意。附屬の國。屬國。屬邦。

えいごく英國【名】(地)きりす(英吉利)に同じ。

えいげん

えいげん英國麥酒【名】くるびる(黑麥酒)に同じ。

えいごく永小作【名】地主が期間を定めず、永くその田畑を小作せしむるもの。『法』他人の土地に、耕作又は牧畜をなして、小作料を拂ふこと。舊稱・永賃借。えいごく永小作權【名】(法)物權の一。永小作に永小作權利。その存續期間は二十年以上、五十年以下とす。

えいごく永小作權【名】(法)物權の一。永小作に永小作權利。その存續期間は二十年以上、五十年以下とす。

えいごく永小作權【名】(法)物權の一。永小作に永小作權利。その存續期間は二十年以上、五十年以下とす。

えいごく永小作權【名】(法)物權の一。永小作に永小作權利。その存續期間は二十年以上、五十年以下とす。

えいごく永小作權【名】(法)物權の一。永小作に永小作權利。その存續期間は二十年以上、五十年以下とす。

えいごく永小作權【名】(法)物權の一。永小作に永小作權利。その存續期間は二十年以上、五十年以下とす。

えいごく永小作權【名】(法)物權の一。永小作に永小作權利。その存續期間は二十年以上、五十年以下とす。

えいごく永小作權【名】(法)物權の一。永小作に永小作權利。その存續期間は二十年以上、五十年以下とす。

えいごく永小作權【名】(法)物權の一。永小作に永小作權利。その存續期間は二十年以上、五十年以下とす。

えいごく永小作權【名】(法)物權の一。永小作に永小作權利。その存續期間は二十年以上、五十年以下とす。

えいごく永小作權【名】(法)物權の一。永小作に永小作權利。その存續期間は二十年以上、五十年以下とす。

えいごく永小作權【名】(法)物權の一。永小作に永小作權利。その存續期間は二十年以上、五十年以下とす。

えいごく永小作權【名】(法)物權の一。永小作に永小作權利。その存續期間は二十年以上、五十年以下とす。

えいごく永小作權【名】(法)物權の一。永小作に永小作權利。その存續期間は二十年以上、五十年以下とす。

えいごく永小作權【名】(法)物權の一。永小作に永小作權利。その存續期間は二十年以上、五十年以下とす。

えいごく永小作權【名】(法)物權の一。永小作に永小作權利。その存續期間は二十年以上、五十年以下とす。

えいごく永小作權【名】(法)物權の一。永小作に永小作權利。その存續期間は二十年以上、五十年以下とす。

えいごく永小作權【名】(法)物權の一。永小作に永小作權利。その存續期間は二十年以上、五十年以下とす。

えいごく永小作權【名】(法)物權の一。永小作に永小作權利。その存續期間は二十年以上、五十年以下とす。

えいごく永小作權【名】(法)物權の一。永小作に永小作權利。その存續期間は二十年以上、五十年以下とす。

えいじつ

【日】明けてより暮るるまでの間の時ながき日。はるなが。曜日。

えいじつ 營實【名】營後(ひの)實(漢藥として用ふる時の稱)

えいじは ばふ 永字八法【名】永の一字にて、一切の文字に共通の八種の運筆法、即ち側(上點)勒(平横)努(中直)趯(下勾)策(左挑)掠(右拂)啄(左)磔(右捺)を示せるもの。漢の蔡邕(ひ)の考案に成れるもの。側(ふたばつはじいえ)の考案に成れるもの。勒(ふたばつはじいえ)の考案に成れるもの。努(ふたばつはじいえ)の考案に成れるもの。趯(ふたばつはじいえ)の考案に成れるもの。策(ふたばつはじいえ)の考案に成れるもの。掠(ふたばつはじいえ)の考案に成れるもの。啄(ふたばつはじいえ)の考案に成れるもの。磔(ふたばつはじいえ)の考案に成れるもの。



えいしふじ 英習字【名】英字の習字。

えいじまめいたきん 永字豆板銀【名】永字銀の一種。縦五分強横五分五厘重量二匁八分にして、銀四銅六の品位を有し。面に寶の字、背に永の字の極印あり。

えいしん 榮進【名】高き官位に進むこと。榮達。

えいしん 詠進【名】歌をよみて、朝廷又は

えいしん 銳進【名】するどく進むこと。

えいしん 英人【名】英國の人。イギリス人。

えいじん 銳刃【名】するどきやいば。す

えいじん 盈進館【名】上總國君津郡大貫村にありし、舊小久保藩の學校。明治二年、藩主田沼意尊創立す。

えいしんや 翳身藥【名】昔、印度の仙人が使用せしといふ奇藥。全身に塗れば、その身を他人の眼に觸れざらしむといふ。隱身藥。

えいしや 影寫映寫【名】透寫(えい)もしくは透寫ならずとも、字體及び紙の廣狹に至るまですべて原本の如くに精巧に臨模すること、又その臨模したるもの。

えいしや 影射【名】他人の名を藉りて利

えいしや 永正【名】後柏原天皇の御代の年號(紀元二二六四年—二二八〇年)。

えいしやう

えいしやう 榮性【名】(人)新義真言宗の僧。初名は榮慶。信濃國の人、大和國長谷寺に於て修行す。晚年江戶護持院に入り護國寺を兼ね。滅後減行決斷得名題斷決斷六合釋決斷、勒陷雷地決斷、即身義決斷、二教論決斷の著あり。天保八年寂す。年七十。

えいじやう 嬰城【名】嬰は繞る意、城に取られまかれて守ること。ろじやう(籠城)に同じ。

えいじやう 永昌記【名】(書)堀川天皇の長治二年より崇徳天皇の大治四年まで、およそ二十五年の間の記録。朝廷の儀式及び朝臣の參觀(しん)等を記す。十卷。參議藤原爲隆の著。

えいじやう わん 榮城灣【名】(地)支那山東省登州府なる山東角の東端にある海灣。明治二十七八年戰役に、威海衛の背後を襲へる我が第二軍の上陸地。

えいじやう 榮爵【名】(名)たかき爵位。高爵。顯爵。五位の異稱。じよじやう(敘爵)參照。

えいじゆ 英主【名】すぐれたる天子。

えいじゆ 羸輪【名】(名)ゆえに(輪)に同じ。

えいじゆ 嬰守【名】(名)えいじやう(嬰城)を見よ。ろじやう(籠城)に同じ。

えいじゆ 嬰種【名】(音)長音階に於て、その樂譜の、井の記號あるもの。その記號を、嬰といひ、この記號のある次の音符は、その本来の音より半音高くなるべきを示す。嬰種長音階(變種に對して)ほんみきがう本位記號參照。

えいじゆ 瓔珠【名】飾りとしてつくる玉。

えいじゆ 永壽【名】永き壽命。長命。長

えいじゆ 景從影從【名】影の形に從ふがごとくに從ふこと。嬰走黑白衣之雲集豈唯三州五郡之淺契、内外戚之影從、抑亦見佛開法之大緣【名】餘れると、足らざる

えいじゆ 永壽堂【名】徳川時代、江戸馬喰(うまぐ)町にありし繪草紙屋。

えいじゆ ちやうおんかい 嬰種長音階【名】(音)えいじゆ(嬰種)に同じ。

えいしゆつ

えいしゆつ 詠出【名】歌などをよみ出すこと。又その歌。

えいしゆん 英俊・英雋・英雋【名】他人にぬけ出てたる人。英傑。

えいしよ 營所【名】兵士のあつまる場所。兵營。ぢんや。

えいしよ 英書【名】英文にて書きたる書物。【てよむこと】。

えいしよ 詠誦【名】歌などを聲に出し

えいしよ 羸勝【名】勝つこと。【ま

えいしよ 永承【名】後冷泉天皇の御代の年號(紀元一〇六一年—一〇七二年)。

えいしよ じ 英勝寺【名】相模國鎌倉郡豊田村にある眞宗の寺。初は長延寺。臥龍山瑞祥院と號す。もと天台宗なりしが、親鸞東下の時、住持これに歸依して改宗す。相模國鎌倉郡扇ヶ谷にある淨土宗の尼寺。徳川頼房の准母英勝院の開基にして、頼房の息女玉峯尼入寺住職せし處。この地太田道灌の宅址なりといふ。

えいしよ えんせつ 鄧書燕説【名】『韓非子』の外儲篇に「先王有鄧書、而後世有燕説。鄧人有遺燕相國書者、夜書、火不レ明、因謂持燭者曰、舉燭云、而過書舉燭。舉燭非書意也。燕相受書而説之、曰、舉燭者何明也、向明也者、舉賢任之。燕相自王、王大説、國以治。治則治矣、非書意也。今也舉學、多似此類、ことあるに本づく。鄧は古の支那の楚の都。燕は國名」道理に當らざることを、道理らしく牽強附會して説くこと。

えいしよ 盈昇【名】えいき(盈虧)に同じ。

えいしよ 榮辱【名】榮華と、恥辱と。

えいしよ 榮辱【名】昨日までも榮譽を保ちし者、忽ちして辱を受ける。榮辱を保ちし者、忽ちして辱を受ける。

えいしよ 詠吟【名】(名)詩歌をうたふ。詩歌を作る。吟ず。よむ。

えいしよ 映映【名】(名)反射してうつる。うつる。【花の影、水に映ず】

えいしよ 榮助【名】けいづかひ(高主)に同じ。【盜賊の隠語】

えいしよ 榮瘁【名】瘁は病みてつかるる

えいせい

えいせい 意【名】さかゆると衰ふると。榮枯。

えいせい 永瑞【名】(人)曹洞宗の僧。字は大雲。織田信秀の伯父。幼にして道に入り、信秀の萬松寺を興すやこれをして開山たらしむ。永祿五年寂す。年八十一。

えいせい 永世【名】ながき世。かぎりなき世。永代。永年。

えいせい 永世【名】永久に行はるべき制

えいせい 鄧正【名】えいたく(鄧)に同じ。

えいせい 營生【名】(名)生業を営むこと。口ずき。なりはひ。渡世。【生命力の保存永懷】

えいせい 永濟渠【名】(地)支那隋の煬帝(り)が鑿ちし運河。南は山東省東昌府より北は北京に至り、沁(しん)水・黄河(くわ)水・泗(し)水・淮(わい)水の五流の水を連絡せしめたるもの。今、衛河といふ。

えいせい 永世【名】(法)えいせいちやうりつ(永世中立)に同じ。

えいせい 永世【名】(法)えいせいちやうりつ(永世中立)に同じ。

えいせい 永世【名】(法)えいせいちやうりつ(永世中立)に同じ。

えいせい 永世【名】(法)えいせいちやうりつ(永世中立)に同じ。

えいせい 永世【名】(法)えいせいちやうりつ(永世中立)に同じ。

えいせい 永世【名】(法)えいせいちやうりつ(永世中立)に同じ。

えいせい 永世【名】(法)えいせいちやうりつ(永世中立)に同じ。

えいせい 永世【名】(法)えいせいちやうりつ(永世中立)に同じ。

えいせい 永世【名】(法)えいせいちやうりつ(永世中立)に同じ。

えいせい 永世【名】(法)えいせいちやうりつ(永世中立)に同じ。

えいせいちゅうりつこく 永世中立國

【名】(法) 前條を見よ。

えいせいちゅうりつこく 永世中立條約【名】(法) 永世中立の意をあらはしたる條約。

えいせいぶんぶく 容聖文武 敬聖文武【名】(人) 支那唐の元帝、敬聖文武皇帝が憲宗にたてまつりし尊號。(故に「敬聖文武」の字面をただ廣く天皇を讚美する語として用ふるは、正しからず)

えいせいしんく 永世祿【名】 舊藩の制度及び明治維新の當時に於ける政府の布達、その他の命令によりて、無期限に一人に下賜すべき家祿及び賞典。明治九年政府はこの制度を改めたり。きんろく(金祿)を參照。

えいせうくわうたいこう 英照皇太后【名】(人) 孝明天皇の后。御名は夙(ふ)子。九條尚忠の第六女。嘉永元年(1849)入内、六年准后となり、明治元年(1868)太皇太后宣下。國歩艱難の時に際し、天皇を輔佐して内助の功甚だ多し。明治三十年崩す。壽六十一。

えいせつもの 詠雪子【名】(人) 柳家子に同じ。

えいせん 永銭【名】(人) えいらくせん(永樂銭)の略。永(元) 田(天) 永(永)を見よ。穀類に代へて納むる錢。

えいせん 額川【名】(地) 支那の今の河内省許州(開封府の西南)臨潁縣の地。きん(許由)參照。

えいせん 瘞船【名】(人) 葬りたる處に埋むる。えいせん 敬船【名】(人) えいかん(敬感)を見よ。天子の召したまふ船。

えいせん 營繕【名】(人) 新營と修繕と。

えいせん あんざんがん 英岡安山岩【名】(人) 安山岩の一種。新期の噴出岩にして、斜長石・石英・輝石・雲母などを成分とす。英岡富士岩。

えいせん き 曳線器【名】(人) 英 Wires drawn 電線を引延ばすとき、その一端を固持せしむる鋼鐵製の器。

えいせんじ 永宣旨【名】(人) 古、僧官僧職の中に、特に永久に上奏を經ずして補任することを得る特權を許可する宣旨。

えいせんじ 永泉寺【名】(人) 羽後國由利郡本莊町にある曹洞宗の寺。貞觀年中、圓仁の開基と傳へらる。はじめは天台宗。

えいせんとう 銳尖頭【名】(人) 植(葉先)の、殊に尖りたるもの。

えいせんは 英泉派【名】(人) 浮世繪の一派。寛政頃、菊川英山に起る。門人英泉、漢畫の筆法を應用して、一時流行せり。

えいせんひ 營繕費【名】(人) (法) 家屋或は倉庫等の破損を修繕する入費。銀行・會社等に於ては、營業費の中の勘定科目として口座を設け、政府等に於ては、項中の目として、豫算に舉ぐ。

えいせんふじがん 英岡富士岩【名】(人) (人) えいせんあざんがん(英岡安山岩)に同じ。

えいせんあざんがん 英岡安山岩【名】(人) (人) えいせんあざんがん(英岡安山岩)に同じ。

えいせん 永祚【名】(人) えいそ(永祚)の略。狂言こんくわ(えいそ)のごとくなる。

えいそ 永祚【名】(人) 一條天皇の御代の年號(紀元一六四九年)。

えいそ 永祚【名】(人) 一條天皇の御代の年號(紀元一六四九年)。

えいそ 永祚【名】(人) 一條天皇の御代の年號(紀元一六四九年)。

えいそ 永祚【名】(人) 一條天皇の御代の年號(紀元一六四九年)。

えいそ 永祚【名】(人) 一條天皇の御代の年號(紀元一六四九年)。

えいそ 永祚【名】(人) 一條天皇の御代の年號(紀元一六四九年)。

えいそ 永祚【名】(人) 一條天皇の御代の年號(紀元一六四九年)。

えいそ 永祚【名】(人) 一條天皇の御代の年號(紀元一六四九年)。

えいそ 永祚【名】(人) 一條天皇の御代の年號(紀元一六四九年)。

えいそ 永祚【名】(人) 一條天皇の御代の年號(紀元一六四九年)。

えいそ 永祚【名】(人) 一條天皇の御代の年號(紀元一六四九年)。

えいそ 永祚【名】(人) 一條天皇の御代の年號(紀元一六四九年)。

えいそ 永祚【名】(人) 一條天皇の御代の年號(紀元一六四九年)。

えいそ 永祚【名】(人) 一條天皇の御代の年號(紀元一六四九年)。

えいそ 永祚【名】(人) 一條天皇の御代の年號(紀元一六四九年)。

えいそ 永祚【名】(人) 一條天皇の御代の年號(紀元一六四九年)。

えいそ 永祚【名】(人) 一條天皇の御代の年號(紀元一六四九年)。

えいたい 映帶【名】(人) うつりあふこと。反映。映發。

えいたいきやう 永代經【名】(人) (佛) 寺院に檀越の請により、亡者のために永久に亙りて、毎月の忌日に行ふ讀經。永代讀經。

えいたいこう 永代講【名】(人) 永代經を勤むる法會。

えいたいしやく 永貸借【名】(人) (法) えいこ(永小作)に同じ。(舊民法の語)

えいたいしやくち 永代借地【名】(人) (法) 永代借地權を設定したる土地。

えいたいしやくちけん 永代借地權【名】(人) (法) 舊條約に依る外國人居留地を條約改正の際、日本の市區に編入するに當り、締結國の人民及び法人のために設定したる無期限の借地權。土地所有權を與へざる代りに與へたる一種の物權なれども、實際の効力は、土地所有權に異なるところなし。

えいたいしやくちけん 永代借地券【名】(人) (法) 永代借地權を有する者に政府より交付する地券。永代借地權の賣買・譲渡を記入證明するに供せらる。

えいたいしやくちたてもの 永代借地登記簿【名】(人) 永代借地權の賣買・譲渡を記入する建物の關する事項を登記するための帳簿。

えいたいしやくちたてもの 永代借地登記簿【名】(人) 永代借地權の賣買・譲渡を記入する建物の關する事項を登記するための帳簿。

えいたいしやくちたてもの 永代借地登記簿【名】(人) 永代借地權の賣買・譲渡を記入する建物の關する事項を登記するための帳簿。

えいたいしやくちたてもの 永代借地登記簿【名】(人) 永代借地權の賣買・譲渡を記入する建物の關する事項を登記するための帳簿。

えいたいしやくちたてもの 永代借地登記簿【名】(人) 永代借地權の賣買・譲渡を記入する建物の關する事項を登記するための帳簿。

えいたいしやくちたてもの 永代借地登記簿【名】(人) 永代借地權の賣買・譲渡を記入する建物の關する事項を登記するための帳簿。

えいたいしやくちたてもの 永代借地登記簿【名】(人) 永代借地權の賣買・譲渡を記入する建物の關する事項を登記するための帳簿。

えいたいしやくちたてもの 永代借地登記簿【名】(人) 永代借地權の賣買・譲渡を記入する建物の關する事項を登記するための帳簿。

えいたいしやくちたてもの 永代借地登記簿【名】(人) 永代借地權の賣買・譲渡を記入する建物の關する事項を登記するための帳簿。

えいたいしやくちたてもの 永代借地登記簿【名】(人) 永代借地權の賣買・譲渡を記入する建物の關する事項を登記するための帳簿。

えいたいしやくちたてもの 永代借地登記簿【名】(人) 永代借地權の賣買・譲渡を記入する建物の關する事項を登記するための帳簿。

えいたいしやくちたてもの 永代借地登記簿【名】(人) 永代借地權の賣買・譲渡を記入する建物の關する事項を登記するための帳簿。

えいたいしやくちたてもの 永代借地登記簿【名】(人) 永代借地權の賣買・譲渡を記入する建物の關する事項を登記するための帳簿。

えいたいしやくちたてもの 永代借地登記簿【名】(人) 永代借地權の賣買・譲渡を記入する建物の關する事項を登記するための帳簿。

えいたいしやくちたてもの 永代借地登記簿【名】(人) 永代借地權の賣買・譲渡を記入する建物の關する事項を登記するための帳簿。

えいたいしやくちたてもの 永代借地登記簿【名】(人) 永代借地權の賣買・譲渡を記入する建物の關する事項を登記するための帳簿。

えいたいしやくちたてもの 永代借地登記簿【名】(人) 永代借地權の賣買・譲渡を記入する建物の關する事項を登記するための帳簿。

えいたいしやくちたてもの 永代借地登記簿【名】(人) 永代借地權の賣買・譲渡を記入する建物の關する事項を登記するための帳簿。

えいたいばし 永代橋【名】(人) (地) 隅田川の下流に架りて、東京市京橋區大川端町と深川區相川町とを連絡せる橋。

えいたう 永當【名】(人) えいた(永代)の音便。いつまでも。いくひさしく。(俚語)「えいたう、ごいきに」

えいたう 影堂【名】(人) 寺ならば一宗の祖師、又は一寺の開祖、個人の家ならば祖先の像・位牌などを祀る堂。みえいだう。

えいたう 永當【名】(人) えいた(永代)の音便。いつまでも。いくひさしく。(俚語)「えいたう、ごいきに」

えいたう 永當【名】(人) えいた(永代)の音便。いつまでも。いくひさしく。(俚語)「えいたう、ごいきに」

えいたう 永當【名】(人) えいた(永代)の音便。いつまでも。いくひさしく。(俚語)「えいたう、ごいきに」

えいたう 永當【名】(人) えいた(永代)の音便。いつまでも。いくひさしく。(俚語)「えいたう、ごいきに」

えいたう 永當【名】(人) えいた(永代)の音便。いつまでも。いくひさしく。(俚語)「えいたう、ごいきに」

えいたう 永當【名】(人) えいた(永代)の音便。いつまでも。いくひさしく。(俚語)「えいたう、ごいきに」

えいたう 永當【名】(人) えいた(永代)の音便。いつまでも。いくひさしく。(俚語)「えいたう、ごいきに」

えいたう 永當【名】(人) えいた(永代)の音便。いつまでも。いくひさしく。(俚語)「えいたう、ごいきに」

えいたう 永當【名】(人) えいた(永代)の音便。いつまでも。いくひさしく。(俚語)「えいたう、ごいきに」

えいたう 永當【名】(人) えいた(永代)の音便。いつまでも。いくひさしく。(俚語)「えいたう、ごいきに」

えいたう 永當【名】(人) えいた(永代)の音便。いつまでも。いくひさしく。(俚語)「えいたう、ごいきに」

えいたう 永當【名】(人) えいた(永代)の音便。いつまでも。いくひさしく。(俚語)「えいたう、ごいきに」

えいたう 永當【名】(人) えいた(永代)の音便。いつまでも。いくひさしく。(俚語)「えいたう、ごいきに」

えいたう 永當【名】(人) えいた(永代)の音便。いつまでも。いくひさしく。(俚語)「えいたう、ごいきに」

えいたう 永當【名】(人) えいた(永代)の音便。いつまでも。いくひさしく。(俚語)「えいたう、ごいきに」

えいたう 永當【名】(人) えいた(永代)の音便。いつまでも。いくひさしく。(俚語)「えいたう、ごいきに」

えいたう 永當【名】(人) えいた(永代)の音便。いつまでも。いくひさしく。(俚語)「えいたう、ごいきに」

えいたう 永當【名】(人) えいた(永代)の音便。いつまでも。いくひさしく。(俚語)「えいたう、ごいきに」

えいたう 永當【名】(人) えいた(永代)の音便。いつまでも。いくひさしく。(俚語)「えいたう、ごいきに」

えいたう 永當【名】(人) えいた(永代)の音便。いつまでも。いくひさしく。(俚語)「えいたう、ごいきに」

えいたう 永當【名】(人) えいた(永代)の音便。いつまでも。いくひさしく。(俚語)「えいたう、ごいきに」

えいたう 永當【名】(人) えいた(永代)の音便。いつまでも。いくひさしく。(俚語)「えいたう、ごいきに」

えいぶんがく 英文學【名】英文を研究する學問。英國の文學。
えいぶんてん 英文典【名】英語の文典。英文法。

えいぶんばふ 英文法【名】前條に同じ。
えいへい 銳兵【名】銳利なる兵器。
えいへい(銳卒)に同じ。

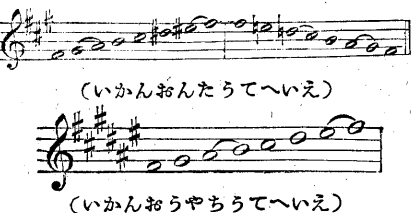
えいへい 英米【名】(地)英國と米國と。
えいへい 永平寺【名】越前國古田郡志比谷(志比村)にある曹洞宗の總本山。福井市の東四里。もと大佛寺と稱し、後に吉祥山永平寺と改む。後醍醐天皇の寛元元年、波多野義重の創建。開基は道元禪師。天正二年に火災に遇ひしが、國守柴田氏山下に遷して再興せり。

えいへい 永平寺開山忌【名】越前國の永平寺にて、八月二十八日修する開山道元禪師の忌。

えいへい 永平寺派【名】(名)曹洞宗の一派。永平寺を本山とするもの。
えいへい 永高【名】ながきわかれ。永訣。
えいへい 永高に同じ。

えいへい 嬰へ調短音階【名】(音)嬰へ音を主音とせる短音階。三嬰を有し、ロ音の上方完全五度に在り。

えいへい 嬰へ調長音階【名】(音)嬰へ調を主音とせる長音階。六嬰を有し、ロ音の上方完全五度に在り。



えいへい 永保寺【名】美濃國可兒郡豐岡町大字永瀬にある臨濟宗南禪寺派の寺。虎溪山と號す。正和三年土岐氏の請により、夢窓(夢窓)國師の開基。

えいまい 英邁【名】すぐれてかしきこと。
えいまい 永萬【名】二條天皇の御代の年號(紀元一八二五年)。
えいまい 盈滿【名】物事の十分に満ち足らふこと。

盈滿の咎【名】(包)『後漢書』に「吾門戸殖財日久盈滿之咎、道家所忌」とあるに本づく。物事十分に過ぐる時は、却て禍の生ずること。「ねむり」。

えいめい 永眠【名】死ぬること。ながき榮名を貌す。『史記』の游侠傳に「諺曰、榮名豈有既乎」とあるに本づく。『容觀』の美は衰ふることあれども、名譽を以て容觀の飾りとすれば、衰ふことなし(諺語)。

えいめい 永明寺【名】朝鮮平壤にある寺。その五重塔は、石造にして、高麗時代中期の建造に係り、構造雄健なり。

えいもん 營門【名】陣營の門。兵營の門。
えいもり 永盛【名】えいだか(永高)に同じ。
えいもり 永夜【名】暮れてより明くるまでの時間の永き夜。ながよ。

えいり 力【名】力を入る時に發する掛聲。えい。えいやら。えいやらん。えんやら。『但語』。『天條』に同じ。『但語』。『重慶』に「えいやあ、さてもさても、舞うたり、舞うたり」。

えいり 榮養【名】衣服・食物等を完全に、十分に養ふこと。
えいり 營養【名】(醫)『英 Nutrition』生物が、養料を攝取し、消化・吸收・呼吸・排泄・循環等の作用を整へて、體質の消耗を補ひ、生活力を持続すること。『營養不良』。

えいり 營養液【名】(醫)『善』良鮮紅なる血液の一部の、毛細管の管壁を透過して、外皮を始め百般の器官を營養するもの。無色・蛋白質の液にして、血清アルブミンを主成分として、炭素・酸素・脂肪酸及び硫酸の化合より成る。
えいり 營養價【名】(醫)『食品中に含

める營養素のうち、實際に營養として吸收せらるる量の多少。例へば大麥は、化學分析上、蛋白質の含有量、米より多けれども、吸收せらるる量は米の方遙かに多きゆゑ、營養價は米の方優るといふ類。

えいり 營養質【名】(醫)消化・吸收せられたる後、生活體を構成し、又はその動作發現に必要な物質・滋養價。

えいり 營養素【名】(醫)營養質を組成するもの。人類に必要な營養素は、鹽類・水・蛋白質・脂肪及び含炭素素にして、これら各營養素を適當に調和して食物に供するを要するものとす。食料。
えいり 營養物【名】(醫)營養質を含める飲食物。

えいり 營養【名】(同)『同』に同じ。『夕陽阿波』金子は當月一杯におわたしなさる約束で、えいやとおと首尾成り。

えいり 英譯【名】英語に翻譯すること。
えいり 英譯【名】英語に翻譯すること。
えいり 英譯【名】英語に翻譯すること。

えいり 英譯【名】英語に翻譯すること。
えいり 英譯【名】英語に翻譯すること。
えいり 英譯【名】英語に翻譯すること。

えいり 英譯【名】英語に翻譯すること。
えいり 英譯【名】英語に翻譯すること。
えいり 英譯【名】英語に翻譯すること。

えいり 英譯【名】英語に翻譯すること。
えいり 英譯【名】英語に翻譯すること。
えいり 英譯【名】英語に翻譯すること。

英雄、色を好む【包】英雄は、女色を好む癖あり。『諺語』
英雄、人を欺く【包】英雄は才智能力に任せ、權謀を用ひて、他人を欺くこと多し。『諺語』。『藤田東湖遺稿』近來長短句にても、李太白長語を用ひ候ふ事を評し、英雄欺人耳と申候。今流行は、凡庸欺人とも可申。

英雄、人を忌む【包】『三國志』に「孫策曰、劉豫州英雄忌人」とあり。英雄は他のすぐれたる者を忌む。兩雄ならび立ちがたし。『諺語』

えいり 英雄家【名】(名)『清華』に「條」に同じ。
えいり 英雄傳説【名】(文)次
えいり 英雄物語【名】英雄譚
えいり 英雄傳説【名】(文)英雄的文學。英雄傳説。

えいり 榮譽【名】ほまれ。よききこえ。
えいり 榮譽【名】(名)物のあまり。物の残り。

えいり 永興【名】(人)歸化の高僧。元朝の人。東陵と號す。正平六年京都に來りて南禪寺に住し、のち相模の圓覺寺及び建長寺に遷り、化導に力む。同二十年寂す。勅して妙應國師海慈濟禪師と諡す。

えいり 榮譽權【名】(法)榮譽の表彰を享有する權利。例へば、天皇が「天皇」といふ稱號を用ひ、又、陛下といふ敬語を受けたまふが如き、又、臣下の爵位・勳章・貴號・年金恩給などを有する權利・官吏となる權利・兵權を授與する大權。

えいり 榮譽支拂【名】(商)「佛 Fournement par honneur」さんかじはらひ(參加仕拂)に同じ。
えいり 榮譽支拂人【名】(名)「佛 Fournement par honneur」さんかじはらひ(參加仕拂)に同じ。

えいり 榮譽引受【名】(商)「佛 Acceptation par honneur」さんかじはらひ(參加仕拂)に同じ。

えいよう

えいよひきうけにん 榮譽引受人【名】
「商」榮譽引受をなしたる人。參加引受人。
えいろう 永牢【名】 徳川時代の制にて、終身牢に繋ぎ置きし刑。

えいらく 環路【名】 やうらく(環路)に同じ。
えいらく 永樂【名】 永く盡きざるたのしみ。
えいらく 永樂【名】 永樂(永樂)の略。

えいらく 榮落【名】 榮華なるたのしみ。
えいらく 榮落【名】 榮華と零落と。榮枯。
えいらく 永樂金【名】 永樂金。表面に永樂通寶の文ありて、背には、桐紋の極印(ツ)を有するものと、有せざるものと二種あり。

えいらく ぎんせん 永樂銀錢【名】 豊臣秀吉が天正の頃發行せしといふ銀錢。表面には永樂通寶の文あり。

えいらく せん 永樂錢【名】 支那明朝の永樂九年(我國の應永十八年)に鑄たる青銅の貨幣。大小輕重一様ならざれども、表面に永樂通寶の四字を刻す。足利時代に、本邦に輸入し、その質善良なるがために、遍く通用し、慶長三年後に至りて廢せらる。永樂通寶錢。永錢。永樂。永。永精錢。

えいらく せん 永樂錢【名】 支那明朝の永樂九年(我國の應永十八年)に鑄たる青銅の貨幣。大小輕重一様ならざれども、表面に永樂通寶の四字を刻す。足利時代に、本邦に輸入し、その質善良なるがために、遍く通用し、慶長三年後に至りて廢せらる。永樂通寶錢。永錢。永樂。永。永精錢。
えいらく せん 永樂錢【名】 支那明朝の永樂九年(我國の應永十八年)に鑄たる青銅の貨幣。大小輕重一様ならざれども、表面に永樂通寶の四字を刻す。足利時代に、本邦に輸入し、その質善良なるがために、遍く通用し、慶長三年後に至りて廢せらる。永樂通寶錢。永錢。永樂。永。永精錢。
えいらく せん 永樂錢【名】 支那明朝の永樂九年(我國の應永十八年)に鑄たる青銅の貨幣。大小輕重一様ならざれども、表面に永樂通寶の四字を刻す。足利時代に、本邦に輸入し、その質善良なるがために、遍く通用し、慶長三年後に至りて廢せらる。永樂通寶錢。永錢。永樂。永。永精錢。

えいらく せん 永樂錢【名】 支那明朝の永樂九年(我國の應永十八年)に鑄たる青銅の貨幣。大小輕重一様ならざれども、表面に永樂通寶の四字を刻す。足利時代に、本邦に輸入し、その質善良なるがために、遍く通用し、慶長三年後に至りて廢せらる。永樂通寶錢。永錢。永樂。永。永精錢。
えいらく せん 永樂錢【名】 支那明朝の永樂九年(我國の應永十八年)に鑄たる青銅の貨幣。大小輕重一様ならざれども、表面に永樂通寶の四字を刻す。足利時代に、本邦に輸入し、その質善良なるがために、遍く通用し、慶長三年後に至りて廢せらる。永樂通寶錢。永錢。永樂。永。永精錢。
えいらく せん 永樂錢【名】 支那明朝の永樂九年(我國の應永十八年)に鑄たる青銅の貨幣。大小輕重一様ならざれども、表面に永樂通寶の四字を刻す。足利時代に、本邦に輸入し、その質善良なるがために、遍く通用し、慶長三年後に至りて廢せらる。永樂通寶錢。永錢。永樂。永。永精錢。

えいらく せん 永樂錢【名】 支那明朝の永樂九年(我國の應永十八年)に鑄たる青銅の貨幣。大小輕重一様ならざれども、表面に永樂通寶の四字を刻す。足利時代に、本邦に輸入し、その質善良なるがために、遍く通用し、慶長三年後に至りて廢せらる。永樂通寶錢。永錢。永樂。永。永精錢。
えいらく せん 永樂錢【名】 支那明朝の永樂九年(我國の應永十八年)に鑄たる青銅の貨幣。大小輕重一様ならざれども、表面に永樂通寶の四字を刻す。足利時代に、本邦に輸入し、その質善良なるがために、遍く通用し、慶長三年後に至りて廢せらる。永樂通寶錢。永錢。永樂。永。永精錢。
えいらく せん 永樂錢【名】 支那明朝の永樂九年(我國の應永十八年)に鑄たる青銅の貨幣。大小輕重一様ならざれども、表面に永樂通寶の四字を刻す。足利時代に、本邦に輸入し、その質善良なるがために、遍く通用し、慶長三年後に至りて廢せらる。永樂通寶錢。永錢。永樂。永。永精錢。

えいらく せん 永樂錢【名】 支那明朝の永樂九年(我國の應永十八年)に鑄たる青銅の貨幣。大小輕重一様ならざれども、表面に永樂通寶の四字を刻す。足利時代に、本邦に輸入し、その質善良なるがために、遍く通用し、慶長三年後に至りて廢せらる。永樂通寶錢。永錢。永樂。永。永精錢。
えいらく せん 永樂錢【名】 支那明朝の永樂九年(我國の應永十八年)に鑄たる青銅の貨幣。大小輕重一様ならざれども、表面に永樂通寶の四字を刻す。足利時代に、本邦に輸入し、その質善良なるがために、遍く通用し、慶長三年後に至りて廢せらる。永樂通寶錢。永錢。永樂。永。永精錢。
えいらく せん 永樂錢【名】 支那明朝の永樂九年(我國の應永十八年)に鑄たる青銅の貨幣。大小輕重一様ならざれども、表面に永樂通寶の四字を刻す。足利時代に、本邦に輸入し、その質善良なるがために、遍く通用し、慶長三年後に至りて廢せらる。永樂通寶錢。永錢。永樂。永。永精錢。

えいよう

えいらん 榮覽・觀覽【名】 『えいかん(觀感)』を見よ。天皇の見えなすこと。天覽。
えいらん ぎんきん 英蘭銀行【名】 『Bank of England』英國の中央銀行。ロンドンに在り。西暦一六九四年の創立にして、現時は世界に於ける中央銀行たる地位を占め、國際間の取引は、多くこの銀行に由りて決済せらる。

えいり 銳利【名】 まうけ。利益。
えいり 銳利【名】 刃物又は才氣などのするどきこと。

えいり 營利【名】 財産上の利益を營みはかること。かねまうけ。
えいり 營利【名】 榮達と利福と。

えいり 英里【名】 まうけに同じ。
えいり 瀛洲【名】 『瀛』は秦皇の姓、劉は漢室の姓。支那の秦の代と漢の代と。『瀛洲の間』。

えいり 營利行爲【名】 (法) 營利のためにする行爲。
えいり 營利行爲【名】 (法) 營利を目的とする會社。

えいり 營利事業【名】 營利を目的とする會社。
えいり 營利事業【名】 營利を目的とする會社。
えいり 營利事業【名】 營利を目的とする會社。
えいり 營利事業【名】 營利を目的とする會社。
えいり 營利事業【名】 營利を目的とする會社。

えいり 營利事業【名】 營利を目的とする會社。
えいり 營利事業【名】 營利を目的とする會社。
えいり 營利事業【名】 營利を目的とする會社。
えいり 營利事業【名】 營利を目的とする會社。
えいり 營利事業【名】 營利を目的とする會社。

えいり 營利事業【名】 營利を目的とする會社。
えいり 營利事業【名】 營利を目的とする會社。
えいり 營利事業【名】 營利を目的とする會社。
えいり 營利事業【名】 營利を目的とする會社。
えいり 營利事業【名】 營利を目的とする會社。

えいり 營利事業【名】 營利を目的とする會社。
えいり 營利事業【名】 營利を目的とする會社。
えいり 營利事業【名】 營利を目的とする會社。
えいり 營利事業【名】 營利を目的とする會社。
えいり 營利事業【名】 營利を目的とする會社。

えいよう

えいりん 營林區【名】 營林局にて定めたる、營林上の土地の區劃。
えいりん 營林廠【名】 鴨綠江(ヤルウ)及び豆滿江沿岸に於ける森林經營に關する事務を掌る役所。朝鮮總督府の管理に屬す。

えいりやく 英略【名】 すぐれたるはかり。
えいりやく 永曆【名】 二條天皇の御代の年號(紀元一八二〇年)。

えいりやく 永曆【名】 二條天皇の御代の年號(紀元一八二〇年)。
えいりやく 永曆【名】 二條天皇の御代の年號(紀元一八二〇年)。
えいりやく 永曆【名】 二條天皇の御代の年號(紀元一八二〇年)。

えいりやく 永曆【名】 二條天皇の御代の年號(紀元一八二〇年)。
えいりやく 永曆【名】 二條天皇の御代の年號(紀元一八二〇年)。
えいりやく 永曆【名】 二條天皇の御代の年號(紀元一八二〇年)。

えいりやく 永曆【名】 二條天皇の御代の年號(紀元一八二〇年)。
えいりやく 永曆【名】 二條天皇の御代の年號(紀元一八二〇年)。
えいりやく 永曆【名】 二條天皇の御代の年號(紀元一八二〇年)。

えいりやく 永曆【名】 二條天皇の御代の年號(紀元一八二〇年)。
えいりやく 永曆【名】 二條天皇の御代の年號(紀元一八二〇年)。
えいりやく 永曆【名】 二條天皇の御代の年號(紀元一八二〇年)。

えいりやく 永曆【名】 二條天皇の御代の年號(紀元一八二〇年)。
えいりやく 永曆【名】 二條天皇の御代の年號(紀元一八二〇年)。
えいりやく 永曆【名】 二條天皇の御代の年號(紀元一八二〇年)。

えいりやく 永曆【名】 二條天皇の御代の年號(紀元一八二〇年)。
えいりやく 永曆【名】 二條天皇の御代の年號(紀元一八二〇年)。
えいりやく 永曆【名】 二條天皇の御代の年號(紀元一八二〇年)。

えいりやく 永曆【名】 二條天皇の御代の年號(紀元一八二〇年)。
えいりやく 永曆【名】 二條天皇の御代の年號(紀元一八二〇年)。
えいりやく 永曆【名】 二條天皇の御代の年號(紀元一八二〇年)。

えいよう

えいあん 永久公債【名】 有期公債に對して、永久國債の一。豫め支拂の年限を定めず、据置(おき)年限經過後には、何時にても償還を爲し得るもの。
えいあん ぼんじん 永遠保存品【名】 使用の爲め又は時日を経るも品質・價格に變化を及ぼさざる物品。

えいあん ぼんじん 永遠保存品【名】 使用の爲め又は時日を経るも品質・價格に變化を及ぼさざる物品。
えいあん ぼんじん 永遠保存品【名】 使用の爲め又は時日を経るも品質・價格に變化を及ぼさざる物品。
えいあん ぼんじん 永遠保存品【名】 使用の爲め又は時日を経るも品質・價格に變化を及ぼさざる物品。

えいあん ぼんじん 永遠保存品【名】 使用の爲め又は時日を経るも品質・價格に變化を及ぼさざる物品。
えいあん ぼんじん 永遠保存品【名】 使用の爲め又は時日を経るも品質・價格に變化を及ぼさざる物品。
えいあん ぼんじん 永遠保存品【名】 使用の爲め又は時日を経るも品質・價格に變化を及ぼさざる物品。

えいあん ぼんじん 永遠保存品【名】 使用の爲め又は時日を経るも品質・價格に變化を及ぼさざる物品。
えいあん ぼんじん 永遠保存品【名】 使用の爲め又は時日を経るも品質・價格に變化を及ぼさざる物品。
えいあん ぼんじん 永遠保存品【名】 使用の爲め又は時日を経るも品質・價格に變化を及ぼさざる物品。

えいあん ぼんじん 永遠保存品【名】 使用の爲め又は時日を経るも品質・價格に變化を及ぼさざる物品。
えいあん ぼんじん 永遠保存品【名】 使用の爲め又は時日を経るも品質・價格に變化を及ぼさざる物品。
えいあん ぼんじん 永遠保存品【名】 使用の爲め又は時日を経るも品質・價格に變化を及ぼさざる物品。

えいあん ぼんじん 永遠保存品【名】 使用の爲め又は時日を経るも品質・價格に變化を及ぼさざる物品。
えいあん ぼんじん 永遠保存品【名】 使用の爲め又は時日を経るも品質・價格に變化を及ぼさざる物品。
えいあん ぼんじん 永遠保存品【名】 使用の爲め又は時日を経るも品質・價格に變化を及ぼさざる物品。

えいあん ぼんじん 永遠保存品【名】 使用の爲め又は時日を経るも品質・價格に變化を及ぼさざる物品。
えいあん ぼんじん 永遠保存品【名】 使用の爲め又は時日を経るも品質・價格に變化を及ぼさざる物品。
えいあん ぼんじん 永遠保存品【名】 使用の爲め又は時日を経るも品質・價格に變化を及ぼさざる物品。

えいあん ぼんじん 永遠保存品【名】 使用の爲め又は時日を経るも品質・價格に變化を及ぼさざる物品。
えいあん ぼんじん 永遠保存品【名】 使用の爲め又は時日を経るも品質・價格に變化を及ぼさざる物品。
えいあん ぼんじん 永遠保存品【名】 使用の爲め又は時日を経るも品質・價格に變化を及ぼさざる物品。

えいあん ぼんじん 永遠保存品【名】 使用の爲め又は時日を経るも品質・價格に變化を及ぼさざる物品。
えいあん ぼんじん 永遠保存品【名】 使用の爲め又は時日を経るも品質・價格に變化を及ぼさざる物品。
えいあん ぼんじん 永遠保存品【名】 使用の爲め又は時日を経るも品質・價格に變化を及ぼさざる物品。

えうくわ

えうくわ 瑤花「名」(佛)唐の玄宗(ヤシ)三
藏が大般若經を譯したりといふ玉華宮。天
子の宮殿なりしを、顯慶四年詔して寺とな
し、玄宗を居らしめられしなり。太平興瑤
花風芳

えうくわい 妖怪「名」ばけもの。へんげ。
えうくわい 要會「名」けいさん。かんぢ
やう。決算。

えうくわう 姚黃「名」(植)「古」支那に
て姚氏といふ人の培養して出せるよりい
ふ牡丹の花の最もすぐれたるもの。
えうくわん 遙官「名」遙任の官。えうにん
(遙任)を見よ。

えうげ 要偈「名」(佛)肝要なる偈頌。
えうげい 瑤瓊「名」えうぎよく(瑤玉)に同じ。
えうげき 要劇「名」樞要なる官職にあり
て事務の繁劇なること。

えうげき 要擊・邀擊「名」まちらけて敵を
撃つこと。ねらひうち。
えうげき ほうだい 要擊砲臺「名」(兵)敵
艦の通過すべき豫定航路に向け、その来る
を待ちて射撃すべき任務ある海岸砲臺。

えうげき 要劇料「名」平城天皇の頃
より要劇の官に特に賜ひし米錢。即ち一
種の増俸にて、官位に従ひて差ありき。
えうげつ 要訣「名」肝要なる奥義。大切
なるおくのて。

えうげつ 妖孽「名」わざはひのたね。わ
えうげつ 要月「名」農事の多忙なる月。
(閑月に對して)

えうげん 窯業「名」化學工業の一部。石
灰・セメント・硝子の製造業及び粘土工業
などの總稱。
えうげん 要件「名」要用なる事件。大
切なる事がら。【(哲)えういん(要因)に同
じ。】

えうげん 妖妍「名」なまめきてうつくし
えうげん 妖言「名」あやしきいひふらし。
えうげん 要言「名」要を得たることば。
肝要なることば。【(せいげん(警言)に同じ。
えうこ 腰鼓「名」紐にて、腰間に吊りて打

えうこ

鳴しし、古の鼓。始は兩手にて打ちしが、後
には杵(き)を用ふるに至れり。面の徑一尺
四寸、胴の長さ一尺五寸。推古天皇の朝百
濟より傳ふ。くれのつづみ。こし鼓。
えうこし 腰鼓師「名」中古吳樂に用ふる
腰鼓を傳授せし樂人。その弟子を腰鼓生
といふ。

えうこせい 腰鼓生「名」前條を見よ。
えうこつ 腰骨「名」腰部の骨。こしほ
ね。【(醫)人體にありて、腸骨・生骨・恥
骨等の、各一對より成る骨盤。

えうこん 天昏「名」小供の、生後三月以
内に死ぬること。【(わかに)に。天折。天死。
えうこん 幼根「名」(植)「英」Radicle 胚
(ひ)の一部、生成して根となる部分。

えうさい 要塞「名」塞は、塞(さ)に同じ。【
國境などにある要害の塞(さ)。邊障。
【(兵)國防上必要なる土地にある永久築
城。陸軍要塞と海軍要塞とあり。

えうさい かんぶん 要塞しふりよから 要塞
幹部演習旅行「名」要塞司令部重砲兵
隊要塞所在地兵器支廠築城支部の將
校を演習員として、要塞司令官の統裁する
幹部演習旅行。

えうさい さんほう 要塞參謀「名」要塞司
令部の職員の一。要塞司令官の命を承け
て、要塞の防禦計畫に關する事項を掌る。
えうさい せいれい 要塞司令官「名」

要塞司令部の職員の一。要塞所管の師團
長(臺灣と朝鮮と)にありては總督、關東州
にありては都督に屬し、要塞の防禦計畫、
諸部隊の動員計畫に任じ、兵器軍需品等
の管理・整備に従ふ。

えうさい せいの 要塞司令部「名」要塞
を統理する官署。要塞司令官要塞參謀要
塞副官要塞部員主計軍醫正・軍醫・准士
官下士及び判任文官の職員を置く。
えうさい せん 要塞戦「名」(兵)要塞の攻
防をなす戦闘。

えうさい ちたい 要塞地帯「名」(兵)要塞
の周圍なる一定の地域。
えうさい ちたい 要塞地帯法「名」
(法)要塞地帯内に住する者の、土地建物

えうさい

その他の不動産の使用に關し、又その地帯
内の地物の寫影等に關して、各種の制限を
規定したる法律。明治三十二年の發布。
えうさい 要塞砲「名」要塞に据附け
らるる大砲。砲身長大にして、現時四十碼
以上に及ぶ。

えうさい ほうへい 要塞砲兵「名」(兵)ち
ゆうほうへい(重砲兵)の舊稱。
えうさい ふうくわん 要塞副官「名」要塞
司令部の職員の一。要塞司令官の命を承
けて庶務を掌る。

えうさつ 天札「名」札も天死の意えうせ
つ(天折)に同じ。
えうさつ 要殺「名」まちふせして殺すこ
えうざん 腰斬・要斬「名」支那の戰國時
代より秦の代にかけての極刑の一。腰のと
ころより兩斷すること。

えうし 要旨「名」重要な趣旨。
えうし 天死・天折「名」えうせつ(天折)に
同じ。
えうし 幼子「名」をさなご。いとけなき
えうし 要事「名」要用なる事。大切な事
がら。えうけん。學道忽に蘇生して、要事
をいひて、後又目をとちてけりとか

えうし 幼兒「名」いとけなきちご。をさな
ご。幼沖。
えうし 姚姬「名」(人)「姚は舜の姓、姫は
えうし 要式「名」一定の方式に従ふを
必要とすること。

えうし かるゐ 要式行爲「名」(法)法律
に定めたる方式に従ふにあらざれば、成立
せず又は完全なる効力を生ぜざる行爲。
えうし けいやく 要式契約「名」(法)法
律に定めたる方式に従ふにあらざれば、成
立せず又は完全なる効力を生ぜざる契約
例へば贈與の契約の類。

えうし けいふかん 幼兒急病「名」(醫)小供
の仰けに倒れて人事不省に陥る病。痲痺
(ひ)の發作にして、主に便秘、腸内寄生蟲、
精神激動・痲痺發生、その他肺炎・胃腸カ
タ・熱病等に由りて發生す。

えうし 瑤質「名」女のうまれつき美し
き容貌。麗質。

えうじん

えうじん 妖神「名」けしからぬ神。怪し
き神。まがつかみ。
えうじん 要津「名」大切な船着場
重要な港。【(佛)生死海を渡る肝要
なる津路。

えうじん 要人「名」顯要なる地位に居る
えうしや 幼者「名」をさなご。小兒。
【(法)二十歳以下の人、即ち未成年者。民
法にては、これを無能力者と見なし、刑法
にては、分ちて第一期満十二歳以下、第
二期(満十二歳以上、満二十歳以下)とし、
罪の輕重を斟酌し、若しくは罪を論ぜず。

えうしや いかさい 幼者誘拐罪「名」
【(法)未成年者を、欺罔(ごまか)し若しくは誘惑の
手段を以て隠匿し、又は他人に交付する
罪。【(舊刑法)の語。】
えうしや 要償「名」辨償を要求するこ
と。【(損害要償)に同じ。】

えうしや 天傷・天殤「名」えうせつ(天折)
えうしや 窯匠「名」瓦陶器などを焼く
工人。やきものし。かわらやき。
えうじやく 幼弱「名」としよわ。としわ
か。幼年。幼稚。幼少。

えうじやく 幼少「名」としよわ。としわ
か。幼年。幼稚。幼少。
えうじやく 幼者略取罪「名」(法)未成年者を、暴行脅迫の手段を
以て奪取りて、隠匿し又は他人に交付する
罪。【(舊刑法)の語。】
えうし 幼主「名」をさなき主君。幼
君。【(をさなき主君)に同じ。】

えうし 要須「名」缺くべからざること。
えうし 必須須要。太平興國のために要須
なり。
えうじゆ 天壽・妖壽「名」わかじに。短命。
えうじゆ 遙成・鏖成「名」邊境を守備する
こと、又その兵卒。

えうじゆ 遙授「名」えうにん(遙任)に同じ。
えうじゆ 曜宿「名」七曜星と二十八宿
とほしはまり。盛衰記・曜宿相應の良辰
えうじゆ 要術「名」肝要なる方術。
えうじゆ 妖術「名」まほう(魔法)に同じ。
えうじゆ 妖術者「名」まほうつかひ
(魔法使)に同じ。

えうじゆ 妖術者「名」まほうつかひ
(魔法使)に同じ。

えうしよ 要處【名】えうせん 要點【同】
【副】に同じ。【要衝】に同じ。【目】かは

えうしよ 要衝【名】物事の集り又は必
ず通過すべき最も肝要なる土地。大切な
ところ。要處。【要職】に同じ。【要職】

えうしよ 要職【名】大切な役。樞要
えうす 要素【名】或物事の成立などに
缺くべからざる條件。【それ以上簡單な
る形には分析することの出来ぬもの。】

えうす 天す 妖す【動】佐變自 幼くて死
ぬ。年若くて死ぬ。【必ずしもとむ。ね
がひともとむ。えうす。】入用にてあり。え
うす。【目】を途に待受く。まちぶせす。

えうす 邀す【動】佐變他 えうす【要す】
【要す】に同じ。【途に邀して待つ】

えうす 耀す【動】佐變他 光らす。かがやか
す。【古語】壁壁代【代】には、白き綾を打
ちえうじたり。【要す】に同じ。【要す】

えうす 要す【動】佐變他 えうす【要す】
【要す】に同じ。【古語】竹笠かぐや姫のえうじた
まふべきなりとつけたまはりて。【要す】

えうす 腰椎【名】【醫】えうつゝ 腰椎【の
誤讀。】

えうせい 妖星【名】國に禍ある時にあ
らはるといふ星。【はうきぼし】(彗星)の
異稱。

えうせい 妖精【名】へんげ。もののけ。す
だま。妖怪。妖魔。魔。

えうせう 幼少【名】をさな(少)きこ
と。又その人。幼弱。幼稚。【し】。

えうせき 遙昔【名】古きむかし。おほむか
えうせき 要籍廬仕【名】古六位の
者の子にて、禁中の殿上に候して、駢立て
使はれし者。

えうせん 窳然 窳然【貌】ふかくはるかに
をぐらきさま。窳窳。窳窳。【ま】。

えうせん 窳然 窳然【貌】遙かにほのかなるさ
えうせん 遙然【貌】遠きさま。

えうせん 要素【名】或物事の成立などに
缺くべからざる條件。【それ以上簡單な
る形には分析することの出来ぬもの。】

えうたい 腰帶【名】【醫】こつぱんたい(骨
盤帶)に同じ。【せきたい(石帯)に同じ。】

えうたい 勘體【名】【文】漢詩の一體。
一定したる平仄の格に合はぬもの。あうた
い。【破格の詩歌。】

えうたい 瑤臺【名】玉にてかざれるう
てな。玉璫。【瑤臺】(月)の異名。
えうたい 腰刀【名】腰間に差す刀。【

えうたい 天桃【名】【詩經】の國風に「桃之夭夭、灼
灼其華」又「桃之夭夭、其葉蓁蓁」とあるに
本づく。女に年若く盛んなる譬。

えうたい 要道【名】肝要なる道。要路。
えうたい 瑤池【名】うつくしき池。
えうたい 幼稚【名】えうせい(幼少)に同じ。

えうたい 要領【名】大切な地域として
鎮護する處。【(幼兒)に同じ。】

えうたい 幼虫【名】【動】蟲類の卵より
孵(ふ)りて、未だ成蟲とならざるもの。例
へば蟻地獄は薄羽かげろふの幼蟲、芋蟲は
蝶の幼蟲なる類。へんたい(變態)参照。

えうたい 幼女【名】をさなき女。いとけ
なき女。

えうたい 妖女【名】女體のへんげ。妖
姫。えうに。【外面は美しくして内心の
奸惡なる女。えうに。】

えうたい 幼童【名】をさなき小供。
えうたい 妖童【名】美しき童。美少年。
えうたい 遙任【名】京都に居りながら、
地方官を兼ねること。親王又は中央政府
の役人が、その任地に赴かず、京都に在り
て、公卿の配分を受くこと。遙授。

えうたい 要人【名】役にたつ人。入用なる
人。用人。

えうたい 妖女【名】えうせい(妖女)に同じ。
えうたい 幼年【名】をさなきとし。幼き
時。幼年。

えうたい 幼女【名】えうせい(妖女)に同じ。
えうたい 幼年【名】をさなきとし。幼き
時。幼年。

えうたい 幼女【名】えうせい(妖女)に同じ。
えうたい 幼年【名】をさなきとし。幼き
時。幼年。

えうたい 幼女【名】えうせい(妖女)に同じ。
えうたい 幼年【名】をさなきとし。幼き
時。幼年。

えうたい 幼女【名】えうせい(妖女)に同じ。
えうたい 幼年【名】をさなきとし。幼き
時。幼年。

えうたい 幼女【名】えうせい(妖女)に同じ。
えうたい 幼年【名】をさなきとし。幼き
時。幼年。

えうたい 幼女【名】えうせい(妖女)に同じ。
えうたい 幼年【名】をさなきとし。幼き
時。幼年。

えうたい 幼女【名】えうせい(妖女)に同じ。
えうたい 幼年【名】をさなきとし。幼き
時。幼年。

えうたい 幼女【名】えうせい(妖女)に同じ。
えうたい 幼年【名】をさなきとし。幼き
時。幼年。

えうたい 幼女【名】えうせい(妖女)に同じ。
えうたい 幼年【名】をさなきとし。幼き
時。幼年。

えうたい 要盟【名】無理に人に盟をなさ
【しむること。】

えうたい 要盟【名】無理に人に盟をなさ
【しむること。】

えうたい 要盟【名】無理に人に盟をなさ
【しむること。】

えうたい 要盟【名】無理に人に盟をなさ
【しむること。】

えうたい 要盟【名】無理に人に盟をなさ
【しむること。】

えうたい 要盟【名】無理に人に盟をなさ
【しむること。】

えうたい 要盟【名】無理に人に盟をなさ
【しむること。】

えうたい 要盟【名】無理に人に盟をなさ
【しむること。】

えうたい 要盟【名】無理に人に盟をなさ
【しむること。】

えうたい 要盟【名】無理に人に盟をなさ
【しむること。】

えうたい 要盟【名】無理に人に盟をなさ
【しむること。】

えうたい 要盟【名】無理に人に盟をなさ
【しむること。】

ふ時、鋒を上に、石突を下にして、敵の太刀を受けはづす時にする形。
えがらひ【形】いかりの託。(俚語)
えがらてんじん 荏柄天神【名】相模國鎌倉郡二階堂村にある神社。源頼朝、幕府の鬼門鎮護として祀れるもの。

えき 役【名】公用に、人民を役務すること。夫役。えだち。
えき 奉天の役【西南の役】
役に于(く)【句】『詩經の玉風君子于役篇に「君子于役、不知其期」とあるに本づく。』君命を奉じて、他國に使う。

えき 易【名】支那の占法。筮竹(しやくちく)と算木(さんぼく)にて行ふもの。うらなひ。字易(じよく)のうらなひ。
【書】『天官易(易經)』の略。
【文】併諸の讀紙式の一。

えき 易の八象【句】はげ(八卦)に同じ。
えき 驛【名】古、公用に往來する官人等の宿泊又は行李負擔に便するたため、諸道の各地に驛馬・傳馬を置きし處。大寶令の制にては、水・陸の二種とし、陸は三里ごとに一個所づつ置き、諸道を大中・小の三等に分ちて、各馬匹の數に差異を設け、又、水驛には、一個所ごとに二乃至四艘の船を備へ、水陸共通の地には船・馬を併置せり。又、各驛とも驛長を置き、その下に驛子・傳子等の人夫ありて、いづれも衙役(ぎやうやく)を免じ、國司これを管したり。うまや。しゆくば。

えき 益【名】益とく。りえき。まうけ。【人】のためになること。世のためになること。
えき 液【名】【しる。つゆ。しづく。】【えき】(液體)の略。

えき 疫【名】やくびやう(疫病)に同じ。
えき 縁起【名】えんぎ(縁起)の略。(古語) 縁起の寺にもめぐり寺にも御讀經(みよくきやう)せさせ、えき讀ませせなどしたまひて。
えき 益友【名】益友に對して。【ぐれ。友人。益者。損友に對して。】

えき 雨【名】陰曆十月頃に降る雨。しえき 役役【名】經營苦心するさま。
えき 終役役たり

えき 奕奕【貌】大なるさま。【か

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

がやくさま。美しきさま。【愛ふるさま。えき 易 釋釋【貌】つながりて絶えざるさま。
えき えふ 奕葉【名】奕は重(おも)なる意。葉は世(よ)えき(奕世)に同じ。
えき か 腋【名】わきのした。
えき か 驛家【名】えき(驛)に同じ。
えき が 腋芽【名】(植)葉腋より生ずる芽。成長すれば枝となる。(頂芽に對して)
えき 長うさげ 液膏劑【名】藥劑の一種。脂肪油・揮發油・拔留(はくりゅう)液・酒精(しゆく)などの合劑。すべて塗擦用とす。あぶらぐすり。擦劑(さし)。

えき がく 易學【名】易經の辭にてうらなふ學問。
えき がく 易學者【名】易學にくはしに就きて、簡単に記述せるもの。一卷。新井白蛾(しんはいはくご)の著。【臭。狐臭。腋臭。】

えき き 疫鬼【名】疫病をつかさどる妖怪。太平記(たいへいき)現に、魂を奪はれ。
えき き 弈棋【名】奕は碁を打つこと。碁は碁石(いし)【碁】(圍碁)に同じ。
えき き 驛騎【名】えき(驛馬)に同じ。
えき き 驛妓【名】てんな(出女)に同じ。
えき き 驛起稻【名】古、驛田より收穫して、驛家の用途に充てし米。驛稻。

えき きん 益金【名】りえき(利益金)に同じ。
えき きやう 易經【名】(書)天文地理人事物象を陰陽の相對的に觀察して説を立てたるもの。上下經と十翼とより成り、上十經は伏羲(ふぎ)の及周の文王・周公の作とせし、十翼即ち象(しやう)・上傳・象下傳・文言傳・說卦傳・傳序傳・雜卦傳・孔子の著とせしと稱せらる。もと吉凶・禍福を占ふためのものなりしが、十翼成るに及びて、倫理的及び哲學的意義を生ずるに至れり。周代に至りて大成せるより周易ともいふ。易書。

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

えき 易

事。【高貴の人の臨終または死亡。えき 益山【名】(地)朝鮮全羅道にある山。山麓に馬韓時代の王宮の故址あり。
えき し 驛子【名】驛馬の先行をなす人。驛馬一匹に驛子一人、鈴を執りて導く。
えき し 驛使【名】はやうまづかひ。飛脚。
えき し 役使【名】えき(使役)に同じ。
えき し 腋臭【名】(醫)わきが。わきくそ。狐臭。腋氣。
えき し 弈秋【名】(人)孟子の告子上篇に出づ。古、支那にて、棋の上手なりし人。
えき じふもく 液汁【名】しる。津液。
えき じふもく 液汁木質【名】(植)えき(液材)に同じ。
えき しん 疫神【名】やくびやうがみ。やくしん。
えき しや 驛車【名】旅客を輸送する四輪えき(しや)易者【名】うらなひしや(占者)に同じ。賣卜者。
えき しや 弈者【名】棋をうつ人。どうち。
えき しや 驛舎【名】しゆくばのやどや。驛亭。驛館。
えき しや 益者【名】えき(益友)に同じ。
【益者三友【句】『論語の季氏篇に見ゆ。』友とて交れば己に益ある三種類の人。即ち正直なる人・信なる人・知識ある人。
えき じゆ 驛樹【名】宿驛に植ゑたる木。
えき じゆ 驛樹糖【名】梗米粉・砂糖水・餡・桂皮末・胡椒粉及び水を銅に入れて煉(ね)りつめ、流箱に移して、冷えたる後、適宜の大きさに裁りたる菓子。くり菓子。
えき し 易書【名】うらなひの書物。
えき し 越幾斯【名】(英)イギリスの略。【名】『食物の義』食物中の主要成分のみを比較的少量の容積に結晶濃厚ならしめたるもの。おもに水酒精・エテル等の溶媒に、或物質を浸し、その浸汁を蒸發せしめて製す。流動せるものと乾燥せるものとあり。何れも、少量にして十分の効力を有す。えくす。えつき。
えき す 益す【動】佐遷他(そせんた)利益を興ふ。【世

えき 益

えき 益

えき 益

えき 益

えき 益

えき 益

えき 益

えき 益

えき 益

えき 益

えき 益

えき 益

えき 益

えき 益

えき 益

えき 益

えき 益

えき 益

えき 益

えき 益

えき 益

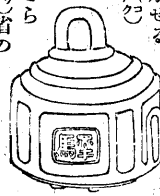
などの類。
えきり 疫痢〔名〕〔書〕主に小供に發生する一種の急性傳染病。最初惡寒(あつち)を覺え、後、發熱甚しく、腹痛を感じ、下痢を催すに至り、便秘には血を混ぜること多く、又、死に至ること多し。

えきりん 易林〔名〕〔書〕易の諸卦を敷衍して、判斷の詞を加へたるもの。十六卷。支那漢の焦贛の著。〔都大阪の語〕

えきれ 瘰癧〔名〕赤腫(あかふく)の切り贅(あし)。京えきれい 疫癘〔名〕やくびやう疫病に同じ。

えきれい 驛鈴〔名〕古、官使の諸國に赴く時、驛馬を徵發する符として、朝廷より賜はれたる鈴。その形種種あり。これに人馬徵發の多寡を示せる。

刻み日あり。二刻(ふた)乃至十刻の差等あり。官位の高きものほど、その数多きものを下賜せられ、常に中務(なかつむ)省の被攝たる主鈴をして出納せしめ、少納言をして監せしめられたり。史には大化二年より見え、鎌倉時代には既に廢せられたり。



(いれきえ)

驛路の鈴 驛傳(えきでん)の鈴。驛(えき)の鈴。現行郵便制度における郵便器具の一。郵便集配人、電報配達人等に携帯せしめ、猛獸の豫防又は渡船場の船子を招呼するに使用せしむるもの。茶、湯の釜の蓋置(おけ)に、古代の驛路の鈴をそのまま使用せるもの。驛路。

えきろ 驛路〔名〕宿驛の設ある道路。うまやち街道。驛道。芝居の囃子(はやし)の、駄馬の鈴の音に擬したるもの、又その音を發せしむに用ふる道具。街道の場を用ふ。〔えきれい(驛鈴)に同じ。〕

驛路の鈴 〔えきれい(驛鈴)に同じ。〕昔「みじか夜や驛路の鈴の耳につく」驛路の船 〔えきれい(驛鈴)に同じ。〕

えきわ 腋窩〔名〕〔醫〕えきくわ(腋窩)を見よ。

えくす 越幾斯〔名〕えきす(越幾斯)に同じ。えくすくわせん エクス光線〔名〕〔理〕

えくすくわせん(エクス光線)に同じ。

えぐち 江口〔名〕〔地〕古はこの地、離波江の口に當りしよりいふ。攝津國西成(せい)郡中島村、即ち神崎(かみざき)川の淀川より分岐する處。平安朝時代には、西海の船舶、この地に來泊し、京都に入る者は、更に用船に乘換へて、淀川を溯りし處なるより、繁盛の要津として、狹斜の地たりし。諸曲の一。江口の君の幽霊、西行法師と歌みかりして昔語りすること、撰集抄によりて作りしもの。僧一休の作といふ。次條参照。

えぐちのきみ 江口君〔名〕〔人〕次條にえぐちのたへ 江口妙〔名〕〔人〕攝津國江口にありし遊女。名は妙(た)なり。西行法師に「聴かずして、和歌の贈答をなししより、西行感じて、強ひて宿泊を請ひ、終夜閑談して別れたりといふ。江口君。

えくわ 依果〔名〕〔佛〕えはう(依報)に同じ。えくわ 善けむ 〔えく(善し)の條下を見よ。〕

えけん な 〔副〕いか(如何)を云ふ。薩摩國えと 〔名〕兄子の義。長男。長子。〔古語〕えと 依怙 〔名〕一方に最良(よ)すること。かたがひい。えこひい。へんば。偏愛。平氣。かやうのことに付いてこそ、おのづから「えこひい」の水の流れ込める處。〔古語〕爲忠言。水たまる谷のえこひい。掘りかへしわりなく植うる小田の苗代。

えご 海髪 〔名〕植。おご(海髪)に同じ。えご 齊墩果 〔名〕植。えご(齊墩果)に同じ。えごすむ 〔英名〕〔名〕〔哲〕りこじき

えごく 衣被 〔名〕〔佛〕華を盛て、諸天菩薩に捧ぐる佛具。足附の面又は竹製の籠にて、三所に紐を下げ、兩手に捧ぐ。舊稱、衣被(ふく)。えごち 依怙地 〔名〕かたい。いごち。頑屬する落葉喬木。山林に自生し、高さ四丈に達し、葉は鋭頭の卵形にて、鋸齒を有し、

花は白色にして、總狀花序又は聚繖花序をなし、種子は紫褐色にて、油料に供し、材は白色緻密にして、挽物細工玩具、杖などを作るに用ふ。あかんぢや。えごのきくわ 齊墩果科 〔名〕植。顯花植物。雙子葉類。合瓣花區に屬する一科。灌木もしくは喬木。熱帯又は溫帯に産し、有用なる木材及び油などを産出するものあり。

えごのみ 擇好 〔名〕よりこのみ。えりこのみ。〔同じ。〕

えこひい 依怙地 〔名〕〔依怙〕に屬する一年生の草。紫蘇によく似て、ただ莖葉の青色なると、臭氣あると、花舞白く、葉の淡紫色なるとを異にす。一種より取りたる油は、荳油(とうあぶら)といひ、一種の臭氣ありて、燈用印肉用等に供し、又、雨衣、傘などに塗る。又、炒(いり)りて胡麻に代用し、或は小島の飼料とし、又、油を取りたる殘の滓を荳滓(とうあぶら)といふ。もと「え(荳)とのみひひ。えごま」又は「えごま」といへり。しよ。えご

えこむ 〔動四自〕はひりこむ。落ちこむ。我五人兄弟「松の縁線釘はなれ、礎土にぞえこみける」

えごん 〔動四自〕はひりこむ。落ちこむ。我五人兄弟「松の縁線釘はなれ、礎土にぞえこみける」

えごん 〔動四自〕はひりこむ。落ちこむ。我五人兄弟「松の縁線釘はなれ、礎土にぞえこみける」

えごん 〔動四自〕はひりこむ。落ちこむ。我五人兄弟「松の縁線釘はなれ、礎土にぞえこみける」

えごん 〔動四自〕はひりこむ。落ちこむ。我五人兄弟「松の縁線釘はなれ、礎土にぞえこみける」

えごん 〔動四自〕はひりこむ。落ちこむ。我五人兄弟「松の縁線釘はなれ、礎土にぞえこみける」

えごん 〔動四自〕はひりこむ。落ちこむ。我五人兄弟「松の縁線釘はなれ、礎土にぞえこみける」

えごん 〔動四自〕はひりこむ。落ちこむ。我五人兄弟「松の縁線釘はなれ、礎土にぞえこみける」

えごん 〔動四自〕はひりこむ。落ちこむ。我五人兄弟「松の縁線釘はなれ、礎土にぞえこみける」

えごん 〔動四自〕はひりこむ。落ちこむ。我五人兄弟「松の縁線釘はなれ、礎土にぞえこみける」

えごん 〔動四自〕はひりこむ。落ちこむ。我五人兄弟「松の縁線釘はなれ、礎土にぞえこみける」

えごん 〔動四自〕はひりこむ。落ちこむ。我五人兄弟「松の縁線釘はなれ、礎土にぞえこみける」

の法華經を弘通するにつきて、如來の室に入り、如來の衣を著け、如來の座に就きて、廣く四衆のために法を説けと教へたるもの。衣は佛の柔和忍辱心、座は佛が現象世界の空假を觀じて執著せざること、室は佛の大慈悲に譬へたるなり。

衣座室の三軌 〔佛〕釋迦が衣座室の三つの比喩を以て説きたる教。前條参照。

えさし ばうき 柄差帶 〔名〕帶の莖に他の柄をすげたるもの。異途(いどう)集内にかと突入り、柄さし帯さか手に取り、二階の下から板敷を、ぐわたとぐわたと突きさすなどに發する聲。えい。古語。聲。大なる木どもには、太き綱をつけて、聲を合せて、えさまきと引上げさわぐ。

えささ 〔形〕〔善し〕に同じ。〔古語〕萬葉たぐすま白山風のねなへども子ろがおそぎのあるこそえしも

えさき 〔名〕よくあらん。よろしからん。よきことあらん。幸あらん。〔古語〕萬葉赤駒のいゆきはばかある眞葛原なのつてことただしえきむ

えしき 兄磯城 〔名〕〔人〕山城國の土人の長。神武天皇の東征の軍を起すに及び、召せども應ぜずして、遂に殺さる。おじき(弟磯城)参照。

えじき 衣食住 〔名〕〔佛〕いじく(衣食住)に同じ。〔有情(おほ)衣食住〕参照。

えじぬ 吉野 〔名〕〔地〕よしの吉野の古稱。えじぶと 埃及 〔英名〕〔名〕〔地〕アフリカ洲の北部にある國。表面上トルコを宗主國と仰げども、實權は英國に在り。首府をカイロと稱す。面積約四十萬方哩。

えじぶと 埃及 〔英名〕〔名〕〔地〕アフリカ洲の北部にある國。表面上トルコを宗主國と仰げども、實權は英國に在り。首府をカイロと稱す。面積約四十萬方哩。

えじぶと 埃及 〔英名〕〔名〕〔地〕アフリカ洲の北部にある國。表面上トルコを宗主國と仰げども、實權は英國に在り。首府をカイロと稱す。面積約四十萬方哩。

えじぶと 埃及 〔英名〕〔名〕〔地〕アフリカ洲の北部にある國。表面上トルコを宗主國と仰げども、實權は英國に在り。首府をカイロと稱す。面積約四十萬方哩。



ふべき事。(古語)

えせなき 似非賽【名】見苦しき賽。賽らし

くなき賽。(古語) 七職人歌合。ねたやけに

えせさいはひ 似非幸【名】幸らしく見え

ながら、實は然らぬこと。たしかならぬ幸。

えせさむらひ 似非士【名】武士にあるま

じき行ひの武士。

えせさんだんろんぼう 似非三段論法

【名】(哲) えせさん(似非推論)に同じ。

えせすりやう 似非受領【名】受領らしく

見えぬ受領。見すばらしき受領。(古語)

えせするん 似非推論【名】(哲)「英

非三段論法」の約束を破れる推論。似

えせだくみ 似非匠【名】大工らしからぬ、

えせだくみ(古語) 十割人を使ふことは工

えせ

えせ

えせ

えせ

えせわらひ 似非笑【名】えせ笑ふこと。

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えせわらひ 似非笑【動四自】せせらわ

えぞぼん

えぞぼん 蝦夷盆【名】蝦夷人の造れる盆。小刀のみにて造り、材は櫟(ク)又は山毛櫨(ク)を用ひ、彫文あり。

えぞまつ 蝦夷松【名】(植)松杉(ツ)科に属する常緑喬木。我が國中部以北及び北海道の深山に自生す。高さ十四五丈に達し、落葉松(ツ)に似、樹皮は黒褐色にして鱗片状をなして剝離し、材は櫟に似て、建築船材器具製造などに用ひられ、又、製紙の原料となる。花は單性、雌雄同株。まつはだ。くらえぞ。くらえぞまつ。てしほまつ。

えぞもみ 蝦夷樅【名】(植)しらび(白檜)に同じ。

えぞやなぎ 蝦夷柳【名】(植)楊柳(ヤ)科に属する落葉性の喬木或は灌木。枝は少しく紫がかり、葉の裏面は帯白色をなし、托葉を有す。雌雄同株、春、葉に先だちて開花す。北海道の原野に多し。

えぞやまどり 蝦夷山鳥松【名】(動)鷄鶉(ト)類に属する鳥。北海道に産し、大さ鳩よりやや大に、脚は全く白色の羽毛を以て被はれ、背部は白、褐、灰黒等の諸色を混ぜる複雑な斑紋を有し、腹部は白色にして黒色と暗褐色との斑を混じり、眼上には暗紅色の肉冠あり。えぞらいてう。

えぞゆり 蝦夷百合【名】(植)くるり(黒百合)に同じ。

えぞらいてう 蝦夷雷鳥【名】(動)えぞやまどり(蝦夷山鳥)に同じ。

えだ枝【名】草木の腋芽(ワ)の發達せるもの。えだき。柯條。和名枝條。玉簫云、枝柯、衣太木之別也。植物事の本より分れ出でたるもの。えだは。

枝切る風【句】殆ど枝を吹折らんとする、勢のげしき風。山家「山ざくら枝きる風のなごりなく花をさながらわがものにする」。

枝の花【句】じんや(親王)に同じ。〔語〕枝も狭(に)に【句】枝もせまく思はるるほどに。(古語) 夫木(山賊(勢)のすどの竹垣えだもせに夕顔なれりすがひすがひに) 枝も動かす【句】枝を鳴さず(に)同じ。

えだ

〔語〕月船集「玉柳枝もうごかぬ君が代になびくや風のしるしなるらん」 枝を交(か)す【句】「枝を連ぬ(に)同じ。源氏はねをならべ、枝をかはさんと契らせたまひ」

枝を挽(ひ)めて花を散す【句】一部分の缺點を改めんとし、却て全體を損ふ譬、角を矯(こ)めて牛を殺す。〔語〕枝を連ぬ【句】「れり(連理)を見よ」男女、深く契る。枝を交(か)す。 枝を鳴さす【句】「雨、地(つち)を破らす」を見よ世中の静かに治まる譬。枝も動かす。〔語〕葉花(はな)も動きなくして、枝をならさねば、か(か)をりまきり」

えだ枝【名】「身體の枝の意」手又は足。四肢。え。(古語) 和名肢、字、亦作肢、和名衣太、四體也。 〔語〕木の枝に附けたる贈物を數ふる語。源氏「雉、一えだ奉らせたまふ」

えだ(英語)【名】北歐族に那威(ノルウェー)海岸の北海民族の神話・英雄譚及び詩篇など。西曆十三世紀頃に集められたり。

えだあぶき 枝扇【名】古、儀式に草木の枝を扇に代用せしものなるべし。(古語) 枝「樹の木のほかに高きが、もとよりうち斬りて、定置僧都のえだあぶきにせさせば」

えだい 衣帶【名】(佛)ほふえ法衣(に)同じ。柄太鼓【名】柄の附けるひらたき太鼓。芝居の囃子(ハシ)などに用ふ。

えだい 枝絲【名】えだな(枝繩)に同じ。えだう 筵道【名】えだな(筵道)に同じ。〔古語〕

えだうぐ 得道具【名】えもの(得物)に同じ。鳥雲酒は、膳の前後を、すべて三杯をすべからず。さるから、杯は、得道具を許すべし。 枝打【名】樹木の下の方にある枝を伐りて、手入れをすること。えだおろし。〔えだより枝振)に同じ。 枝打うちくじゆさう 枝打福壽草【名】(植)毛茛(ハシ)科に属する草。福壽草の類。

えだうち 東北地方及び北海道に野生し、葉は多裂し、梢端より枝を分岐して、各枝に一箇づつの蕾(サ)を著く。 〔語〕

えだう

えだう 枝下【名】えだう(枝打)に同じ。後撰「木がくれて五月待つとも杜鵑羽ならはしに枝うりせよ」

えだえだ 枝枝【名】數多の枝。鳥橋はおのがえだえだなれども玉にぬくときおやに緒にぬく。兄弟、親族、連枝。〔古語〕聖天殿の御えだえだに、露かかしたまはぬ人なく。 枝劣【名】父祖より、子孫の劣りたること。(古語) 聖賢もと見れば高きかつらもけふよりえだおとりすと人のいふらん

えだおろし 枝下【名】えだう(枝打)に同じ。えだがき 枝梯【名】梯の實を、枝のまま折取れるもの。〔えだがき(串梯)に同じ。 〔語〕もとの川より分れて流るる川。支流。分流。えだながれ。 〔語〕新選組「枝川の永來にけり野末より」

えだかみ 枝髻【名】本社に屬して祀れる神。末社の神。(古語) 〔語〕髪(かみ)の短く少きを長く粧ふに用ふる髻。 〔語〕えだき 枝木【名】えだ(枝)に同じ。(古語) 〔語〕えだきやま木の下には風は早くともえだ木はつゆもすくなくぞ思ふ

えだきしやう 依他起情【名】(佛)さんじや(三性)を見よ。 〔語〕えだきりばさみ 枝切鋏【名】果樹の剪定に用ふる鋏。日本のものはその刃、直線にして、兩刃とも一様に鋭利なれど、西洋形のは、その一刃、凸形の曲線をなして鋭く、一刃は凹形なる曲線をなして鈍し。

えだぐり 枝栗【名】枝に著けるままの栗の實。夫平えだ栗のしるしるるまの栗の方に向けるを見るぞまむ心地する」 〔語〕えださし 枝差【名】幹より枝のさし出でたるさま。えださし。えだつき。えだうち。源氏「同じえださしなどの、いと麗なるこそ」

えださんて 枝珊瑚【名】次條の略。

えださん

えださん じゆ 枝珊瑚樹【名】珊瑚樹の、樹木の枝を分てるが如きさまなるもの。えださんて。 〔語〕えだした 枝下【名】樹木の最下位に在る枝より根までの長さ。 〔語〕えだじま 江田島【名】(地)安藝國(ウ)の西側にある島。廣島の南方に當り、安藝郡に屬す。周囲、約八里。西南部は一地頭を以て能美(ノミ)島に連る。海軍兵學校の所在地。古は「衣田島」とも書けり。

えだしやくとり 枝尺蠖【名】(動)鱗翅(リ)類に属する昆蟲。幼蟲は桑の枝に著きて葉枝を食害す。成熟せるものは二寸の長さになり、灰褐色もしくは灰白にして、小き黒紋並列し、樹皮に類す。蛾(成)は翅の色灰黒にして、前翅に二箇、後翅に一箇の黒條あり。幼蟲は年二回發生す。くはしやくとり。くはえだしやくとり。

えだじろ 枝城【名】根城(ねしろ)より外に築きたる出城。子城。 〔語〕えだすみ 枝炭【名】躑躅(ツツジ)又は樺(カハ)の小枝を炭に焼きたるもの。茶の湯の時、爐火をおこす媒に用ふ。上に胡粉又は石灰を塗りたるを白炭(しろ)といひ、塗らざるを山色(やまいろ)といふ。和泉國横山より多く産するによりて、横山炭ともいふ。

枝炭の忠知【名】「句」枝炭や焼かぬむかし、雪の枝といふ句によりて得たる、神野(かみ)の忠知の諱名(な)なり。 〔語〕えだたちばな 枝橘【名】紋所の一。橘の花を中心として、葉と枝とを配したるもの。

えだぢ 役【名】國民の義務として、公務を課せられて、その事に従ふこと。儒役(にうやく)。夫役(ふやく)。衛(えい)。萬葉(まんな)をちやしはな言ひてこらわが役は夫だむはたらけぬならかむ。〔語〕役。役。是役(このやく)コノエダチ。 〔語〕えだつ 役つ【勤四目】課役にあたりて出づ。公務を課せられて出づ。兵役又は夫役(ふやく)に服す。(古語) 〔語〕建内宿禰(たけうちすくね)命(みこと)ひきゐて堤地に役(やく)たせて、百濟(ひやくせい)の



の池を作る」
えだつ 役つ (動下二他) 課役にあつ。公

務を課す。(古語) 蜀秦人(の)をえだてて

英田堤(の)また英田三宅(の)を作り」

えだづか 枝束【名】(建)小屋組に用ふる、

斜なる束。

えだつき 枝附【名】えだ(枝差)に同じ。

えだつきばたん 枝附牡丹【名】紋所の一。

牡丹の花を中心として、葉と枝を配した

もの。

えだつたひ 枝傳【名】枝より枝に傳ひ移

なれば、肢爪堅くして、なづまざりけり」

えだつめ 肢爪【名】脚の爪。盛衰商人馬

なれば、肢爪堅くして、なづまざりけり」

えだて 柄立【名】さし傘の柄を挿込みて、

傘を立てる筒。牛の角の大きなをくりぬき

て作り、又、革にて作る。

えだてうし 枝調子【名】(音)雅樂の調子

の一。平調(ひらび)には性調、道調、黄鐘(わうしゅう)

調には水調、大食(だいじき)調には乞食調、壹越

(いち)調には沙陀調。

えだてがは 柄立草【名】草にて作りたる

えだながれ 枝流【名】えだがは枝川に同じ。

えだなは 枝繩【名】一端に鉤(かぎ)を付け、

延繩(の)の幹繩に結びつけたる絲、數條を

並べて結びつけ、注連繩(しづな)のごとくにし

て、水中になかば洗めて、魚をからしむ。

えだい

えだなんてん 枝南天【名】紋所の一。數

枚の葉の附ける南天の枝に、三箇の實を配

したるもの。

えだのいけ 枝池【名】(地)上野國に

ありといふ池。今の新田郡江田村にある古

池はその跡なるべしといふ。歌枕たり。

夫木、秋風に吹きしかれたる鳥松の枝の池

にや波はこゆらん」

えだのがう 支郷【名】本郷に附屬せる郷。

えだのはな 枝の花【句】えだ(枝)の條下

を見よ。

えだのはま 枝濱【名】(地)播磨國にあ

りといふ濱。歌枕たり。名寄、散りにける

花のなごりのこひしきにえだのはまべを

來て見つるかな」

えだつ

えだは 枝葉【名】枝と葉と。新六帖「し

らかしの枝葉おしなみ雪ふれど馴れたる

山は道もおよばず」

えだふね 枝船【名】大船に添へたる小船

ともふね。(もとと船に對して)

えだふり 枝振【名】えだ(枝差)に同じ。

えだふり 枝振【名】えだ(枝差)に同じ。

えだばね 枝骨【名】手足の骨。(京都大阪

の語) 丹波興正、枝骨もいてくれう」

えだまめ 枝豆【名】大豆を枝のままこき

とりたるもの。茹(ゆ)てて莢を去り、中の實

を食す。

えだみち 枝路【名】本道より分れたる

みち。よこみち。岐路。支路。事物の、

正路をはづるること。よこみち。岐路。

えだみつ 枝光【名】(地)筑前國八幡市にあ

る九州鐵道の一驛。製鐵所の所在地。

えだやしろ 支社【名】(支社)に同じ。

えだやしろ 支社【名】(支社)に同じ。

えたり かしこし 得たり賢し【句】かしこ

えたりがほ 得たり顔【名】しなりが(爲

たり顔)に同じ。(古語) 今鯨、陸方つかう

まつりて侍らんなど、えたり顔にいひけ

るを」

えたりや 得たりや【感】次條に同じ。著

聞えたりや、えたりやと大聲を出す時」

えたりや おう 得たりや【感】好結

果を得べきを自信し、又は實際好結果を得

たる時に發する聲。候(こ)ひるむところを

えたりや おうとて、十騎の兵、轡を並べて

驅けたりければ」

えだる 柄樽【名】二つの角の如き柄を大

きく高く作り附けたる酒樽。多くは朱塗

にして、祝の時になどに、匣(ひら)の中に納れ

て、酒を人に贈るに用ふ。つのだる。人形

だる。あまのだる。

えだわかれ 枝分【名】樹木の枝の分岐。

えだわかれ 枝分【名】樹木の枝の分岐。

えだわかれ 枝分【名】樹木の枝の分岐。

えだわかれ 枝分【名】樹木の枝の分岐。

えだわかれ 枝分【名】樹木の枝の分岐。

えだわかれ 枝分【名】樹木の枝の分岐。

えだは

を醗酵の順序に従ひて分ち容るる小桶。

(もとと桶に對して)

えだをり 枝折【名】枝を折ること。新六帖

「古郷の花桶の枝をりにかたみおぼゆる一

昔かな」

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをれ 枝折【名】枝を折ること。折

えだをり

めに大事を廢する體。

えつ 調【名】え(けん)調見)に同じ。「調を

賜ふ」

えつ 調【名】え(けん)調見)に同じ。「調を

賜ふ」

えつ 調【名】え(けん)調見)に同じ。「調を

賜ふ」

えつ 調【名】え(けん)調見)に同じ。「調を

賜ふ」

えつ 調【名】え(けん)調見)に同じ。「調を

賜ふ」

えつ 調【名】え(けん)調見)に同じ。「調を

賜ふ」

えつ 調【名】え(けん)調見)に同じ。「調を

賜ふ」

えつ 調【名】え(けん)調見)に同じ。「調を

賜ふ」

えつ 調【名】え(けん)調見)に同じ。「調を

賜ふ」

えつ 調【名】え(けん)調見)に同じ。「調を

賜ふ」

えつ 調【名】え(けん)調見)に同じ。「調を

賜ふ」

えつ 調【名】え(けん)調見)に同じ。「調を

賜ふ」

えつ 調【名】え(けん)調見)に同じ。「調を

賜ふ」

えつ 調【名】え(けん)調見)に同じ。「調を

賜ふ」

えつ 調【名】え(けん)調見)に同じ。「調を

賜ふ」

えつ 調【名】え(けん)調見)に同じ。「調を

賜ふ」

えつ 調【名】え(けん)調見)に同じ。「調を

賜ふ」

えつ 調【名】え(けん)調見)に同じ。「調を

賜ふ」

えつ 調【名】え(けん)調見)に同じ。「調を

賜ふ」

えつ 調【名】え(けん)調見)に同じ。「調を

賜ふ」

えつ 調【名】え(けん)調見)に同じ。「調を

えつ

多くして、延焼速かなり。〔諺語〕
江戸の人の気性の敏捷なる響。〔諺語〕
えごあかき江戸葵〔名〕〔植〕あかき葵を云ふ。〔奥州南部の方言〕

えごあきな江戸商〔名〕商品江戸に出して商ふこと。奥州天下泰平、國土萬人、江戸商を心懸け、その道道の店出して、

えごあき江戸扇〔名〕扇の一種。藍摺〔名〕にして、白く漉を畫きたるもの。柳筆筆記江戸扇、柳亭曰く、藍の扇に、隅より漉をかけて、白くあつけたる扇、今もあり、これ江戸にて作り初めしものか。

えごいちけ江戸一漬〔名〕ひきいちけ〔名〕〔百一漬〕に同じ。

えごうしんべい江藤新平〔名〕〔人〕佐賀の亂の首魁。南白と號す。佐賀の人。鍋島侯の。明治維新の際、王事に奔走し、後、司法卿參議に任ぜられ、西郷隆盛等と征韓論を主張し、議行はれざるに平かならず、勢に驅られて兵を擧げ、事敗れて、明治七年朝に處せらる。年四十。

えごうた江戸唄〔名〕江戸の長唄の稱。〔京都大阪の語〕

えごうち江戸團扇〔名〕江戸特産の團扇。寛永年間、割竹に白紙を貼り、彩畫を施さざるものを製造せしに始まり、その後、墨繪紅繪漆繪等のものも出来たり。

えごうまれうはきのかばやき江戸生艶氣津燒〔名〕〔書〕浮氣は艶と音近きより通はせて名づけたる。山東京傳の作れる黄表紙。艶次郎〔名〕といふ浮氣にして己惚〔名〕強き者を主人公として作れる。寛政太甲といふ賣名家の事蹟を取入れて作れるものといふ。挿畫も自筆。えんじう〔名〕次郎の參照。

えごうめ江戸梅〔名〕〔植〕梅の一種。花大きく、莖長く、葉は赤ばみて花の開くと運し。

えごが江戸鹿子〔名〕こたひぶのこ太夫鹿子を云ふ。〔京都大阪の語〕

えごが江戸紫〔名〕紫色の原料を、白色の原料にて捲込みて棒状となし、小口截にしたる菓子。

えごが江戸川〔名〕〔地〕東京市小石

えごが

えごが

川區にある小川。下流を神田〔名〕川といひ、大川に注ぐ。〔地〕利根〔名〕川の分流。寛永年中に開設せるものにて、これによりて利根川より横に江戸に達するを得るに至りしが故に、新利根川とも小利根川とも、又江戸川ともいふ。下總國關宿〔名〕に、利根川と分れ、東京灣に入る。長さ十七里餘。〔次條の略〕

えごが江戸川紙〔名〕東京市江戸川邊より製出する手漉紙の一種。白色。質にして、主に書簡箋用に供す。えごがは

えごがは江戸瓦〔名〕長屋に用ふる屋根瓦。大阪瓦よりは小なり。

えごかんばん江戸看板〔名〕江戸の芝居の看板の。京阪地方の一枚看板に相當するものにて、上部に虎形〔名〕の無きもの。えど。

えごが江戸家老〔名〕あづまがらう〔名〕妻家老に同じ。國家老に對して。

えごが江戸芥〔名〕〔植〕しろから〔名〕白芥〔名〕に同じ。〔國家老に對して〕

えごきく江戸菊〔名〕〔植〕えぞきく〔名〕蝦夷菊を云ふ。〔遠江國の方言〕

えごきはん江戸脚絆〔名〕現今の普通の脚絆、即ち表は紺の首綱〔名〕裏は淺黄木綿にて作れるもの。〔徳川時代の語〕

えごきり江戸切〔名〕〔建〕石面の仕上〔名〕に、縁に狭き平なる部分を殘し、中を突出せしめたるもの。〔投四を見よ〕

えごきん江戸金剛〔名〕〔植〕つめれんげ〔名〕蓮華を云ふ。〔周防國の方言〕

えごきん江戸金剛〔名〕江戸時代に、江戸にて出版頒布せし曆。毎年、京都の曆本を町年寄に下付せられ、その監督・検査の下に作りしもの。大小六種ありたり。

えごき江戸座〔名〕徳川時代に、江戸に設けられし金座〔名〕〔駿府座に對して〕

えごき江戸座〔名〕徳川時代に、江戸に設けられし金座〔名〕〔駿府座に對して〕

えごき

えごきもん江戸祭文〔名〕歌祭文の一種とすれど、多くは田舎廻りの祭文語の勝手に名づけたるもの。〔りきみ〕を第一とし、歌淨瑠璃何れの差別なく載すといふ。〔大阪祭文に對して〕

えごき江戸崎〔名〕〔地〕常陸國稻敷〔名〕郡にある町。小野川の西岸。龍ヶ崎〔名〕の東北六里餘。江戸崎城址あり。

えごき江戸崎町〔名〕〔地〕常陸國稻敷〔名〕郡にある町。小野川の西岸。龍ヶ崎〔名〕の東北六里餘。江戸崎城址あり。

えごき江戸崎町〔名〕〔地〕常陸國稻敷〔名〕郡にある町。小野川の西岸。龍ヶ崎〔名〕の東北六里餘。江戸崎城址あり。

えごき江戸崎町〔名〕〔地〕常陸國稻敷〔名〕郡にある町。小野川の西岸。龍ヶ崎〔名〕の東北六里餘。江戸崎城址あり。

えごき江戸崎町〔名〕〔地〕常陸國稻敷〔名〕郡にある町。小野川の西岸。龍ヶ崎〔名〕の東北六里餘。江戸崎城址あり。

えごき江戸崎町〔名〕〔地〕常陸國稻敷〔名〕郡にある町。小野川の西岸。龍ヶ崎〔名〕の東北六里餘。江戸崎城址あり。

えごき江戸崎町〔名〕〔地〕常陸國稻敷〔名〕郡にある町。小野川の西岸。龍ヶ崎〔名〕の東北六里餘。江戸崎城址あり。

えごき江戸崎町〔名〕〔地〕常陸國稻敷〔名〕郡にある町。小野川の西岸。龍ヶ崎〔名〕の東北六里餘。江戸崎城址あり。

えごき江戸崎町〔名〕〔地〕常陸國稻敷〔名〕郡にある町。小野川の西岸。龍ヶ崎〔名〕の東北六里餘。江戸崎城址あり。

えごき江戸崎町〔名〕〔地〕常陸國稻敷〔名〕郡にある町。小野川の西岸。龍ヶ崎〔名〕の東北六里餘。江戸崎城址あり。

えごき江戸崎町〔名〕〔地〕常陸國稻敷〔名〕郡にある町。小野川の西岸。龍ヶ崎〔名〕の東北六里餘。江戸崎城址あり。

えごき江戸崎町〔名〕〔地〕常陸國稻敷〔名〕郡にある町。小野川の西岸。龍ヶ崎〔名〕の東北六里餘。江戸崎城址あり。

えごき江戸崎町〔名〕〔地〕常陸國稻敷〔名〕郡にある町。小野川の西岸。龍ヶ崎〔名〕の東北六里餘。江戸崎城址あり。

えごき江戸城〔名〕武藏國東京にある。長祿年間太田道灌始め築造し、後、上杉・北條兩氏に屬し、天正十八年徳川家康の居城となり、文祿慶長の頃再築し、更に慶長十一年より大いに工事を起し、寛永十三年外郭を築きて、全く大成す。本城〔名〕本丸〔名〕の丸三の丸、西城〔名〕西の丸、吹上の三部に大別す。しばしば火災に遇へり、明治初年より、江戸淨瑠璃〔名〕あづまじやうり〔名〕東淨瑠璃〔名〕に同じ。

えごき江戸巡禮〔名〕きやうじゆんれい〔名〕京巡禮を見よ。

えごき江戸巡禮〔名〕きやうじゆんれい〔名〕京巡禮を見よ。

えごき江戸巡禮〔名〕きやうじゆんれい〔名〕京巡禮を見よ。

えごき江戸巡禮〔名〕きやうじゆんれい〔名〕京巡禮を見よ。

えごき江戸巡禮〔名〕きやうじゆんれい〔名〕京巡禮を見よ。

えごき江戸巡禮〔名〕きやうじゆんれい〔名〕京巡禮を見よ。

えごき江戸巡禮〔名〕きやうじゆんれい〔名〕京巡禮を見よ。

えごき江戸巡禮〔名〕きやうじゆんれい〔名〕京巡禮を見よ。

えごき江戸巡禮〔名〕きやうじゆんれい〔名〕京巡禮を見よ。

えごき江戸巡禮〔名〕きやうじゆんれい〔名〕京巡禮を見よ。

えごき江戸巡禮〔名〕きやうじゆんれい〔名〕京巡禮を見よ。

えごき江戸巡禮〔名〕きやうじゆんれい〔名〕京巡禮を見よ。

えごき江戸巡禮〔名〕きやうじゆんれい〔名〕京巡禮を見よ。

えんま

眞正の膽力に缺けたる響。(諺語)
江戸兒は背越の錢を遣はす【句】江戸兒は氣性快調にして、その日に儲けたる金銭を、その日に遣ひはたし、田舎者の如く貯蓄などはせず。(諺語)

えんづま 江戸棲【名】次條に同じ。

えんづまもやう 江戸棲模様【名】江戸城の大奥より始まるるにより名づくといふ。後身(おし)には無くして、前身(おし)と狂(きやう)との表裏にのみ附けたる棲模様。えんづま。

えんづめ 江戸詰【名】大名の家臣が江戸に出て、勤務すること。えんばん(國詰に對して)。

えんづめはう 江戸追放【名】えんばみ(江戸でてんまやう)江戸傳馬役【名】江戸時代に、幕府の用度・雜物の運輸に従ひし常傳馬及び常人夫。

えんどうぐわん 江戸冬瓜【名】(植)さうぐわ(冬瓜)を云ふ。(伊賀國の方言)
えんどうころ 江戸野老山草薺【名】(植)薯蕷(かど)科に屬する多年生の草。山野に自生し、葉は細き蔓をなして纏繞(むす)し、葉は長き葉柄ありて、心臟形の鋭頭をなし、夏日淡黄色の花を穗狀花序に著く。おにところ。おほどころ。

えんどうも 江戸供【名】江戸に參勤する供。堀河渡江戶供ゆるされ、在國せしが。

えんどう 江戸菜【名】(植)からしな(芥菜)に同じ。

えんどうがうた 江戸長唄【名】俗曲の一種。寛永頃、中村勘三郎の始めしもの。ながうた。

えんどうまり 江戸説【名】江戸兒風の言葉
えんどうに 江戸煮【名】章魚(いか)を一寸ほどに刻み、酒を多分に加へて煮たる食品。煮る中間に酢と醤油とを加ふれば、出来柔らかなり。

えんどうにしき 江戸錦繪【名】江戸より出づる錦繪。錦繪は江戸の名物なりしより、特にいふ。えんどう。

えんどうのみづ 江戸水【名】式亭三馬の賣り出しし一種の婦人用の化粧水(みづ)。柳

えんば

えんば 江戸秤座【名】江戸時代に、關東三十三箇國の秤の事を掌りし處。守隨(しゆい)氏世襲す。
えんばくふ 江戸幕府【名】さかばくふ(徳川幕府)に同じ。

えんばし 江戸橋【名】(地)東京市日本橋區にありて、日本橋川に架かる橋。日本橋と平行して、その東方にあり。徳川時代に、江戸川の下流を隅田川の方に向はしめて、日本橋川となし、この橋の邊に船舶海泊をも碇繋せしめて、水陸の運輸を完成せり。

えんばん 江戸判【名】けいあやえんさこばんきん(慶長江戸座小判金)に同じ。

えんばん 江戸番【名】えんづめ(江戸詰)に同じ。長町女腹司(その折りしも江戸番。すぐに江戸より浪人あり)

えんばん 江戸萬古【名】萬古燒の一種。天明の頃、江戸本所なる小梅郷にて作りしもの。むさしばんこ。

えんばんだい 江戸半太夫【名】(人)淨瑠璃の名家。晩に坂本梁雲と稱す。肥前平太夫の門に學び、遂に一家をなす。江戸節の祖。貞享元祿頃の人。

えんばらひ 江戸拂【名】江戸時代の正刑たりし追放の一種。江戸市中に住居を許されぬこと。えんどうめはう。

えんひしき 江戸湯【名】(動)ひしきひの一種。形、常のひしきひに似て、眼の上に白き筋あり。ぬま太郎。さかばう。

えんひせん 江戸肥前掾【名】(人)淨瑠璃の名家。通稱は藤原清政。虎屋若太夫に學び、寛文中一流を出し、肥前節と稱す。天和貞享頃の人。

えんどう 江戸風【名】江戸の流儀。えんどうまへ。【文】うきうき浮世風(江戸)に同じ。

えんどう 江戸節【名】はんたいふ(半太夫節)に同じ。

えんどうらう 江戸ふらう【名】(植)いんげんさび(隠元豆)に同じ。

えんどうほづき 江戸酸漿【名】色の勝れて赤きはほづき。類聚集。近年江戸ほづきは

えんま

とて、美しく赤きあり、青ほほづきの時分には、や珍しければ、もてはやすることぞ。丹波より来る青ほほづきは、吹き散されぬべし。有になり、錦にはさまれ

えんま 江戸間【名】座敷の廣さの量りかたの一。江戸に行はれしもの。曲尺にて五尺八寸を一間とす。(京間・田舎間などに對して)

えんます 江戸餅【名】糠屋藤右衛門の支配下に屬し、江戸にて造りし餅。寛文年中まで用ひられたり。

えんまちざしり 江戸町年寄【名】江戸町奉行の命を奉じて、政令を頒ち、市町に係る一切の事を扱ひ、名主を進退する等の事を扱ひし町役人。樽・節・喜多村の三氏これを世職とせり。俗稱、御役所。

えんまちざしりやう 江戸町奉行【名】江戸幕府の職制の一。三奉行の一。老中の支配に屬し、江戸市中の行政・司法・警察等に關する一切の事務を扱ひしもの。

えんまへ 江戸前【名】えんどう(江戸風)に同じ。鰻栗毛野(あるにまかせ、江戸まへ)の魚のうまみに、豊島屋の劍菱(さむらひ)淨世風(江戸)前のかばやきは、ほづきと湯氣の立つのを血に並べて

えんまへたれ 江戸前垂【名】こんま(かけ(紺前掛)に同じ。(京都大阪の語)

えんまへん 江戸萬歳【名】明治維新前に江戸に在りし一種の乞食。三河萬歳の眞似をして、錢を貰ひあるきしもの。

えんまめ 江戸豆【名】(植)いんげんさび(隠元豆)に同じ。

えんみそ 江戸味噌【名】赤黄色を帯びた味噌。おもに東京にて製す。俗に甘味噌といふ。(田舎味噌に對して)

えんみやげ 江戸土産【名】江戸より田舎へ歸る者の求めゆきしみやげ物。柳屋(えんみやげ車)などもなごなどへ張り(この句にては、あづま錦繪をさしていへるなり)

えんむらさき 江戸紫【名】江戸にて染めはじめたる紫色。藍色の勝たるものに、や桔梗色に似たり。

江戸紫に京鹿子(けいろうし)【句】江戸と京

えんま

都との有名なる染物の色を並べていふ語。(諺語)
江戸紫に京緋色(けいべいしき)【句】前條と同類の語。(諺語)
えんめいぶつ 江戸名物【名】江戸にて有する元結。渡世身持(わたせみもち)江戸もとゆひの廿五丸を巻きたて

えんもの 江戸者【名】江戸の人。えんじん。俳諧新選(かいかいしんせん)「見て聞くと江戸者はいふかほととぎす」

江戸者の梨を食ふやう【句】「江戸兒(えんご)の梨を食ふやうに同じ。(諺語)

えんもも 江戸桃【名】(植)さきわけも(咲分桃)に同じ。

えんゆふね 江戸湯船【名】江戸時代に、江戸にありし湯船。

えんざり 江戸つき得鳥羽月【名】陰曆四月の異稱。(古語)藏玉集(ざうぎく)藤の花夏に懸れる奥山の下にや待たんとしはのつき

えんろくくみ 江戸くまひより 江戸六組通日雇【名】江戸時代に、市中の日本橋・京橋・芝・本芝・赤坂・神田の六箇所に配置せし東海道通の日雇人足。

えんろふ 擇捉【名】(地)擇捉島四郡の一。島の最南に位す。

えんろふし 擇捉島江提島【名】(地)千島群島の最大なるもの。周囲百五十里。擇捉振別(えりぞへ)紗那(さな)志取(しと)の四郡に分る。北海道廳根室支廳の所管。寛政十二年近藤重藏此に日本領土たることを標示せり。得撫(えんろふ)島との間に幅十里の海峡あり、擇捉海峡と云ふ。

えんろふかいけ 擇捉海峡【名】(地)前條を見よ。

えんわつらひ 江戸煩【名】「地方の人の江戸に出て、風土の相異よりこれに惱む者多し」とたび江戸を退くや、途中、治せずして癒ゆること往往なりしより呼びたるもの(か)け脚氣(けあき)に同じ。(徳川時代の語)

えんさ 江戸給【名】えんじき(江戸錦繪)に同じ。

えん【名】あに(兄)を云ふ。(常陸國霞が浦邊に同じ。

えな 胞衣【名】胎児を包める膜及び胎盤などの總稱。兒の生るとき排出す。土中に埋め、又は焼く捨て。え。はうい。
えなあじい【英 Energy】【名】(理)えなるきいと同じ。

えなが 柄長【名】(理)柄の長さのこと。
【動】燕雀(カシ)類に屬する鳥。體きはめて小く、尾はその一倍以上も長くして、杓子の柄のやうに見ゆ。嘴小く、額より頭上にかけては純白、眼上より後方に黒色の部分あり。背部は黒と淡紫赤とを雜へ、腹部は淡紫赤色、顔のしにかけは白色、翼と尾とは黒くして、少しく白色部あり。禁止鳥の一。えびしやく。まつさがり。

えながたな 胞衣刀【名】胞衣を截るに用ふる竹刀。
えながひさご 柄長瓢【名】輕卷(カシ)を施し、椀金(カシ)を口に打ち、長き柄を附けたる柄杓。中は赤く、外は黒く塗り、古貴人、武將の道中の方、從者に携へしめて、夏など、途上にて渴を覺えし時、水を汲むに用ひしもの。えながひしやく。
えながひしやく 柄長柄杓【名】前條に同じ。

えながまがたな 柄長曲刀【名】造船工えなき 胞衣著【名】小供の、宮參の時に、産衣(カシ)の上に著る衣類。地質は白羽二重又は晒(カシ)にて、紅(カシ)の襟を掛く。
えなつ 榎津得名津【名】(地)攝津國にありし船つき。後世の東成(カシ)郡の内にて、今は新田となれり。萬葉すみのえの得名津に立ちて見渡せば武庫(カシ)の泊ゆ出づる船びと。

えなつば 胞衣蜜【名】えなをけ(胞衣桶)にえなまき【名】かま(吹)を云ふ。(肥前國島原の方言)
えなみじやう 榎並城【名】古、攝津國東成(カシ)郡榎並村にありし城。天文の頃すてこれあり、三好長慶に陥れる。
えなみていが 榎並貞峨【名】(人)きかいおん(紀海音)を見よ。

えなめる【英 Enamel】【名】金銀銅等の器具の上に施して、種種の模様を著色するに用ふる藥。半透明、硝子體の物質にして、溶解して用ふ。原料は種種の酸化物より成る。即ち白色エナメルは錫の酸化、青色エナメルはコバルトの酸化、綠色エナメルは銅の酸化、特に陶器に用ふる白色エナメルは、錫及び鉛の酸化物と珪石を含める砂と鹽及び曹達との混合より成る。珪瑯。
えなめるがは エナメル草【名】エナメルを施せる草。
えなめるからあ【英 Enamel colours】【名】色油に種種の染料を混じたる塗料。塗られた面は平滑にて光澤あり、裝飾に佳なり。
えなめるべえんと【英 Enamel-paint】【名】樹脂と顔料とより成る一種の乾燥性油。光澤あり、塗料に用ふ。光澤べえんと。
えならす 得ならず【包】え得の條下を見よ。

えな

えなめる



(だしにえ)

えなをけ 胞衣桶【名】中古の頃、禮式に胞衣を納れたる土中に埋むるに用ひし器物。高さ八寸、廣さ七寸位にして、胡粉(カシ)を塗り、松竹鶴龜等の畫を雲母(カシ)にて書けるもの。おしをけ。えなつば。
えなをさめ 胞衣納【名】其辰に吉方を選びて、盆に入れたる胞衣を土中に藏むる儀。産後五日もしくは七日に行ふ。
えに 縁【名】えん(縁)の轉。ゆかり。ちなみ。えに。えにち。(古語) 源氏夕露にひもとく花は玉鋒の便りに見えしえにこそありけれ。前世の果報。因果。因縁。(古語)
えに 得に【包】え得の條下を見よ。
えに し縁【名】しは助辭(えに縁)に同じ。(古語) 更紗(カシ)に上總介にてくだられしえにしあれば、かみつふさにゆく。
えにしだ 金雀枝【名】(植)莖(カシ)科に屬する常綠灌木。歐洲の中部及び南部の原産。高さ四、五尺。
えにし 莖は深綠色にして縱稜あり。
葉は小葉三箇より成る複葉にして、互生し、春の末、葉腋

に一二箇づつの黄色の蝶形花を開く。我が國にては觀賞用なれど、歐洲にては幹と枝とを枯して束ねて草蓆に造る。
えにす 槐【名】(植)えにす(槐)を見よ。
えにち 縁【名】えに(縁)の訛。狂言、發師平次「法の漆のえにちあれば再び閻浮(カシ)に歸るなり」
えぬ犬【名】(動)えぬ狗(カシ)を見よ。(カシ)を云ふ。(陸奥國の方言)
えぬ 江沼【名】(地)えぬま 江沼を見よ。(姓氏の一。皇別にして、姓(カシ)は臣(カシ)大和國に貫す。石川氏と同祖。加賀國江沼郡より出づ。
えぬのこ ぐさ 狗尾草【名】(植)えぬのぐさ(狗尾草)を見よ。
えぬま 江沼【名】(地)加賀國四郡の一。郡役所を大聖寺町に置く。上古は「えぬ」と呼び、越前國の一部たりき。
えなるきい【英 Energy】【名】(理)事をなし得る能力。これを測るには、その爲し得る仕事の量を以てす。運動のエネルギーと位置のエネルギーとの二種あり。又エネルギーは物質を離れて存在すること能はざれども、物質をエネルギーに變ぜしむること能はざるがゆゑに、宇宙は物質とエネルギーとの二元より成るものと解せらる。えなあじい。人(カシ)が事をなす元氣、精力。えなあじい。
えなるぎいの衰散【包】(理)英 Dissipation of Energy エネルギーの供給なければ、物體は仕事をなすこと能はざるものなれども、物體の仕事が悉く、費されたるエネルギーの全量が悉くその仕事となりてはあらはれず、その一部は傳導、摩擦等によりて失はる。この理を推して考ふれば、宇宙間に存するエネルギーの全量は一定なれども(えなるぎいの不滅参照)その利用しうべき量は漸次減少に向ひ、宇宙はつひには同温度となりて活動の休止する時あるべしといふこと。
えなるぎいの變衰【包】(理)前條にえなるぎいの變轉【包】(理)【英 Transformation of Energy】 エネルギーが種種に變轉して、その形を改むること。氣體を壓縮すれば、その仕事に費されたるエネルギーは、熱となりて氣體の温度のぼるが如き、電流の變じて、熱となり、光となり、器械的エネルギーとなるが如き、みな、これなり。
えなるぎいの不滅【包】(理)【英 Conservation of Energy】 萬物の有するエネルギーは、種種にその態を變ずれども、その宇宙間に於ける總量は、永久に一定して、不増不減なること。この法則は、獨人マイヤー(Mayer)及びヘルムホルツ(Helmholtz)等によりて大成せられたるものにて、物質不滅則及び進化論と共に、思想上に大影響を及ぼしたる學問上の発見なり。エネルギーの保存。
えなるぎいの保存【包】(理)前條に同じ。

運動のえなるぎい【包】(理)【英 Kinetic energy】 物體の運動する時に有するエネルギーは、質量と速度の自乗との積の二分の一を以て、その量をあらはし、又これを運動體のエネルギー(飛行する彈丸又は落下する石など)・振動體のエネルギー(音響など)・輻射のエネルギー(エニエー振動のエネルギー・電流のエネルギー・磁氣のエネルギー・化學的エネルギー等の數種に分つ。
位置のえなるぎい【包】(理)【英 Potential energy】 特別の狀態に置かれたる物體の有するエネルギー。例へば時計のぜんまいを捲けは秒・分・時針の運轉を起さしむるは、即ちぜんまいに貯へられたる位置のエネルギーが移轉して運動のエネルギーとなるものなる類。
えのあぶら 荏油【名】えごま(荏胡麻)を見よ。
えのうら 江浦【名】(地)駿河國駿東(カシ)郡江浦(カシ)村の大字。徳川幕府の時、鯛鹽(カシ)を設けしめし所。
えのうら いし 江浦石【名】(鐵)駿河國江ノ浦より産する石。
えのかす 荏滓【名】えごま(荏胡麻)を見よ。

えなめる

元の道

えのき 椶櫚木・朴樹〔名〕〔植〕 椶櫚科に屬する落葉喬木。暖地に自生し、高さ六七丈に達す。葉は楕圓に似て、枝の間に互生し、夏の初め帶緑色の小花開く。實は豆の大きさに赤黃色、熟すれば帶藍黑色となり、甘味あり、鳥類たしめ食す。材は器用具及び薪炭の料となる。え。

えのきぐさ 椶草〔名〕〔植〕 あみがさう(綱笠草)に同じ。

えのきさう 榎草【名】〔植〕前條に同じ。
えのきだけ 榎茸【名】〔植〕榎、柳などの幹
に寄生する菌。傘は黄褐色を帯び、食用と
なる。

えのこ瘰【名】腫物(も)又は傷などのな
めに、腋の附根(ツグ)・腋の下などの、疼痛を
感じて、腫るるもの。いぬこ。いのこ。

えのころま 荏胡麻【名】〔植〕えごま、荏胡
えのころ 狗兒【名】いぬこ(狗尾)の轉訛
狂言成上巻「えのころが、親犬になりあが
ります」

えのころこさ 狗尾草【名】〔植〕えのころこさ
さ(狗尾草)を見よ。 「尾投」を見よ。
えのころこなげ 狗兒投【名】えのころこなげ(狗
えのころこ)やなぎ 狗兒柳【名】〔植〕えのと
な(狗兒柳)を見よ。

えーのじま江島【名】〔地〕相模國鎌倉郡
えーのじま江島【名】〔地〕相模國鎌倉郡

の内海にある島。周國十七町。風景最もよく、辯財天の祠あり。菰野草「えのしまやき」して鹽路に跡たるる神は誓の深きなるべし」**三**謡曲の一。相摸國江、島の成りし由來を、江、島縁起によりて作りしもの。

えのしまに江島煮〔名〕『相摸國江の島に
ては、多くこの煮かたをなすよりいふ』き
しほに(潮煮)に同じ。
えのしまみやげ江島土産〔名〕〔書〕十返
舎一九の作れる滑稽紀行。小形袋入本に

て五冊。初篇は文政六年の出版。
えの「たけ可愛嶽【名】〔地〕日向國東

天のは

柱ハシ郡北川村にある山。山形頗る雄偉。
西南役に、官軍此に敗る。えのやまのみささぎ
(可愛山陵)參照。
えのは 榎葉【名】(動)鱒マスに似て小な

る魚。山川に産す。えのはうを。
えのはうを 榎葉魚〔名〕（動）前條に同じ。
えのはう 榎葉井〔名〕古、大和國葛城（カキ
寺と豊浦分）寺との間にありし井。 催馬樂
〔葛城〕えのはうに、白玉しづくや、ましら

玉しづくや、おしとんど、おしとんど」
えのび「名」〔植〕いぬびは〔犬枇杷〕を云ふ。
〔東國の方言〕 「ふ。〔東國の方言〕
えのびは「名」〔植〕いぬびは〔犬枇杷〕を云

萬葉「わが門のえのみもりはむ百千鳥」(門モチ、千鳥はくれど君ぞ來まきぬ)
榎の實は成らば成れ、樹は棕の樹
【包】榎と棕とは、よく似たる木なる意

よく似たる物事の譬。滴水物筍かやうに申しても、げにもと思ひたまはぬは榎の實はならばなれ、樹は棕の樹といひたるにおなじ」

えののみや 埃宮【名】神武天皇の東征の途
中滞在せられし行宮。安藝國安藝郡に
あり。

えのもとに 榎本「名」姓の「人」倂人
 姓(カバ)は連(ムラ)。道臣(むち)命の十世の孫
 佐豆彦(サヅヒコ)の裔にて、山城國乙訓(オトノリ)郡榎
 本郷の名を貰へるものなるべしといふ。
 えのもとに 榎本其角「名」倂人

近江國堅田の人。蕉門
十哲の首たり。江
戸に來り、風
雪、破笠と共
に日本橋區堀

江町に寓す。
洒落の俳風を
唱へて天下を風靡
す。寶永四年歿す。年四
十七。又、賣井其角ともいふ。

えのもと たけあき 榎本武揚【名】〔人〕



次のとおりである。

舊幕臣。通稱釜次郎。梁川と號す。和蘭に留學すること六年。歸朝後、海軍奉行に累進す。幕府の大政を奉還するや、國館五稜廓に據りて官兵に抗せしが、遂に降を請ふ。進所安、幕臣主判寺命全置へ、使、海軍卿

選信大臣・外務大臣に歴任し、明治四十二年薨す。年七十三。

(ハカサ) 村大字宮内(カサ)なる新田(カサ)八幡
 山にありといふ。この山の別稱は、龜山
 (カサ)中山(カサ)可愛嶽(カサ)。一説には日向
 國東臼杵(カサギ)郡の可愛嶽なりともいふ。
 えーのやまひ 疫病【名】やくひやう(疫病)に

同じ。(古語)
えのおべ 榎井部【名】姓氏の一。神別にして、姓(カヅ)は連(ミツ)又は朝臣(アソノ)。和泉國に貫したり。饒速日(ニギハヤヒ)命の四世の孫大友(オホトモ)大臣(オホナカミ)命の後裔。

えの^ををつぬ役小角【名】「人」えんのせうが
く(役小角)に同じ。
えは【名】(動)『韃靼の語なりといふ』うし
(牛)に同じ。

惠(恵)を受ける意をも含めたる俗用の文
字にて、その字音は多なれば、元の音に充て
たるは、實は正しからず。又、元(恵比須)參
照。又、兄方と書くは、元(干支)が兄(こ)

弟(は)の意なるに出づ』その歳の干支に基
づきて定むる、吉祥なる方位。もと支那よ
り來りし俗説にして、この方角に向ひて事
を爲せば成功すといふ。あきのかた。

二報)を見よ。
えはうだな 吉方棚【名】その歳の歳徳神
(ケシツ)を祭れる神棚。
えはうまゐり 吉方参【名】その歳の吉方

に方れる神社に参詣して、年中の福徳を祝ふこと。

えはしと【名】あそびめ。女郎。遊女。

えはち 衣鉢【名】僧侶が身に著くる三衣(エシ)と施を受けるに用ふる鐵鉢と。この

二者は僧の資物の最も重大なるもの。そ

人 之 天 性

はつ。『達磨が支那の慧可(か)に傳はつた證としてこの二物を授けしよりいふとぞ』禪僧がその師より傳へらるる佛教の奥義。いはつ。『宗教藝術などの、師父より傳へらるる奥義。いはつ。』衣鉢を傳

「に同じ。」
 えはち―かく衣鉢闇【名】いほかく(衣鉢闇)
 えはつ衣鉢【名】えはち(衣鉢)【口】に同じ。
 えばやし江林【名】入江のほとりの林。

えばら 荏原【名】〔地〕武蔵國二十郡の一。
えはり 威張【名】えはること。(俚語)
えばる 威張る【動四自】いばるの轉。(俚語)
えん譚【名】〔動〕板垣(かき)類に屬する

魚。形圓く扁く、大なるは方六尺に達し、周邊に鱗ありて鱗なく、眼大きく、尾は細長くして尖り、もとに刺ありて人を刺す。あかえひしびれえひなど、種類甚だ多し。

えび 蝦・蝦：海老【名】(動) 胸甲類に属する節足動物。全身、節ある甲殻にて蔽はれ、鼻尖り、二本の鬚長く、八足にてよく飛

び躍る。淡水に産するあり海に産するあり、種類多し。**三**(動)(特に)させえび伊勢鰻に同じ。**四**物の形の中ごろの部分にて屈曲せるもの。**五**鼈の一種。鰻の腰のまがりたる如くに結ぶもの。(伊勢國の

方言】**〔五〕**えびぢやう(蝦錠)**〔六〕**の略。
 蝦食うた報**〔句〕**「猪(シ)食うた報」に同
 じ。(諺語)
 蝦で鯛を釣る**〔句〕**『えびは、いひほ(飯粒)
 の批。土佐日記に「ある人、聊かなる物、

持(モ)てきたり。米(和)して、かへりごとす。男ども、ひそかにいふなり。いひほしても釣るとや」とあり』わづかなる資本又は勞力にて、大なる利益を收むる

蝦の鯛交(シビマ)【旬】「雑魚(ササ)」の魚交(シビマ)に同じ。〔諺語〕
蝦の船盛(モリ)【旬】鯛の鱠(ササ)を土器(カマ)に高盛にして、その上に小き蝦を載

せたる料理。

蝦の味噌【包】蝦の肝臓。
蝦のやう【包】寒さのために手足の赤
くなりて縮まれる形容。参見小き子の、
深き雪を分けて、足手は蝦のやうにて
走り来る。

えび 海老【名】(地)三河國南設樂(今新)郡
にある町。鳳來寺(伊勢)山の西、瀧川に沿
へる山腰。

えび【名】(植)えびつる(莖莖)に同じ。(古
語)【(植)えびかつら(葡萄)】に同じ。
【古語】起蒲陶エビ】目然したるえび
かつらの實の色に似たる染色、即ち黒みが
かりたる紫色の淡きもの。えびいろ。(葡
萄)【(古)えびぞめ(葡萄)】に同じ。(葡萄)

えび 衣被・葉皮・蓑衣香【名】中古用ひし
一種の香。梅檀(今)の樹の葉と皮とを、
細末にせるものといふ。えびかう。(古語)
源氏えびの香、なつかしくかゝりて。

えび 帯【名】おび帯の轉。(東國の古の方
言)萬葉わがせなを筑紫はやりてうつし
みえびは解かなあやにかねむ。

えびあがり 海老上【名】器械體操にて、兩
手にて鐵棒を握りつつ、腰部を屈折して、
足を棒に近づけ、臀部を上とると同時に、
足にて空を蹴、その勢にて體を棒の上
に揚げて、臂を立つるもの。

えびいし 蝦石【名】伊勢蝦の化石。(日向
國の方言)【(蘇美)に同じ。

えびいばら 蝦茨【名】(植)さるさるいばら
のとき色、即ち赤はる紺色。

えびいろ 蝦色【名】伊勢蝦の生なるとき
のことき色、即ち赤はる紺色。

えびいろう 葡萄色【名】えび【に同じ。
えびかう 衣被香【名】えび(衣被)に同じ。
(古語)源氏えびかうの香(あ)。

えびかすがひ 蝦銚【名】背部の蒲鉾(か)
形なる銚。

えびかつら 葡萄葛【名】(植)『この類の
草には、蔓に蝦の鬚の如きものあれば、こ
の名あるにや』(やまぶた(山葡萄)に同
じ。(古語)和名紫葛、衣比加豆其(葡萄、
衣比加豆其乃美)【(古語)えびつる(莖莖)に同
じ。(古語)

えびかつら 葡萄蔓【名】かもじ(莖)に同
じ。一説、美男葛(が)の類にて髪をつくら
ふものなるべし。(古語)源氏えびかつ
らしてぞ、つくるひたまふべき。

えびかつら いちぢ 葡萄蔓【名】(植)う
らるるいちぢ(真白梅)に同じ。

えびがに 蝦蟹【名】(動)さりがに(鰯)に
同じ。

えびかね【名】(動)いせえび(伊勢蝦)を云ふ。
(薩摩國の方言)

えびから いちぢ 蝦蟹【名】(植)うらる
る(真白梅)に同じ。

えびがら ぐそく 蝦蟹具足・海老殼具足
【名】手輕く(緩)の附けたる具足。身分
低き者これを著用す。落馬、小十人方
の御借具足と申すは、世俗にえびがら具足と
申し習はしおきて、手輕くおとしたる
にて候へば。

えびがら すすめ 蝦蟹雀【名】(動)鱗翅
【に同じ。類に屬する昆蟲。腹部に赤き輪紋あ
りて、口吻長く、腹に赤き輪紋ありて、
口吻長く、腹に赤き輪紋ありて、

えびぐさ 蝦草【名】(植)【えびぐさを
(伊吹虎尾)に同じ。【えびぐさを(蝦
蟹)に同じ。【えびぐさを(蝦蟹)に同じ。

えびぐさ やち 蝦虹梁【名】(建)本柱
(えび)と向拜柱(えび)との間の聯結に用ひ
らるる、蝦狀に彎曲せる梁。もと禪寺の建
築に起原す。

えびこさん 英彦山【名】(地)豊前國田川
郡にある山。國中第一たり。高さ三六五七
尺。山麓は、豊後・筑前にも亘り、山中に十
谷四十九窟あり。單に彦山とも稱す。

えびこさん じや 英彦山神社【名】豊
前國田川郡彦山村に鎮坐せる官幣中社。祭
神は天忍穗耳(忍)命。維新前の神佛混淆
時代には、修驗道天台宗本山派の別本山な
りき。

えびこし 蝦腰【名】老人などの、蝦の如く
えびこしほろき 蝦蟇【名】(動)おかまこほ
ろき(御竜蟠)に同じ。

えびこし 蝦蟇【名】(動)おかまこほ
ろき(御竜蟠)に同じ。

えびこし 蝦蟇【名】(動)おかまこほ
ろき(御竜蟠)に同じ。

えびこし 蝦蟇【名】(動)おかまこほ
ろき(御竜蟠)に同じ。

えびこし 蝦蟇【名】(動)おかまこほ
ろき(御竜蟠)に同じ。

えびこし 蝦蟇【名】(動)おかまこほ
ろき(御竜蟠)に同じ。

えびこし 蝦蟇【名】(動)おかまこほ
ろき(御竜蟠)に同じ。

えびこし 蝦蟇【名】(動)おかまこほ
ろき(御竜蟠)に同じ。

えびこし 蝦蟇【名】(動)おかまこほ
ろき(御竜蟠)に同じ。

えびこし 蝦蟇【名】(動)おかまこほ
ろき(御竜蟠)に同じ。

えびこし 蝦蟇【名】(動)おかまこほ
ろき(御竜蟠)に同じ。

えびさくもち 蝦作餅【名】江戸時代に、江
戸の京橋南銅町に住せし蝦屋作兵衛の製
して賣りし餅(おもち)。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

てたるは、實は正しからず。えはう(吉方)參
照)商家などにて、七福神の一として祭る
神。狩衣(狩)指貫(狩)に、風折烏帽子(狩)
を著け、釣竿を持ちて、鯛を釣上げた
像に造る。一説に、蛭子神(蛭)の別稱な
りといひ、攝津國西の宮神社の祭神とす。
えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

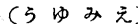
えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

えびさく 蝦蟇魚【名】小き蝦の中に、小
き魚のまじりてあるもの。えびじやこ。

天む



濡(ヌ)縁・廣縁(ヒロ)・長縁(ナガ)・落縁(オチ)・簀子(コ)などの種類あり。えんがは。(往往誤

の席。宴席。

えんいた 縁板 **【名】** 縁側の板。

より範圍小なる事物に移るもの。例へば事物の通性よりして、個個の事物の然るべきを論證する類。寅ニ釋ニ進ニ聖ニ。寅ニ釋ニ。歸ニ内ニ去ニ。

えんがんせうかうかい 沿海小航海【名】短距離の沿海を航海すること。

えんがんせん 沿岸線【名】(地) かいがんせん(海岸線)に同じ。

えんがんつうじやうにん 沿岸通商人【名】沿岸商業に従事せる人。

えんがんばうえき 沿岸貿易【名】『英Coasting trade』同一国内の諸港の間に行はる貿易。本國と植民地との間に行はるものもその一種とす。内國人の特權とするを通例とし、その國の主權の下に服従すべきものとす。沿海貿易。沿海商業。沿岸商業。海外貿易に對して。

えんがんばうえき 沿岸貿易港【名】沿岸貿易を行ふ港。外國の商船の入港を許さざるものとす。沿海貿易港。

えんがんりう 沿岸流【名】潮水の、海岸に沿ひて流るもの。多くは潮流に伴ひて生ずるものにして、海岸土砂の漂流を促し、或は棧橋などの構造物の根元を洗ひ去りて損害を與ふ。

えんがる 艶がる。藍がる【動四自】えんなる風をなす。「古語」源氏何事も、ものごのめしえんがりおはする御子にていとみじうめできこえたまふ。

えんき 延企【名】金は、跋に同じく、爪立(つづ)意。首を延べ足をつまでて、遠方をながむること。「高丘に登りて延企す」。

えんき 延期【名】定まれる期限を延ばすこと。ひのへ。

えんき 鹽基【名】(化)『英Bases 鹽』を生ずる基の義。酸(と)と化合して、鹽(と)を生じうべき化合物。金屬元素の酸化物と水との複合化合物と見做すべきもの。例へば水酸化亜鉛水酸化第二鐵水酸化ナトリウム苛性ソーダ苛性加里などの類。水に可溶性の鹽基は水溶液に於てアルカリ性反應を呈し、石鹼様滑性あり。酸基の分子式中に存する水酸基の數を以て鹽基の酸度といひ、その數によりて一酸鹽基二酸鹽基三酸鹽基と名く。

えんき 捐棄【名】すつること。

えんき 愆期【名】時期をあやまること。

えんがん

えんき 厭忌【名】いとひいむこと。きらふこと。嫌忌。

えんき 演技【名】多人數の中にて、種種の遊技、即ち芝居、輕業などを行ふこと。

えんき 延喜【名】醍醐天皇の御代の年號(紀元一五六年—一五八二年)。

延喜天皇の治【名】醍醐村上兩帝の御代は、王朝時代の中、治績もつとも著しかりしより、その御代の年號につきていふ稱。

延喜の聖代【名】醍醐天皇の御代をたて、民の寒飢をおぼしやうりたまへることなどあり。

えんき 演義【名】書籍などの意義を敷演(えん)して説くこと。『演義』三國史などの類。

えんき 演義【名】えんげき演劇に同じ。

えんき 緣起【名】(佛)の因緣生起の略。因と緣とによりて、萬法の因緣生起のこと。

事物の起源沿革【名】神社・佛閣の草創の由來、又はその靈驗などの傳説、又これを書きたるもの。四きさし。しるし。前兆。ざえん。緣喜「緣起よし」。

なほ(緣起直)の略。えんきじやう緣起の略。

緣起の金【名】(佛)神棚などに供ふる玩具の金銀。土などにて造る。

緣起を祝ふ【名】その事の圓滿に成功せんことを祝ふ(俚語)。

えんき 緣儀【名】大法會の時の緣行道(えんぎ)の儀式。えんぎやうだう(緣行道)参照。

えんき 延久【名】後三條天皇の御代の年號(紀元一七二九年—一七三三年)。

延久の宣旨柄【名】(包)後三條天皇の延久四年に、斗量法は一條天皇長保の例に據るべき旨仰出されしもの。天皇みづから御簾の竹を折りて、斗量の寸法をさし、殿前の砂を量りて、斗量の定めたまへり。京柄の八合一勺一撮六抄餘に當る。

えんき 淹久【名】久しくとどまること。

えんき

えんき 延休堂【名】八省院十二堂の一。大極殿の西方、北より第一の堂。長さ七間。

えんき 延喜格【名】(書)次條を見えんきやうしき延喜格式【名】(書)三代格式の一。弘仁格式と貞觀格式との後を承けて、貞觀十一年より延喜七年までの格と式とを、左大臣藤原時平等に勅して集めしめられたるもの。即ち延喜格と延喜式との總稱。格十五卷、式五十卷。延喜式の第八卷には祝詞(の)を輯録せり。

えんき 鹽基酸【名】(化)さん(酸)に同じ。

えんき さんじんし 演義三國志【名】(書)支那元の代に出たる歴史小説。羅貫仲(ろくわんちゆう)の作なりといふ。小説の水滸傳(すいぽでん)戯曲の西廂記(せいしやうき)琵琶記と共に四大奇書と稱せらる。

えんき 延喜式【名】(書)えんきやうしき延喜格式を見よ。

「あら見られずの延喜式や、あら氣づかりきこと(を)いふ者」は、延喜式といへり。

えんき 鹽基式鹽【名】(化)『英Bases 鹽』鹽基中に水酸基の一部分をなほ保有する鹽類。即ち多酸鹽基を一部分中和して得る化合物。例へば鹽基性硝酸鹽などの類。鹽基性鹽。えんき(鹽基度)参照。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 緣起狀【名】(書)社寺の緣起を記せる文書。緣起。えんきぶみ。

えんき 延期證【名】約束の期限を延ばすための證書。

えんき えんき 鹽基性鹽【名】(化)えんき(えんき)鹽基式鹽(と)に同じ。

えんき さんじんし 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき 延喜式神帳【名】(書)延喜式五十卷のうちの始めの十卷なる神祇式を別冊とせるもの。

えんき

えんきと 鹽基度 [名] (化) 酸一分子中にありて、金屬元素に置換し得べき水素原子の數。その數の一なるものは一鹽基酸、二以上なるものは多鹽基酸といふ。水素原子の多少によりて、これを中和するに要する鹽基の量を異にす。えんきせいえん鹽基性鹽參照。

えんきなほし 緣起直 [名] えんきのわるき物事を拂ひて、よきやうに祝ひ直すこと。えんぎ(俚語)。

えんぎのみかど 延喜帝 [名] (人) だいてん(醍醐天皇)に同じ。〔狀〕に同じ。

えんぎふみ 緣起文 [名] えんぎやう 緣起えんぎもの 緣起物 [名] 新年の吉方をまゐり、その他、神佛への參詣人をあてこみて賣る玩具、裝飾品、土産物又は迷信に關する品物。

えんきやう 延享 [名] 櫻町天皇の御代の年號紀元二四〇四年(一四〇七年)に同じ。

えんぎやう 偃仰 [名] ふきやう(俯仰)に同じ。えんぎやうだう 緣行道 [名] (佛)念佛讀經して、家又は堂の緣を繞るの修行。緣を歩みながら行ふ行道。盛衰脱履を脱ぎ、素絹の衣に、長念珠うしる手に繞りて、緣行道して。

えんきよ 燕居・宴居 [名] 『燕も宴も同字にて、安んずる意』安息して家に在ること。閑暇無事にてあること。安居。

えんきよ 燕許 [名] (人) 『張は燕國公に封ぜられ、蘇は許國公に封ぜられしゆゑにいふ』張説と蘇説との二人。共に唐の文章家。

燕許の大手筆 [句] 秀でたる文章の譬。前條參照。

えんきよ 鹽魚 [名] 鹽漬にしたる魚。しほえんきよく 宴曲・延曲 [名] 鎌倉時代に流行はれし一種の謠物(謠)。朗詠を延べて、今様歌を交へたるがごときもの。曲節は傳はらず、又、文學としても價値乏しけれど謠曲の基となりたる點尠か。宴曲をえんきよくせう 宴曲鈔 [名] (書) 宴曲を分類して載せたるもの。撰者不詳。

えんきり 緣切 [名] 親子兄弟・夫婦親族

えんき

などの關係を斷切ること。

えんきりえのき 緣切樹槲 [名] その樹にまじなひをすれば、夫婦の縁を切らんとする望のかなふといふ榎の樹。武藏國北豐島(豊島)郡板橋驛の町筋の真中にありき。

えんきりてら 緣切寺 [名] さうけい(東慶寺)の俗稱。

えんぎちん 緣起論 [名] (佛) 一切萬有の起因を説く學說。例へば業力(業)の所感に歸する業感緣起、阿賴耶(阿頼耶)識に歸する阿賴耶緣起、眞如に歸する眞如緣起の類。

えんぎちん 緣起繪 [名] 寺社の由來、靈驗などを畫ける繪。

えんぎ 厭求 [名] (佛) 苦を厭ひ、樂を求めんむすび。〔法〕やうえんぎみ(養子縁組)に同じ。

えんぎみじけん 緣組事件 [名] やうえんぎみじけん(養子縁組事件)に同じ。

えんきん 煙蕪煙燻 [名] 魚類を蕪製すること。煙の熱に由りて水分を除き、且つ煙の中に含むクロオソノト等のために細菌を殺すを以て、貯藏に適す。

えんくわ 燕窩 [名] えん(燕巢)に同じ。えんくわ 緣花 [名] (植)舌狀花と筒狀花とより成る頭狀花序の外圍を成せる花。(心花に對して)。

えんくわ 煙火・煙火 [名] 民の遊(遊)の火。軍中に擧ぐるのろし。烽火。〔俗〕な(花火)に同じ。

煙火の中の人 [句] 「火食する人の義」一般の人間(仙人に對して)。

煙火の食 [句] 火力を用ひて燒き又は煮たる食。火食。『れる花』。

えんくわ 煙花・煙花 [名] 霞の中にこもる鉛華 [名] 『鉛より製する華の義。ゆのはな湯花參照』おしろい(白粉)に同じ。

えんくわ 偃臥 [名] 腹を下にして臥すこと。えんくわあえん 鹽化亞鉛 [名] (化) 亞鉛又は鹽化亞鉛を鹽酸に溶して得る、白色なる潮解性の物體。脫水劑防腐劑外科醫藥

えんくわ

などに用ひらる。

えんくわあにりん 鹽化亞尼林 [名] (化) えんきあにりん(鹽化亞尼林)の俗稱。

えんくわあにもにらむ 鹽化安母紐誤 [名] (化) アンモニヤと鹽化水素との等容積を混じて製したる、白色半透明にして鹽狀の結晶をなせる物質。水に溶解して熱する時は多少解離して昇華(昇華)す。電池(電池)づけ等に用ひらる。礬砂(礬砂)。

えんくわい 宴會・議會・議會 [名] 知人朋友など相聚りて、酒を飲み歌舞などをすること。さかもり。酒宴。宴飲。

えんくわえちる 鹽化エチル [名] (化) アルコールと鹽化水素との化合して生ずる無色の液。野火すれば燃え、その桶の縁は綠色をなす。

えんくわかざみらむ 鹽化カドミウム [名] (化) 二分子の結晶水を含み、無色にして柱狀の結晶をなせる物質。空氣中に風化し、水に溶け易し。〔同〕。

えんくわかり 鹽化加里 [名] (化) 次條に同じ。

えんくわかりちむ 鹽化加爾漫誤 [名] (化) 加里石鹽として、海水中又は岩鹽の層中に天然に産する無色・食鹽狀の結晶物。又、海藻より沃素を取るとき、副産せられ、鹽酸加里・炭酸加里・硝石等の如きカリウム化合物の製造の原料とし、又、肥料として用ひらる。水に溶けやすし。鹽化ボタシウム。鹽化加里。

えんくわかるしむ 鹽化加爾漫誤 [名] (化) 水に溶けやすし。無色のカルシウム鹽。種種の化學製造の副産物として得らる。濕氣を含める氣體を乾燥せしむる効あり。又、その六水鹽と水との混合物は、有効なる寒劑となる。

えんくわきん 鹽化金 [名] (化) 金に鹽素を作用して得る物質。鹽化第一金と鹽化第二金との二種あり。後者の方、普通にして褐赤色・潮解性の鹽(鹽)なり。〔同〕。

えんくわきん 鹽化銀 [名] (化) 銀鹽の溶液と鹽化物との混和によりて生ずる白色凝乳狀の物質。日光にあつれば、分解して

えんくわ

紫黑色に變じ、水および酸に溶解せざれども、次亞硫酸曹達液又はアンモニヤに溶解す。天然にも角銀鹽となりて産す。寫眞用に供せらる。〔化〕次條に同じ。

えんくわくろみらむ 鹽化格魯魯誤 [名] (化) えんくわくろみらむ 鹽化格魯魯誤 [名] (化) 酸クロムと木炭とを鹽素瓦斯中にて強く熱し、昇華(昇華)して得る莖(莖)色の光澤ある葉狀粉、又は濕法によりて製する結晶體。溶液は暗綠色。絹木綿の媒染(媒染)劑に用ひらる。鹽化クロミウム。〔同〕。

えんくわさい 燕窩菜 [名] えん(燕巢)に同じ。

えんくわすず 鹽化錫 [名] (化) 錫の鹽化物。鹽化第一錫と鹽化第二錫との二種あり。各、その條を見よ。

えんくわするきん 鹽化水銀 [名] (化) 鹽素と水銀との化合物。鹽化第二水銀と鹽化第一水銀との二種あり。各、その條を見よ。

えんくわすそ 鹽化水素 [名] (化) 無色にして、空氣よりもやや重き氣體。鹽素と水素との等容積の化合によりて生ず。但し便法は、食鹽と濃硫酸との混合物を熱すること。刺激性の臭氣あり、燃焼することなく、又、他物燃焼を助くることなし。その水に溶解したるものは鹽酸なり。俗稱鹽酸瓦斯。鹽化水素酸。

えんくわするきん 鹽化水素酸 [名] (化) 前條に同じ。

えんくわせきくわい 鹽化石灰 [名] (化) 消石灰に鹽素を通じて製する白粉、即ち漂白粉(漂白粉)。

えんくわせらむ 鹽化曹魯誤 [名] (化) えんくわせらむ 鹽化曹魯誤 [名] (化) えんくわたいいちす 鹽化第一錫 [名] (化) 鹽化錫の一。錫を濃鹽酸に溶して製する白色針狀の結晶體。普通には銀鹽と稱し、還元劑拔色劑媒染(媒染)劑等に用ひらる。

えんくわたいいちす 鹽化第一水銀 [名] (化) 鹽化水銀の一。白色粉末狀の不溶性の固體。下劑利尿(利尿)劑等として内服す。又、工業上には、鹽化第二水銀を水銀及び鹽と共に昇華せしめて製す。普通

えんくわだいにす 鹽化第二錫【名】
には、甘汞(カドミヤト)又は輕粉(カドミヤト)と稱す。

えんくわだいにす 鹽化第一錫【名】
【化】鹽化錫の一。鹽化第一錫を鹽化加里の
ことき酸化物にて酸化して錫を物質市上
販賣の品は、白色の結晶體又は無色乃至黄
色の液體をなし、媒染(カドミヤト)劑に供せらる。

えんくわだいにす 鹽化第二水銀【名】
【化】鹽化水銀の一。硫酸第二水銀
と食鹽との混合物を昇華して得る無色半
透明針狀の結晶體。水にやや溶けやすく、
劇毒あり。猛毒(カドミヤト)又は昇汞(カドミヤト)ともい
ひ、殺菌の功があるが故に、防腐劑・消毒劑な
どに用ひらる。

えんくわだいにす 鹽化那篤留膜【名】
【化】じよえん(食鹽)に同じ。

えんくわだいにす 鹽化法【名】 濕式收金法の
一。鹽素を以て鑛石中の金分を溶解し、そ
の溶液中の金を沈澱せしめて收取す。

えんくわだいにす 鹽化物【名】 【化】 鹽素と
他の元素又は之に代るべき原子團との化
合物。

えんくわだいにす 鹽化利篤留膜【名】
【化】 えんくわ(カドミヤト)に同じ。

えんくわだいにす 鹽化麻痺留膜【名】
【化】 苦味を有する一種の結晶體。海
水中に含まれ、食鹽の苦味と潮解性とを有
するは、主にこの物を含むによる。即ち滲
汁(カドミヤト)の主成分。熱すれば多少分解して
酸化物となる。食鹽を燒きて燒鹽となせ
ば、潮解性を失ふは、これがためなり。

えんくわだいにす 鹽化滿掩【名】 【化】 酸
化マンガンを鹽酸に作用せしめて得る、肉
色の結晶體。水及びアルコールに溶解し、
潮解性あり。謂はる滿掩褐色を染むる染
料として用ひらる。

えんくわだいにす 捐館【名】 『館舎を捐つ』を見
よ。諸侯などの死去。下學塾捐館、エンク
ワン。新聞救済也。人死去、拾三生館室に

えんくわだいにす 鉛管【名】 鉛にて造りたる管。
ガス又は水道の水などを通するに用ふ。

えんくわだいにす 閥官【名】 えんいん(閥尹)に
同じ。

えんくわだいにす 煙管煙管【名】 〇きせる(煙
管)に同じ。〇媒煙を通はするための管。

えんくわだいにす 煙管煙管【名】 美しき毛髪。
えんくわだいにす 緣化【名】 (佛) 緣は、緣ある者に
對して行ふ意。えんくわ(動化)に同じ。

えんくわだいにす 嚙下【名】 えんか(嚙下)に同じ。
えんくわだいにす 艶氣・艶氣【名】 あだめきたるさ
ま。『古語』 漢氏「今やうの若人たちのやう
に、えんげにももてなさる」

えんくわだいにす 煙景・煙景【名】 霞のかかり
たる風景。春の景色。『京都五山の僧
が「五湖煙景有誰爭」とある詩句より思ひ
つきの隠語』 錢五百年文の稱。

えんくわだいにす 燕京【名】 (地) 『もと周の代の
燕國の首邑たりし地なるよりいふ。但し當
時は薊(キョウ)と呼びたり』 べきん(北京)に同じ。

えんくわだいにす 延慶【名】 花園天皇の御代の年
號(紀元一九六八年—一九七〇年)。

えんくわだいにす 演藝【名】 落語・講談・演劇などの
如き、公衆の前にて行はるる遊藝。

えんくわだいにす 演藝館【名】 演藝を行ふ
ために設けられたる建物。

えんくわだいにす 演劇【名】 しばる。きやうげん。
わざを。演戲。

えんくわだいにす 掩撃【名】 (兵) 敵の不備に乗じ
ておほひ撃つこと。掩襲。

えんくわだいにす 演劇場【名】 劇を演ずる
ために設けたる建物。芝居小屋。しばる。
劇場。

えんくわだいにす 緣桁【名】 縁側のふち。えん。重
帷子身を縁けたにうちつけて。『月。
えんげつ 簪月・檐月【名】 軒端にかかれる
えんげつ 煙月【名】 水蒸氣の立草
(カドミヤト)たる月。
えんげつ 偃月【名】 〇〇(偃)したる月の
意。半月に達せぬ細き月。『偃月の形に
陣立をすること。』 〇(南宗) 畫にて、竹
の葉を、偃したる月のごとき形にあがくこ
と。『額の骨の形の一。貴女の骨相とす。
「日角偃月」
えんげつ たう 偃月刀【名】 古、支那にて
用ひし、我が國の薙刀(カドミヤト)に似たる武器。

えんくわだいにす 偃月紋【名】 人相の一。額
に三條の紋の偃上してあらはれたるもの。
貴相とす。

えんくわだいにす 鹽業【名】 鹽を製造する業。
えんくわだいにす 鹽業調査所【名】 農
商務省に屬し、鹽業の改良と調査・試験と
の事を掌りし役所。明治三十二年設置せ
られ、同三十六年鹽業の專賣制度に變ずる
と同時に廢せられたり。

えんくわだいにす 露膚【名】 そばだてる肩。あが
りがた。いかりがた。

えんくわだいにす 延見【名】 面會をもとむる人を
延(カドミヤト)入れて對面すること。引見。
えんくわだいにす 偃蹇【名】 〇おごりたかぶるさ
ま。のさばるさま。『〇若石建物などの高
まれるさま。』 〇舞ふさま。

えんくわだいにす 延言・延言【名】 あだめきたる言
葉。なまめきたることば。

えんくわだいにす 延言【名】 音を引延べたる言語。
延言のことは。『いはくは「いふ」の延言。
「まをさく」は「まをす」の延言の類。(約言
に對して)』

えんくわだいにす 延元【名】 後醍醐天皇の御代の年
號(紀元一九九六年—一九九九年)。

えんくわだいにす 延元【名】 足利尊氏、鎌倉に據り
て反し、新田義貞の兵を箱根竹下、に破
りて西上し、京都を占領せしを、延元元
年正月、官軍これを復し、尊氏直義(カドミヤト)
は、一旦九州に走りしが、三月に至り、再
び兵を整へて東上せしより、新田義貞、
楠木正成これを兵庫に拒ぎ、正成は戦死
し、義貞は京都に還り、後醍醐天皇叡山
に遷れたまひ、八月尊氏、光明院を立て
て主とするに至りし事蹟。

えんくわだいにす 延元【名】 〇〇(延)すること。やあ
えん。『東京の幼兒の語』

えんくわだいにす 緣故【名】 ゆかり。ちなみ。つづき
あり。關係。

えんくわだいにす 緣故・緣引【名】 〇〇(緣) 人は、まづ已に緣
故ある者を引立つること。『談話』
えんくわだいにす 鹽戸【名】 漁夫の住む家。あまのす
みか。漁莊。

えんくわだいにす 燕娛・燕娛・宴娛【名】 酒もりして

えんくわだいにす 掩護【名】 〇おひかぶりてまも
ること。『兵。味方の作業又はある目的
物を保護せしむるために、ある部隊をして
敵に當らしむること。』

えんくわだいにす 燕語【名】 〇〇(燕) つばめの聲。
えんくわだいにす 緣語【名】 (文) 歌文の中に、互に意
味上の關係ある語を選び用ひて修飾する
こと。例へば、太平記の後醍醐天皇の歌に
「さしてゆへ笠置の山を出てしよりあめ
が下にはかくれがもなし」とあるは「かさ」
(笠・傘)といふ語の緣にて、「あめ(天)に
「雨」の意を含め、「さす」即ち目指すに傘を
さし、かざす意を含め、又「かくる(隠る)」と
もいへる類。

えんくわだいにす 河童【名】 〇〇(河童)を云ふ。『周防
國・石見國の方言』

えんくわだいにす 延刻【名】 時刻の延ぶること。
えんくわだいにす 延胡索【名】 (植) 罂粟(カドミヤト)科
に屬する多年生の草。地下に塊莖あり、地
上莖は直立又は平臥して、長さ七八寸に達
し、葉は二回三出複葉、花は總狀花序にて、
五月頃開き、その色、白紫・紫黄などあり。
我が國北部地方の山地に自生す。

えんくわだいにす 掩護隊【名】 (兵) えんくわだいにす
〔掩護部隊〕に同じ。

えんくわだいにす 緣故拂【名】 (法) 緣故ある
關係を認め、先順位として賣拂ふこと。例
へば不要存置國有林野を、緣故者に賣拂
ふ類。

えんくわだいにす 掩護部隊【名】 (兵) 味方の
作業又は或目的を保護する任務の部隊。
掩護隊。

えんくわだいにす 厭欣【名】 (佛) 厭離穢土(カドミヤト)
と欣求淨土(カドミヤト)と。

えんくわだいにす 煙蓑・煙蓑【名】 煙雨の中に立て
る人の著けたる蓑。

えんくわだいにす 宴座【名】 〇〇(古) 朝廷の節會(カドミヤト)
又は臣下の大饗などの時の獻酬の座席。威
儀正しく進退・獻酬に細かき次第あり。え
んのぞ。をん(宴)・をん(宴)をん(宴)・をん(宴)座
參照。古語。』 〇(佛) えん(坐)・をん(坐)に同じ。
〔燕座〕

えんくわだいにす えん

ふ。所屬農科大學の教授又は助教授より、文部大臣これを補す。

えんじふりよう 演習旅行【名】「兵」演習のために旅行。

えんじまがき えんじ 離【名】「つきがき」築垣に同じ。「古語」。

えんじん 焔心【名】「化」ないえん内焔にえんじん【英 Engine】【名】機関。器械。發動機。機関車。

えんじん 閨人【名】えんじん 閨尹に同じ。えんじん 閨人【名】延伸増加【名】「兵」散兵の一翼又は兩翼に、更に散兵を増して、散兵線を延長すること。「伍間増加に對して」。

えんじん 螺糸【英 Edison's lamp】【名】圓形なる金屬を削り又は仕上げ又は螺旋【うね】を切るに用ふる機械。

えんじや 鹽車【名】鹽を運搬する車。鹽車の憾【うね】。

えんじや 鹽車【名】「賈誼の甲乙屈原賦に「鹽車二兩耳服鹽車一兮」とあるに本づく。千里の名馬も、駕馬と同じく、鹽車を挽くの意」身の不遇をうらむこと。

えんじや 縁者【名】縁家の人。しんぞくしんるゐ。

縁者の證據【句】「徳川時代に、法廷にて縁者の證據人となることを許さざりしよりいふ」信用しがたく、無効なることの譬【語】。

えんじや 煙嶂【名】嵐氣の立込めたる山。太平記この十景の上に、石を集めては煙嶂の色を假り、樹を植えては風濤の聲をうつす。

えんじや 炎症【名】「醫」身體の一部に灼熱【あつちやう】潮紅腫脹【しやうちやう】疼痛などの障害を感ずること。諸種の刺激にもとづく組織の障害、又はその障害に對する組織の反應等により原因し、その部分に血液循環し、血管より白血汁出て、隨つて前記の症狀を來し、又、加答兒【あがたに】を伴ふ。癰疽。

えんじや 縁生【名】「佛」因縁所生の略。一切萬物は因縁によりて生ずること。

えんじや 延祥【名】「人」彫刻家。多く佛像を作れりと云ふ。延暦頃の人。

えんじや 豔狀豔狀【名】えんじや 豔書【名】。

えんじや 炎上【名】「書經の洪範篇に「水曰洧下、火曰炎上」とあり」火の燃えあがること。大なる建築物の、火災に罹ること。

えんじや 燕雀【名】「つばめ」と雀と。度量の小さい人の譬。

えんじや 燕雀【名】「史記の陳涉世家に「陳涉嘆息曰、嗟呼燕雀安知鴻鵠之志哉」とあるに本づく」小人は大人君子の志を知らざる譬【語】。

えんじや 燕雀【名】「周易の參同契に「燕雀不レ生レ風、狐兔不レ乳馬」とあるに本づく」凡人の子にすぐれたる子の生れぬ譬、瓜の蔓に茄子【ひしひ】は生【う】らぬ【語】。

えんじや 閨若塚【名】「人」支那清朝の儒者。字は百詩。山西省太原の人。經史に通じ、考證に長じ、古文尙書の孔安國傳が晉人の偽作なることを發見す。著書多し。康熙四十三年歿す。年六十九。

えんじや 燕雀類【名】「動」鳥類中の一目。嘴短小にして角質、味酸なく、鳴管能く發達し、飛翔を能くし、巢を造るに巧なる等、その特質なり。むくどり、うぐひす、めじろ、せきさい、ひばり等、鳥類中の大多數はこれに屬す。鳴禽類。

えんじや 縁者續【名】縁つづき。つづきあひ。

えんじや 燕首【名】くろくさのかみ【藏人頭】。

えんじや 延壽【名】壽命を延ばすこと。ながいき。延年。延命。延齡【延壽を祈る】。

えんじや 延壽【名】肥後國菊池の刀工の一家。來【く】國行を祖とす。菊池も「えんじや」にむら。延壽國村【名】「人」劍客。肥後國の人。來【く】國後の女婿。刀劍の術に妙を得。子孫、皆名あり。

えんじや 延壽寺【名】肥後國熊本市にある眞言宗の寺。大永二年、僧空珍の開基。後、加藤清正の幫助によりて中興す。

えんじや 延壽堂【名】「佛」老者又は病者を安靜に居らしむるための家。今は、専ら病僧の療養に充てたる寮をいふ。蓮華堂。夏候より、氣分悪しく、今ほど延壽堂に入候ふ。【くわさく】は火葬場の忌詞【禪家の語】。持壽堂。禪家に、茶毘所【くわさく】を延壽堂といふ。

えんじや 燕出【名】天子の微行。

えんじや 延壽屋蘇【名】「屋蘇散は、壽命を保つといふ意よりいふ」さそ【屋蘇】に同じ。

えんじや 艶書・艶書【名】男女間に贈答し、戀愛の意を述べたる手紙。やさぶみ。けさうぶみ。えんじや。いろぶみ。えんぞ。艶文。艶狀。

えんじや 炎暑【名】夏の燃ゆること。暑さ。甚しきあつき。炎熱。酷暑。

えんじや 縁書【名】ゆかりある者の願狀。太平記罪科あて、所帯を沒收せられたる人、縁書を以て、執事兄弟に屬し、いかが仕るべきと嘆けり。

えんじや 演書【名】本文の意義を引きのばして書くこと。

えんじや 艶書・艶書【名】えんじや 艶書【名】よあはせ 艶書合 艶書合【名】艶書を作り合せて、優劣を判じ、勝負を定むる遊戲。歌合文合の類。えんぞあはせ。けさうぶみあはせ。金葉堀河院の御時の艶書あはせに。

えんじや 艶稱【名】「艶は敬【やう】む意」さかんにほめたふること。

えんじや 厭勝錢【名】凶災を攘【はら】ひ、福祿を求むるために禁厭【きんえん】として用ふる錢。

えんじや 艶書歌・艶書歌【名】艶書合をなす歌【古語】。堀河院御時、艶書歌、殿上の人人に召して、歌よむ女房の許【遣しける】。

えんじや 縁飾【名】「衣服に縁【は】あるがごとくなる義」かざりを施すこと。えんじや 艶色・艶色【名】なまめきたる色。

「こと。飽食。えんじや 饗食【名】満腹するまで食ふえんじや 焰色【名】「化」『英 Flame color』吹管分析に於て、ランプの火焰に接したる鐵物のために、焰にあらはるる種の色。

えんじや はんかう 焰色反應【名】「化」『英 Flame reaction』水素焰・アルコール燈、ペンゼン燈などの焰中、ある元素の化合物を挿入する時、焰のそれれ異なる特有の色を以て輝くこと。その化合物中に含める或元素を察知し得るがゆゑに、鐵物の鑑識・化學分析などに供せらる。

えんじや 艶次郎【名】「山東京傳の黄表紙の傑作「江戸生艶氣權傾【あきかぢやう】」の主人公を艶次郎といひ、自ら天下第一の色男を以て任ずる次第を記したるよりいふ。きやうてんは京傳鼻參照」容貌を自慢する男女【文化・文政頃の語】。

えんじや 燕子樓【名】「支那、唐の張建が、明勝【めいしやう】といふ美人の姿を住ませたる樓の名に本づく」せふた【妾宅】の雅稱。

えんじや 燕巢【名】海燕の巢より製せる食料品。海燕は燕の一種にして、東印度諸島、南支那等に産す。燕巢は此の鳥が海邊に生ずる海藻を以て造れる膠質物に、支那人の最も珍重せる料理品とす。上中下の三種ありて、上等は官燕【白燕】、中等は常燕【下等】は毛燕といふ。燕窩【がんわ】。燕窩菜。

えんじや 縁隅木【名】「建」すみずみ【隅】又首に同じ。縁を利したる水。し。

えんじや 燕水【名】あふす淵【みづ】を見よ。えんじや 燕水【名】あふす淵【みづ】を見よ。えんじや 燕水【名】あふす淵【みづ】を見よ。

えんじや 延髓【名】「醫」『羅 Metulla oblongata』後頭の頸部にあたり、腦と脊髓との連絡をなす部分。反射運動及び呼吸・心臓等諸の高等中樞を有し、脊髓諸中樞を總理す。殊にこの部に存する呼吸の中樞は頗る貴重にして、細針の一刺創もよく生命を絶つに足る。

えんじや 延髓【名】「醫」『羅 Metulla oblongata』後頭の頸部にあたり、腦と脊髓との連絡をなす部分。反射運動及び呼吸・心臓等諸の高等中樞を有し、脊髓諸中樞を總理す。殊にこの部に存する呼吸の中樞は頗る貴重にして、細針の一刺創もよく生命を絶つに足る。

えんじや 延髓【名】「醫」『羅 Metulla oblongata』後頭の頸部にあたり、腦と脊髓との連絡をなす部分。反射運動及び呼吸・心臓等諸の高等中樞を有し、脊髓諸中樞を總理す。殊にこの部に存する呼吸の中樞は頗る貴重にして、細針の一刺創もよく生命を絶つに足る。

えんじや 延髓【名】「醫」『羅 Metulla oblongata』後頭の頸部にあたり、腦と脊髓との連絡をなす部分。反射運動及び呼吸・心臓等諸の高等中樞を有し、脊髓諸中樞を總理す。殊にこの部に存する呼吸の中樞は頗る貴重にして、細針の一刺創もよく生命を絶つに足る。

えんじや 延髓【名】「醫」『羅 Metulla oblongata』後頭の頸部にあたり、腦と脊髓との連絡をなす部分。反射運動及び呼吸・心臓等諸の高等中樞を有し、脊髓諸中樞を總理す。殊にこの部に存する呼吸の中樞は頗る貴重にして、細針の一刺創もよく生命を絶つに足る。

えんじや 延髓【名】「醫」『羅 Metulla oblongata』後頭の頸部にあたり、腦と脊髓との連絡をなす部分。反射運動及び呼吸・心臓等諸の高等中樞を有し、脊髓諸中樞を總理す。殊にこの部に存する呼吸の中樞は頗る貴重にして、細針の一刺創もよく生命を絶つに足る。

えんじや 延髓【名】「醫」『羅 Metulla oblongata』後頭の頸部にあたり、腦と脊髓との連絡をなす部分。反射運動及び呼吸・心臓等諸の高等中樞を有し、脊髓諸中樞を總理す。殊にこの部に存する呼吸の中樞は頗る貴重にして、細針の一刺創もよく生命を絶つに足る。

えんじや 延髓【名】「醫」『羅 Metulla oblongata』後頭の頸部にあたり、腦と脊髓との連絡をなす部分。反射運動及び呼吸・心臓等諸の高等中樞を有し、脊髓諸中樞を總理す。殊にこの部に存する呼吸の中樞は頗る貴重にして、細針の一刺創もよく生命を絶つに足る。

えんじや 延髓【名】「醫」『羅 Metulla oblongata』後頭の頸部にあたり、腦と脊髓との連絡をなす部分。反射運動及び呼吸・心臓等諸の高等中樞を有し、脊髓諸中樞を總理す。殊にこの部に存する呼吸の中樞は頗る貴重にして、細針の一刺創もよく生命を絶つに足る。

えんじや 延髓【名】「醫」『羅 Metulla oblongata』後頭の頸部にあたり、腦と脊髓との連絡をなす部分。反射運動及び呼吸・心臓等諸の高等中樞を有し、脊髓諸中樞を總理す。殊にこの部に存する呼吸の中樞は頗る貴重にして、細針の一刺創もよく生命を絶つに足る。

えんじや 延髓【名】「醫」『羅 Metulla oblongata』後頭の頸部にあたり、腦と脊髓との連絡をなす部分。反射運動及び呼吸・心臓等諸の高等中樞を有し、脊髓諸中樞を總理す。殊にこの部に存する呼吸の中樞は頗る貴重にして、細針の一刺創もよく生命を絶つに足る。

えんじや 延髓【名】「醫」『羅 Metulla oblongata』後頭の頸部にあたり、腦と脊髓との連絡をなす部分。反射運動及び呼吸・心臓等諸の高等中樞を有し、脊髓諸中樞を總理す。殊にこの部に存する呼吸の中樞は頗る貴重にして、細針の一刺創もよく生命を絶つに足る。

えんす

えんすろかう 鹽水港【名】(地)臺灣の南部にある市街。鹽水港廳の所在地。

えんすろせん 鹽水選【名】(農)稻、麥などの種粒を精選する方法の一。種子を鹽水にひたして、その浮べるものを除き、沈みたるもののみを種粒とす。鹽の分量は、種子の種類によりて比重異なるがゆゑに、増減せざるべからず。

えんせい 延性【名】(理)線状に引きのびし得る物質の性質。

えんせい 炎精【名】(理)ほのぼの炎に同じ。

えんせい 厭世【名】この世をいやに感ずること。世を厭ふこと。(樂天に對して)

えんせい 鹽井【名】食鹽に含みたる水を汲取るために、人工にて掘りたる井。

えんせい 鹽精【名】(化)えんさん(鹽酸)に同じ。

えんせい 鹽稅【名】じょえんせい(食鹽稅)えんせい(食鹽)と人生とを絶對的に厭ふべしむるなりとする見解。獨逸のシヨ・ベンハウエル(Schopenhauer)氏など主張す。悲觀說。苦觀說。多苦說。厭世主義(樂天觀に對して)

えんせい 厭世教【名】(哲)厭世主義を説く教ふる宗教。

えんせい 厭世主義【名】(哲)えんせい(厭世觀)に同じ。(樂天主義に對して)

えんせい 延政門【名】平安城の内裏内廊十二門の一。内裏の東、宣陽門の右にあり。左廂門。

えんせう 延燒【名】火災のもえひろがる。縁燒【名】(地)『英英大辭典』珊瑚礁の一。島の周邊に海水を隔てて、存するもの。樞礁、岸礁、堡礁、環礁に對して

えんせう 燭硝【名】(化)せうせき硝石に同じ。

えんせう 燭硝火【名】芝居にて、銃砲又は燭硝の前後などに用ふる燭硝の火。樟腦火(せうねう)焼酎火(せうしゆ)などの類。

えんせき 鹽析【名】(化)ある溶液中にあ

えんせき

の鹽類を溶し入れて、前に溶解せるものを沈澱せしむること。例へば石鹼の製造に際し、その溶液に食鹽を加へて、石鹼を分離せしむるが如き類。

えんせき 筵席【名】(名)さけの座。

えんせき 筵席【名】(名)さけの座。

えんせき 燕石【名】(名)石風呂也。

えんせき 燕石【名】(名)石風呂也。

えんせき 燕石【名】(名)石風呂也。

えんせき 燕石【名】(名)石風呂也。

えんせき 燕石【名】(名)石風呂也。

えんせき 燕石【名】(名)石風呂也。

えんせき 燕石【名】(名)石風呂也。

えんせき 燕石【名】(名)石風呂也。

えんせき 燕石【名】(名)石風呂也。

えんせき 燕石【名】(名)石風呂也。

えんせき 燕石【名】(名)石風呂也。

えんせき 燕石【名】(名)石風呂也。

えんせき 燕石【名】(名)石風呂也。

えんそく

えんそく 堰塞湖【名】(地)火山の破裂るびて静かに休息すること。

えんそく 堰塞湖【名】(地)火山の破裂るびて静かに休息すること。

えんそく 堰塞湖【名】(地)火山の破裂るびて静かに休息すること。

えんそく 堰塞湖【名】(地)火山の破裂るびて静かに休息すること。

えんそく 堰塞湖【名】(地)火山の破裂るびて静かに休息すること。

えんそく 堰塞湖【名】(地)火山の破裂るびて静かに休息すること。

えんそく 堰塞湖【名】(地)火山の破裂るびて静かに休息すること。

えんそく 堰塞湖【名】(地)火山の破裂るびて静かに休息すること。

えんそく 堰塞湖【名】(地)火山の破裂るびて静かに休息すること。

えんそく 堰塞湖【名】(地)火山の破裂るびて静かに休息すること。

えんそく 堰塞湖【名】(地)火山の破裂るびて静かに休息すること。

えんそく 堰塞湖【名】(地)火山の破裂るびて静かに休息すること。

えんそく 堰塞湖【名】(地)火山の破裂るびて静かに休息すること。

えんそく 堰塞湖【名】(地)火山の破裂るびて静かに休息すること。

えんそく 堰塞湖【名】(地)火山の破裂るびて静かに休息すること。

えんそく 堰塞湖【名】(地)火山の破裂るびて静かに休息すること。

えんす

えんす 鹽素水【名】(化)鹽素瓦斯の水溶液。化學實驗に用ひらるるものにて、日光に觸るれば分解して鹽酸となるが故に、黒く塗りたる瓶中に貯ふるを要し、しかもよく保存する時は用をなす。

えんす 鹽素水【名】(化)鹽素瓦斯の水溶液。化學實驗に用ひらるるものにて、日光に觸るれば分解して鹽酸となるが故に、黒く塗りたる瓶中に貯ふるを要し、しかもよく保存する時は用をなす。

えんす 鹽素水【名】(化)鹽素瓦斯の水溶液。化學實驗に用ひらるるものにて、日光に觸るれば分解して鹽酸となるが故に、黒く塗りたる瓶中に貯ふるを要し、しかもよく保存する時は用をなす。

えんす 鹽素水【名】(化)鹽素瓦斯の水溶液。化學實驗に用ひらるるものにて、日光に觸るれば分解して鹽酸となるが故に、黒く塗りたる瓶中に貯ふるを要し、しかもよく保存する時は用をなす。

えんす 鹽素水【名】(化)鹽素瓦斯の水溶液。化學實驗に用ひらるるものにて、日光に觸るれば分解して鹽酸となるが故に、黒く塗りたる瓶中に貯ふるを要し、しかもよく保存する時は用をなす。

えんす 鹽素水【名】(化)鹽素瓦斯の水溶液。化學實驗に用ひらるるものにて、日光に觸るれば分解して鹽酸となるが故に、黒く塗りたる瓶中に貯ふるを要し、しかもよく保存する時は用をなす。

えんす 鹽素水【名】(化)鹽素瓦斯の水溶液。化學實驗に用ひらるるものにて、日光に觸るれば分解して鹽酸となるが故に、黒く塗りたる瓶中に貯ふるを要し、しかもよく保存する時は用をなす。

えんす 鹽素水【名】(化)鹽素瓦斯の水溶液。化學實驗に用ひらるるものにて、日光に觸るれば分解して鹽酸となるが故に、黒く塗りたる瓶中に貯ふるを要し、しかもよく保存する時は用をなす。

えんす 鹽素水【名】(化)鹽素瓦斯の水溶液。化學實驗に用ひらるるものにて、日光に觸るれば分解して鹽酸となるが故に、黒く塗りたる瓶中に貯ふるを要し、しかもよく保存する時は用をなす。

えんす 鹽素水【名】(化)鹽素瓦斯の水溶液。化學實驗に用ひらるるものにて、日光に觸るれば分解して鹽酸となるが故に、黒く塗りたる瓶中に貯ふるを要し、しかもよく保存する時は用をなす。

えんす 鹽素水【名】(化)鹽素瓦斯の水溶液。化學實驗に用ひらるるものにて、日光に觸るれば分解して鹽酸となるが故に、黒く塗りたる瓶中に貯ふるを要し、しかもよく保存する時は用をなす。

えんす 鹽素水【名】(化)鹽素瓦斯の水溶液。化學實驗に用ひらるるものにて、日光に觸るれば分解して鹽酸となるが故に、黒く塗りたる瓶中に貯ふるを要し、しかもよく保存する時は用をなす。

えんす 鹽素水【名】(化)鹽素瓦斯の水溶液。化學實驗に用ひらるるものにて、日光に觸るれば分解して鹽酸となるが故に、黒く塗りたる瓶中に貯ふるを要し、しかもよく保存する時は用をなす。

えんす 鹽素水【名】(化)鹽素瓦斯の水溶液。化學實驗に用ひらるるものにて、日光に觸るれば分解して鹽酸となるが故に、黒く塗りたる瓶中に貯ふるを要し、しかもよく保存する時は用をなす。

えんす 鹽素水【名】(化)鹽素瓦斯の水溶液。化學實驗に用ひらるるものにて、日光に觸るれば分解して鹽酸となるが故に、黒く塗りたる瓶中に貯ふるを要し、しかもよく保存する時は用をなす。

えんす 鹽素水【名】(化)鹽素瓦斯の水溶液。化學實驗に用ひらるるものにて、日光に觸るれば分解して鹽酸となるが故に、黒く塗りたる瓶中に貯ふるを要し、しかもよく保存する時は用をなす。

事がら。俗事。「烟塵を避く」

えんづく縁附く【勤下二他】縁づかしむ

船用汽罐の煙を排する機関。

けり。この頃より、男鼓打惡(ア)しとて、大

えんねん

衆打つことになりけり」**【能の】**の替の形の一。古の延年舞に擬せしものにて、安宅(安)の曲に用ふ。

えんねんさう 延年草 **【名】**「植」えんれいさう(延齡草)に同じ。

えんねんまひ 延年舞 **【名】**えんねん延年(延齡舞)に同じ。

えんのうばそく 役優婆塞 **【名】**「人」修驗道(修)の祖。大和國葛城(葛)郡の人。本名は役小角(角)。佛教を好み呪術を善くす。三十二歳にして葛城山に入り、巖窟にありて苦業を積むこと三十餘年。またたまに諸する者あり、文武天皇の詔により捕へられたれども、行力(行)を以て逃ぐ。依つて、その母を捕へしに、自ら出て捕へられ、伊豆國に流さる。大寶二年薨さる。えんのをづめ。役行者。

えんのぎやうじや 役行者 **【名】**「人」前條に同じ。**【役行者太宰櫻】**と題する淨瑠璃にて、役行者の人形に始めて用ひしよりいふ。操(操)人形の頭の形の一。

えんのさ 宴座 **【名】**えん(宴座)に同じ。

えんのした 線下 **【名】**線がはの下。ゆかし。凡(凡)山寺や線(線)のしたなる苔清水(苔)線(線)の下(線)の赤小豆(赤) **【句】**「線の下に生じたる赤小豆の日光を受けざるがため、十分(十分)にみのることもなきに譬へていふ。不仕合せにして、志を遂げぬ者の譬(譬) **【諺語】**

線(線)の下(線)の駕籠廻(駕) **【句】**「たけひくき人。一寸(一寸)歩し。 **【諺語】**

線(線)の下(線)の蹴遣(蹴) **【句】**「さしつかへ多くして行ひにくき譬(譬) **【諺語】**

線(線)の下(線)の荷 **【句】**「立身出世の見込なき者の譬(譬) **【諺語】**

線(線)の下(線)の力持(力) **【句】**「人に知られぬ骨をり。報酬なき労働。えんのしたのまひ。かげのまひ **【諺語】**

線(線)の下(線)の舞 **【句】**「前條に同じ。 **【諺語】**

えんのした 線下 蟋蟀 **【名】**「動」おかまこほろぎ(御釜蟋蟀)に同じ。

えんのせうかく 役小角 **【名】**「人」えんの

えんのつ

うばそく 役優婆塞に同じ。

えんのつな 縁の綱 **【句】**「えん(縁)の條下を見よ。

えんのまつばら 宴松原 **【名】**「地」平安城の宜秋門の北(北)掃部(掃)寮(寮)の西(西)近衛(近)の南(南)朱雀(朱)の西(西)にありしところ。墨(墨)近衛(近)にも今は限りと思ひしをまたためりあふえんのまつばら。

えんのまひまひ 縁舞舞 **【名】**まひまひ舞(舞)に同じ。

えんのもの 縁者 **【名】**えんのまひまひ(縁舞)に同じ。

えんのをづめ 役小角 **【名】**「人」えんのうばそく 役優婆塞に同じ。

えんば 焉馬 **【名】**えん(焉馬)に同じ。

えんば 橋馬 養馬 **【名】**ふり(風鈴)に同じ。

えんば 煙波 煙波 **【名】**「波氣(波)などのために曇り渡りたる裡(裡)に立つ海波。けぶりのなみ。えん(煙波)に同じ。

えんばい 鹽梅 **【名】**「うめぼし(梅干)に同じ。鹽(鹽)と梅(梅)の實(實)と。 **【食物の調味に、鹽(鹽)多ければ鹹(鹹)多ければ酸(酸)その中間を得てはじめて美味なるを得るよりいふ。あな(鹽梅)に同じ。 **【臣下の、君に仕ふるに、剛柔可否相濟ひて、その徳を成すこと。】****

えんばい 煙煤 煙煤 **【名】**すす。油煙(油)に同じ。 **【時褐色を帯びたる黒き粉。煤(煤)より製したるもの。日本畫家が、古畫を模寫する時、種種の繪具の鮮色を變じて、古色あらしむるために交せて用ふ。】**

えんばう 掩堡 **【名】**「兵」兵器の使用を便にし、且つ敵の銃丸及び砲彈に對して守兵を掩護するのために設くるもの。主として、歩兵がその携帶器具を用ひて作る簡單なる工作にして、伏射掩堡、膝射掩堡、立射掩堡の三種あり。えん(散兵壕)に同じ。

えんばう 延寶 **【名】**「元元天皇の御代の年號(紀元二三三年—二三四〇年)。

えんばう 延寶 **【名】**「元元天皇の御代の年號(紀元二三三年—二三四〇年)。

えんばう 延寶 **【名】**「元元天皇の御代の年號(紀元二三三年—二三四〇年)。

えんばう 延寶 **【名】**「元元天皇の御代の年號(紀元二三三年—二三四〇年)。

えんばう 延寶 **【名】**「元元天皇の御代の年號(紀元二三三年—二三四〇年)。

えんばう 延寶 **【名】**「元元天皇の御代の年號(紀元二三三年—二三四〇年)。

えんばう 延寶 **【名】**「元元天皇の御代の年號(紀元二三三年—二三四〇年)。

えんばう 延寶 **【名】**「元元天皇の御代の年號(紀元二三三年—二三四〇年)。

えんばし

鉛板を酢にひたしたる上、空氣と炭酸とに作用せしめ、もしくは、炭酸鉛を醋酸に溶解し、無水炭酸を通じて得る白色の粉末。古來、白粉(白)の主なる原料として用ひらる。鉛(鉛)にかかると危険あり。又、油繪具(油)ペンキ(ペンキ)印刷インキ(印刷)水彩繪具等にも用ひらる。鉛白(鉛)粉(粉)。唐(唐)の土(土)の鉛柱。白丹。白粉。鹽基性炭酸鉛。

えんばしら 緣柱 **【名】**えん(縁柱)に同じ。

えんばしら 緣端 **【名】**えん(縁端)に同じ。

えんばしら 緣端 **【名】**えん(縁端)に同じ。

えんばしら 緣端 **【名】**えん(縁端)に同じ。

えんばしら 緣端 **【名】**えん(縁端)に同じ。

えんばしら 緣端 **【名】**えん(縁端)に同じ。

えんばしら 緣端 **【名】**えん(縁端)に同じ。

えんばしら 緣端 **【名】**えん(縁端)に同じ。

えんばしら 緣端 **【名】**えん(縁端)に同じ。

えんばしら 緣端 **【名】**えん(縁端)に同じ。

えんばしら 緣端 **【名】**えん(縁端)に同じ。

えんばしら 緣端 **【名】**えん(縁端)に同じ。

えんばしら 緣端 **【名】**えん(縁端)に同じ。

えんばしら 緣端 **【名】**えん(縁端)に同じ。

えんばしら 緣端 **【名】**えん(縁端)に同じ。

えんばしら 緣端 **【名】**えん(縁端)に同じ。

えんばしら 緣端 **【名】**えん(縁端)に同じ。

えんばしら 緣端 **【名】**えん(縁端)に同じ。

えんばしら 緣端 **【名】**えん(縁端)に同じ。

えんぴ

えんぴ 鹽皮 **【名】**防腐のために多く食鹽を施したる生皮。

えんぴ 燕尾 **【名】**「擊劍にて、燕の飛ぶが如く身がたる宙がへりをする。こと。

えんぴ 燕尾 **【名】**「細長くして、燕の尾の如く二つに分れたる形。

えんぴ 燕尾 **【名】**「親族の關係あること。縁邊。

えんぴ 燕尾 **【名】**「(燕尾科)に同じ。

えんぴ 燕尾 **【名】**「(燕尾科)に同じ。

えんぴ 燕尾 **【名】**「(燕尾科)に同じ。

えんぴ 燕尾 **【名】**「(燕尾科)に同じ。

えんぴ 燕尾 **【名】**「(燕尾科)に同じ。

えんぴ 燕尾 **【名】**「(燕尾科)に同じ。

えんぴ 燕尾 **【名】**「(燕尾科)に同じ。

えんぴ 燕尾 **【名】**「(燕尾科)に同じ。

えんぴ 燕尾 **【名】**「(燕尾科)に同じ。

えんぴ 燕尾 **【名】**「(燕尾科)に同じ。

えんぴ 燕尾 **【名】**「(燕尾科)に同じ。

えんぴ 燕尾 **【名】**「(燕尾科)に同じ。

えんぴ 燕尾 **【名】**「(燕尾科)に同じ。

えんぴ 燕尾 **【名】**「(燕尾科)に同じ。

えんぴ 燕尾 **【名】**「(燕尾科)に同じ。

えんぴ 燕尾 **【名】**「(燕尾科)に同じ。



(くふびんえ)

浮提の一部なりと考へしより轉用せしな

素酸ポタシウム)の略。

綿などを食害す。雄は晩秋、聲よく鳴く。

ど、蓮臺に坐せるもあり。この地藏に祈れ

えんみや

ば、壽命の福を得と云ふ。

えんみやうぶくろ 延命袋【名】えんめいぶくろ(延命袋)に同じ。

えんみやうぶげん 延命普賢【名】(佛)えんみやうぶげんぼさつ 延命普賢菩薩

【名】(佛)次條に同じ。

えんみやうぶさつ 延命菩薩【名】(佛)普賢菩薩の一總體。身相は、頭上に五佛の寶冠あり、千葉の蓮華に坐し、金剛界、十六大菩薩四攝の二十尊等に圍繞せらる。眞言、天台の兩宗にて、この菩薩を本尊として、増益・息災・延命のために修する行法を延命法と云ふ。延命。延命普賢。普賢延命菩薩。金剛菩薩。延命普賢菩薩。【見よ。

えんみやうぶふ 延命法【名】(佛)前條をえんみやうぶふ 延命院【名】江戸谷中にありし日蓮宗の寺。享和年中、その住職日蓮しはば大奥の女中と密會する等、破戒の所行ありて、死刑に處せられ、廢寺となる。れんげわうじやう(蓮華往生)參照。

えんみやく 縁脈【名】(植)葉片の縁に沿ひて通ぜる葉脈。

えんむ 煙霧煙霧【名】(水蒸氣と霧と。【天】細かき塵のために、空氣の混濁すること。

えんむすび 縁結【名】(えんぐみ。結婚いもせむすび。【男】女が姓名年齢などを記したる紙片を、己が信仰する社寺の格子などに結び附け、おく迷信。斯くすれば、願のごとく夫婦となるを得べしといふ。【数】多の男女の名を各別の紙片に記して捻(ねり)、無心に合せ結びて、偶然の配合を占ふ遊戲。おもに遊女などが行ふ。

えんめい 延命【名】(えんじゆ(延壽)に同じ。【延命・息災】(植)えんれいさ(延齡草)に同じ。平道扁鵲が門には何かあるといふ。延命といふ草を植ふたり。

えんめいさく 延命菊【名】(植)ひななく(雛菊)に同じ。

えんめいさく 延命子囊【名】(植)あつめいさく(敦盛草)に同じ。

えんめいさく 延命草【名】(植)えんれいさ(延齡草)に同じ。

えんめい

えんめい 延命竹【名】毒芹の地下莖。

えんめいぶくろ 延命袋【名】寶壽の一。ふくらかしたる錦の囊の口を括(くわ)りたるを畫きたるもの。えんみやうぶくろ。

えんめいもん 延明門【名】平安城の大内裏の豐樂院(豊楽院)の十九門の一。外廓の東面にあり。

えんめつ 煙滅烟滅【名】煙の如く消滅すること。

えんめつ 露目【名】よく見ゆる目。あら探しの巧みなる目。兔耳(うさみみ)。

えんもく 宴默【名】身心を安らかにして、無言・無意なること。寂然宴默。

えんもじ 閨文字【名】(もじ文字は接尾語)えんま(閨麗)を云ふ。(女の語)狂言(尾地蔵)「まづ口上書を見よう。閨文字様まるる、地より書かれた」

えんや 艶治、艶治【名】なまめきてうるはしきこと。治艶。

えんや 鹽冶【名】海水を煮て鹽を製し、鐵山を採掘して冶工をなすこと。

えんや 炎陽【名】夏の日光。驕陽。

えんや 艶陽、艶陽【名】春さき三四月ごろの季節。

えんや たかさだ 鹽谷高貞【名】(人)武將。出雲國の人。檢非違使また出雲守たり。元弘三年後醍醐帝の隠岐國にありし時、高貞その使者を拘留せしが中途にして降り、建武の初め、千里の馬を帝に獻じて隠岐守に任せられ、二年又尊氏に降りしが、高師直に讒せられ、延元三年出雲國に逃れて自殺す。鹽谷判官。

えんやはんくわん 鹽合判官【名】(人)「えんぐわんは、正しくははんぐわん(前條)に同じ。

えんやらや 感【名】えんやらに同じ。(俚語)

えんやらや 感【副】えんやらやに同じ。(俚語)

えんや 縁山【名】ゆち(由来)に同じ。

えんや 縁嶺【名】(文)修辭上、主材に縁ある語句にて修飾するもの。例へば枕詞、序詞の類。

えんや 艶容、艶容【名】なまめきたるえんよく 衍沃【名】肥えたる土地。

えんよく

えんよく 掩抑【名】おさへつくること。抑へとむること。

えんよく 饜飮厭飮【名】飽くまで食ひて、食物を厭ふこと。くひあきること。

えんらう 煙浪烟浪【名】えんば(煙波)に同じ。

えんらう 閨老【名】(佛)えんまわう(閨麗)に同じ。

えんらう 宴樂燕樂、燕樂、燕樂【名】酒宴したるのしむこと。さかもり。うたげ。

えんらう 閨麗人【名】(佛)えんまわう(閨麗)に同じ。

えんらん 煙嵐烟嵐【名】水蒸氣と山氣。山中のや。嵐氣。本年記「東西の山の木かげより、煙嵐を捲きて押寄せたり」

えんらん 延攬【名】人を招き寄せて、その心を收攬すること。とりいりて、わが味方となすこと。

えんらう 閨羅王、閨羅王、閨羅王、瑛羅王【名】(佛)えんまわう(閨麗)に同じ。

えんり 厭離【名】(佛)いと離るること。

えんり 淹留淹留【名】たたり(滞留)に同じ。

えんりやう 炎涼【名】あつさと、すずしさと。【權勢】の盛んなると衰へたと。

えんりやう 延曆【名】桓武天皇の御代の年號(紀元一四四二年一四六五年)。

えんりやう 延曆寺【名】近江國滋賀郡比叡山にある寺。天台宗の本山。延暦七年僧最澄の建立せしもの。始め一乗止観院といひ、弘仁十四年延暦寺の名を勅賜せしむ。又圓城寺等(寺門)といふに對して山門(さんもん)といひ、南都奈良の諸寺に對して北嶺といふ。

えんりやう 延曆寺座主【名】てんだいさ(天台座主)に同じ。

えんりやう 厭離穢土【名】(佛)この世の五濁(ごじやく。無安を厭ひて、出離をねがふこと。欣求(きんきう。淨土に對して)。

えんるる 縁類【名】いんせき(姻戚)に同じ。

えんるる 鹽類【名】(化)鹽基と酸との化合物。

えんるる 鹽類泉【名】えんせん(鹽泉)に同じ。

えんれい

えんれい 艶麗麗麗【名】つやつやとしてうるはしきこと。あだめきて美しきこと。

えんれい 延齡【名】えんじゆ(延壽)に同じ。

えんれい 延齡草【名】(植)百合(はくしき)科に屬する多年生の草。深山に自生。一根本一莖にして、高さ一尺ばかり。花は三瓣。根、その色、紫淡白線などあり、實は小莖前後に熟す。根は塊をなし、味甚だ苦く、藥用となる。みづばあふひ。たちあふひ。

延命。延命草。延年草。養老草。えんれい。えんれい 延齡丹【名】昔用ひられし一種の藥。もと天文頃の名醫範翁の養子玄朔の處方なりといふ。

えんれう 延遠館【名】東京濱離宮の北門にありし館。慶應二年、濱御殿奉行廢せらるると共に、濱御殿を海軍奉行の所轄とせし時、築きしもの。されど、名は明治維新の際、命ぜしものなり。

えんろ 沿路【名】えんどう(沿道)に同じ。

えんろ 延祿堂【名】平安城大内裡(後)八省院十二堂の一。院の西方に在り。

えんわ 燕窩【名】えん(燕巢)に同じ。

えんわ 閨王、閨王【名】(佛)えんまわう(閨麗)の略。

えんわ 閨王、閨王【名】(佛)阿彌陀に十二光の稱ある中の一。

えんわ 閨王、閨王【名】(佛)阿彌陀に十二光の稱ある中の一。

えんわ 閨王、閨王【名】(佛)阿彌陀に十二光の稱ある中の一。

えんわ 閨王、閨王【名】(佛)阿彌陀に十二光の稱ある中の一。

えんわ 閨王、閨王【名】(佛)阿彌陀に十二光の稱ある中の一。

えんわ 閨王、閨王【名】(佛)阿彌陀に十二光の稱ある中の一。

えんわ 閨王、閨王【名】(佛)阿彌陀に十二光の稱ある中の一。

えんわ 閨王、閨王【名】(佛)阿彌陀に十二光の稱ある中の一。

えんわ 閨王、閨王【名】(佛)阿彌陀に十二光の稱ある中の一。

えんわ 閨王、閨王【名】(佛)阿彌陀に十二光の稱ある中の一。

えんわ 閨王、閨王【名】(佛)阿彌陀に十二光の稱ある中の一。

えんわ 閨王、閨王【名】(佛)阿彌陀に十二光の稱ある中の一。

えんわ 閨王、閨王【名】(佛)阿彌陀に十二光の稱ある中の一。

えんわ 閨王、閨王【名】(佛)阿彌陀に十二光の稱ある中の一。

えんわ 閨王、閨王【名】(佛)阿彌陀に十二光の稱ある中の一。

えんわ 閨王、閨王【名】(佛)阿彌陀に十二光の稱ある中の一。

えんわ 閨王、閨王【名】(佛)阿彌陀に十二光の稱ある中の一。

えんわ 閨王、閨王【名】(佛)阿彌陀に十二光の稱ある中の一。

えんわ 閨王、閨王【名】(佛)阿彌陀に十二光の稱ある中の一。

えんわ 閨王、閨王【名】(佛)阿彌陀に十二光の稱ある中の一。

えんわ 閨王、閨王【名】(佛)阿彌陀に十二光の稱ある中の一。

えんわ 閨王、閨王【名】(佛)阿彌陀に十二光の稱ある中の一。

えんわ 閨王、閨王【名】(佛)阿彌陀に十二光の稱ある中の一。

えんわ 閨王、閨王【名】(佛)阿彌陀に十二光の稱ある中の一。

えんわ 閨王、閨王【名】(佛)阿彌陀に十二光の稱ある中の一。

えんわ 閨王、閨王【名】(佛)阿彌陀に十二光の稱ある中の一。

えんわ 閨王、閨王【名】(佛)阿彌陀に十二光の稱ある中の一。

し家柄(ガイヘ)。

漏ること。狂言「春さめにさす傘の柄も」

り。かしこし。(俚語)

えらんたい 依蘭苔〔名〕〔植〕スエーデン

25

えらもの

〔依蘭昔〕に同じ。〔東京の俚語〕
えらもの 豪物〔名〕えらぶ(豪物)に同じ。
えり衣裏衣裡〔名〕こもるの内。
衣裏の寶珠〔句〕佛(えしゆゆ)衣珠(えしゆゆ)に同じ。

えり 釣〔名〕漁具の一。水中に竹を並べ、
棕綱(えり)にて編みて、細長き袋を横に
したるが如くに、あまた屈曲せしめて魚
これに入れば出づることの出来ぬやうに
造れるもの。多く近江國琵琶湖にて用ふ。
曾丹(えり)さき津にすぎきざせり春こと
にえりさす民がしわざならしむ。

えり 襟〔名〕衣の頸(えり)をめぐる部分。
〔俗〕〔能〕の装束の著附(えり)の下に重
ぬる襟。目頸(えり)のうしろの部分。えりく
び。うなじ。くびすぢ。〔領〕〔圖〕からあに
同じ。

襟に附く〔句〕襟元に附く(えり)に同じ。
襟(えり)古道具(えり)襟につく花守(えり)き庵(えり)かな
襟を當てる〔句〕あては、さる(えり)刺る
といふを、身代をする意にとりて、思ひ
ていふ。襟元の毛を刺る(東京の俚語)

襟を正す〔句〕端然たる態度をなす。
襟を見る〔句〕襟元に附く(えり)に同じ。
えりあか 襟垢〔名〕襟に附きたる垢。褌衣
(えり)襟垢の世をぬぎすて紙衣(えり)かな
(也)襟垢の世をぬぎすて紙衣(えり)かな
えりあし 襟足〔名〕えりの邊の髪のはえ
きは。ばう(えり)坊主襟(えり)參照。

えりあて 襟當(えり)襟のよこれぬや
うに、襟の裏に當つる布片。
えりあひ 襟合〔名〕馬の胸前の下、兩脚
の根の前。

えりいだし 選出だす〔動四他〕選びて、
取りいだす。よりだす。えらみだす。えり
いづ。えりだす。

えりいづ 選出づ〔動下二他〕前條に同じ。
えりいさぎ 選絲絹〔名〕古和泉國堺に、
唐の職工の來りて織出きと傳ふる絹。

えりいはひ 襟祝〔名〕たちはひ(裁祝)に
同じ。〔紙子〕もえりいはひ。
えりうち 選討〔名〕多くの敵の中より、相
手を選びて討取ること。平素(えり)まかり向ひ

えりうち

て、えりうちなども仕るべし」
えりうち 襟裏〔名〕襟の裏面に縫附くる
布片。うちえり。
えりおしろい 襟白粉〔名〕女のえりくび
に附くる白粉。普通のよりは濃く用ふ。

えりかき 寄掛(えり)寄掛〔名〕よりかき(寄
掛)に同じ。
えりかざり 襟飾(えり)襟飾〔名〕洋服の襟に附
ける飾の布帛。時代により、又嗜好により
て形、種類(えり)なぐたい。

えりかた 襟肩(えり)襟肩〔名〕衣服の前後の
襟(えり)の境界、即ち肩に當る部分の、背よ
り左右に缺(えり)を入れたる切目。

えりがへ 襟替〔名〕藝妓の半玉(えり)な
る時は、衣の襟赤きを、一人前となりて白
き襟を用ふること。

えりがみ 襟髪〔名〕頸(えり)のうしろの髪。
えりがら 選殻〔名〕えりくづ(選屑)に同じ。
えりきらひ 選襟〔名〕好むと嫌ふと。え
りごのみ。好悪。

えりきり 選斬〔名〕多くの中より相手を
選びて斬ること。ねらひうち。
えりくづ 選屑〔名〕えらびて残りたるも
の。えりがら。〔俗〕ほいもかなはて、皆そ
の折のえりくづとぞならん。

えりくび 襟首〔名〕えり襟(えり)に同じ。
えりくり えんじよ〔名〕高低出入の多きと
ころ。當流小栗判官(えり)くるくるくる、えりくり
えんじよの馬場の上手、乗りあげ、乗りさ
げ、乗りおろし。

えりくわつ 襟活〔名〕柔道にて、咽喉部を
壓迫して、假死せる者を活かす法。
えりけさ 襟袈裟〔名〕老居にて、唐人に扮
(えり)する時に、海掛(えり)のごとく背まはり
に垂れて用ふる一種の衣裳。ひんご參照。

えりこのいね 選子稻〔名〕大賞(えり)祭
の森田の稻の美稱。
えりこのき 選好〔名〕えりきらひ(選襟)に
えりこのき 選好〔名〕えりきらひ(選襟)に
えりこのき 選好〔名〕えりきらひ(選襟)に

えりこのき 選好〔名〕えりきらひ(選襟)に
えりこのき 選好〔名〕えりきらひ(選襟)に
えりこのき 選好〔名〕えりきらひ(選襟)に

えりこのき 選好〔名〕えりきらひ(選襟)に
えりこのき 選好〔名〕えりきらひ(選襟)に
えりこのき 選好〔名〕えりきらひ(選襟)に

えりこのき 選好〔名〕えりきらひ(選襟)に
えりこのき 選好〔名〕えりきらひ(選襟)に
えりこのき 選好〔名〕えりきらひ(選襟)に

えりした

たる建築の様式。ゴシック或は古典的様式
及び文藝復興期式を加味す。
えりした 襟下(えり)襟下〔名〕衣服の裾先(えり)
と襟先との間の部分。たてづま。つました。
えりした 襟下(えり)襟下〔名〕えらびたる
下がされ(古語)襟上連部殿上人、例
の色色(えり)したたがされ、織物・打物めて
たくゆゆしかりき。

えりしん 襟心〔名〕衣服の襟の心(えり)に入
れて、襟を厚くする木綿きれ。
えりしめ 襟締〔名〕しつけ針の、やや長く
太きもの。

えりしめ 襟締〔名〕柔道にて、手又は稽古
著の襟にて、相手の咽喉を壓迫する動作。
えりしやう 襟章〔名〕軍人などの制服の
襟に附けて、その所屬部隊を識別し易から
しむるもの。陸軍にては、各兵科各部の定
色又は所屬部隊の番號などを附け、海軍に
ては、海軍兵學校の生徒と海軍機關學校の
生徒とのみ、制服の襟に、小きき(えり)形
の記章を附す。

えりしめ 襟締〔名〕柔道にて、手又は稽古
著の襟にて、相手の咽喉を壓迫する動作。
えりしやう 襟章〔名〕軍人などの制服の
襟に附けて、その所屬部隊を識別し易から
しむるもの。陸軍にては、各兵科各部の定
色又は所屬部隊の番號などを附け、海軍に
ては、海軍兵學校の生徒と海軍機關學校の
生徒とのみ、制服の襟に、小きき(えり)形
の記章を附す。

えりしめ 襟締〔名〕柔道にて、手又は稽古
著の襟にて、相手の咽喉を壓迫する動作。
えりしやう 襟章〔名〕軍人などの制服の
襟に附けて、その所屬部隊を識別し易から
しむるもの。陸軍にては、各兵科各部の定
色又は所屬部隊の番號などを附け、海軍に
ては、海軍兵學校の生徒と海軍機關學校の
生徒とのみ、制服の襟に、小きき(えり)形
の記章を附す。

えりしめ 襟締〔名〕柔道にて、手又は稽古
著の襟にて、相手の咽喉を壓迫する動作。
えりしやう 襟章〔名〕軍人などの制服の
襟に附けて、その所屬部隊を識別し易から
しむるもの。陸軍にては、各兵科各部の定
色又は所屬部隊の番號などを附け、海軍に
ては、海軍兵學校の生徒と海軍機關學校の
生徒とのみ、制服の襟に、小きき(えり)形
の記章を附す。

えりしめ 襟締〔名〕柔道にて、手又は稽古
著の襟にて、相手の咽喉を壓迫する動作。
えりしやう 襟章〔名〕軍人などの制服の
襟に附けて、その所屬部隊を識別し易から
しむるもの。陸軍にては、各兵科各部の定
色又は所屬部隊の番號などを附け、海軍に
ては、海軍兵學校の生徒と海軍機關學校の
生徒とのみ、制服の襟に、小きき(えり)形
の記章を附す。

えりしめ 襟締〔名〕柔道にて、手又は稽古
著の襟にて、相手の咽喉を壓迫する動作。
えりしやう 襟章〔名〕軍人などの制服の
襟に附けて、その所屬部隊を識別し易から
しむるもの。陸軍にては、各兵科各部の定
色又は所屬部隊の番號などを附け、海軍に
ては、海軍兵學校の生徒と海軍機關學校の
生徒とのみ、制服の襟に、小きき(えり)形
の記章を附す。

えりしめ 襟締〔名〕柔道にて、手又は稽古
著の襟にて、相手の咽喉を壓迫する動作。
えりしやう 襟章〔名〕軍人などの制服の
襟に附けて、その所屬部隊を識別し易から
しむるもの。陸軍にては、各兵科各部の定
色又は所屬部隊の番號などを附け、海軍に
ては、海軍兵學校の生徒と海軍機關學校の
生徒とのみ、制服の襟に、小きき(えり)形
の記章を附す。

えりしめ 襟締〔名〕柔道にて、手又は稽古
著の襟にて、相手の咽喉を壓迫する動作。
えりしやう 襟章〔名〕軍人などの制服の
襟に附けて、その所屬部隊を識別し易から
しむるもの。陸軍にては、各兵科各部の定
色又は所屬部隊の番號などを附け、海軍に
ては、海軍兵學校の生徒と海軍機關學校の
生徒とのみ、制服の襟に、小きき(えり)形
の記章を附す。

えりしめ 襟締〔名〕柔道にて、手又は稽古
著の襟にて、相手の咽喉を壓迫する動作。
えりしやう 襟章〔名〕軍人などの制服の
襟に附けて、その所屬部隊を識別し易から
しむるもの。陸軍にては、各兵科各部の定
色又は所屬部隊の番號などを附け、海軍に
ては、海軍兵學校の生徒と海軍機關學校の
生徒とのみ、制服の襟に、小きき(えり)形
の記章を附す。

えりしめ 襟締〔名〕柔道にて、手又は稽古
著の襟にて、相手の咽喉を壓迫する動作。
えりしやう 襟章〔名〕軍人などの制服の
襟に附けて、その所屬部隊を識別し易から
しむるもの。陸軍にては、各兵科各部の定
色又は所屬部隊の番號などを附け、海軍に
ては、海軍兵學校の生徒と海軍機關學校の
生徒とのみ、制服の襟に、小きき(えり)形
の記章を附す。

えりどめ

所、えりとどまりたまひて」
えりどめ 襟止〔名〕著物の襟の交へ合せ
たる部分の亂れぬやうにするための金具。
えりどめ 選取〔名〕えりどること。より
どり。

えりどめ 選取〔名〕えりどること。より
どり。
えりどめ 選取〔名〕えりどること。より
どり。

えりどめ 選取〔名〕えりどること。より
どり。
えりどめ 選取〔名〕えりどること。より
どり。

えりどめ 選取〔名〕えりどること。より
どり。
えりどめ 選取〔名〕えりどること。より
どり。

えりどめ 選取〔名〕えりどること。より
どり。
えりどめ 選取〔名〕えりどること。より
どり。

えりどめ 選取〔名〕えりどること。より
どり。
えりどめ 選取〔名〕えりどること。より
どり。

えりどめ 選取〔名〕えりどること。より
どり。
えりどめ 選取〔名〕えりどること。より
どり。

えりどめ 選取〔名〕えりどること。より
どり。
えりどめ 選取〔名〕えりどること。より
どり。

えりどめ 選取〔名〕えりどること。より
どり。
えりどめ 選取〔名〕えりどること。より
どり。

えりどめ 選取〔名〕えりどること。より
どり。
えりどめ 選取〔名〕えりどること。より
どり。

えりどめ 選取〔名〕えりどること。より
どり。
えりどめ 選取〔名〕えりどること。より
どり。

えりどめ 選取〔名〕えりどること。より
どり。
えりどめ 選取〔名〕えりどること。より
どり。



(ざしきまりえ)

